中央ネパール

1965

Central Nepal himalaya geological and glaciological EXPEDITION 1965

探検をこころざす諸君へ

中央ネパール

Central Nepal himalaya geological and glaciological EXPEDITION 1965

中央ネパールヒマラヤ地質氷河調査隊

日本地質学会北海道支部派遣

隊長	酒匂純俊	(地質)
	渡辺興亜	(地質・氷河)
	石田隆雄	(地質)
	益田稔	(地質)
	伏見碩二	(地質)
	遠藤八十一	(氷河)
	市村輝宜	(植物)
	米田功	(写真)
	高松秀彦	(医師)
	小野田文彬	(渉外)

序

ネパール王国が世界にその門戸を開いて以来，どの位の登山隊や学術調査隊が訪れたことであろうか。それに属したある者にとって，ネパールは甘美な平和に満ちた静寂の地であったろうし，忘却と孤独の地でもあったろう。また，ある者にとっては，巨大にして複雑な騒々しき現実を知った地であったかも知れぬ。それぞれの人は，その経験を，想いを，他の人々に伝えるために，人間にとって有効な時間を費いやしたに違いない。われわれもまた，義務といってもよいその仕事を，ここに果したいと思う。

エクスペディションは複数の人間の集団である。われわれは，この書を，ひとつの公式的な報告書と考えているが，同時に10人の若者達が，ネパールで何を見，何を感じてきたかを個人的に語る場であるとも思っている。もしそこから，ある人の中にネパールに対する好意と理解が生まれたとするならば，またある人が，かの地を訪れ，かの地の人々と自然に接し，いまわれわれが試みようとする仕事と同じ目的のものをめざしたとするならば，無上の僥倖である。ヒマラヤへの道は，世界を旅し続けてきた老人が語るように，新しい喜びへの道ではなく，新しい苦悩へ通じる嶮阻な道であるかも知れぬ。しかしわれわれは，そこに発見し，創造したいと思う。そしてまた，それに無限にして普遍なる生命と個性を与えたいと希望する。それが，世界の人々が互に知り合うということの，地球をそして宇宙を理解しようとすることの一助にもなると考える。

この書を出版するまでには，数えきれぬほどの人々の御好意と御援助をうけてきた。それに報いるためには，まだ多くのことをしなければならない。いまはとりあえず，ここでそれらの方々に心からのお礼を申し上げる。

目　　次

紀　　行

ヒマラヤ地質調査行……酒　匂　純　俊…1
グスタング氷河への旅……渡　辺　興　亜…16

小さなキャラバン　―C隊の日記より―……石田　隆雄・米田　功…31
氷の島からヒマールへの旅……伏　見　碩　二…39
ガンダキの道 ――ドクター・ノート――……高　松　秀　彦…48
ネパール私観……石　田　隆　雄…52
ネパールや日本のことなど……クサンノルブ・タワ…63
つれづれならぬままに
　―自然と人との調和への想い―……小野田　文　彬…69

エクスペディション・ノート

遠征隊報告
　―ライト・エクスペディション試論として―……益　田　稔…79
記録写真について……米　田　功…95
　遠征日誌……101
　遠征にあたり御協力・御援助をいただいた法人および個人芳名録……105
Abstract……107
写　真：地質氷河関係写真　5葉
　一般写真　15葉
巻末折込：径路図および地質図

紀　　行

ヒマラヤ地質調査行

酒　匂　純　俊

ブトワール出発

空は晴れあがり，強い日光が照りつけている。

9月26日朝，われわれのキャラバンは動きだした。思えば，札幌の雪が黒ずみ，とけだして以来，今日まで実にいろいろのことがあった。今回の計画が，果して実現するかどうか，昨日まで常に不安がつきまとってきた。ただ，何人かの男の意慾と社会の感情がおりなすひとつの流れにのって，ここまでやってきた気がする。シワリークの山道を一歩一歩登って行くうしろで，これまでのことが，遠い過去となって離れて行く。

ヒマラヤの地質，それを自分の目で確かめ，自分の足で歩き廻って知ること，これは，地質屋ならば，誰にとってもやりがいのある仕事であろう。何故ならば，世界第一のこの山ができた事件—造山運動—は，45億年の地球の歴史の中で，きのう起きたもっとも華やかな出来事だからである。今からおよそ1億年あるいはそれよりも前に，ヒマラヤ山脈はもり上ることを始めた。それまで，そこには，テーチス海とよばれる浅くて大きな海が拡がっていた。その海からヒマラヤの山なみが産まれた頃—中生代後半から新世代前半—には地中海地域から中央アジア—ヒマラヤをとおって東インド諸島へと続く地域（地中海—ヒマラヤ変動帯）や，日本をふくめた太平洋の周辺地域（環太平洋変動帯）のすべてが，はげしい動きを行なった。これがアルプス造山運動である。

世界中の主要な山脈は，このアルプス造山運動によって形成されている。また，このような造山運動は，ずっと古い時代から何回か周期的に起っており，常に，地向斜といわれる沈降を続ける海が，やがて隆起に転化し，峨々たる山脈となり，ついには安定した地塊に移行するという法則性をもって行なわれている。それにともなって，さまざまな火成活動や変成作用という激しい地質現象が展開された。しかも，このような造山運動は，ただくり返されているのではなく，生物と同じように，地球の歴史とともに大きな発展進化をとげており，アルプス造山運動は，もっとも新しい地球の革命とされている。しかし，それがどのような原因でどういう機構のもとに行なわれ

たのか，まだよく解っていない。この問題の解明は，人間の住む大地や地球のもつ資源のことなど，人々の生活のあらゆる面につながっている。だから，この仕事は，地質学にとって，もっとも重要で，またもっとも困難な仕事となっている。

日本には，アルプス造山運動の代表的産物として，北海道の日高山脈がある。そこではすでに，造山帯の法則性に裏付けられた発展過程が明らかにされている。ヨーロッパのアルプス山脈は，その名がしめすように，この造山運動について，いち早く究明の手が行きわたったところである。1786年のモンブランの初登頂に貢献した H. B. Saussure の仕事を嚆矢とする地質の研究は，今日の造山論を産み，その壮麗な山なみは，独特な構造地質学を進展させた学派の根城となった。

では，ヒマラヤはどうなのか。山脈の威容からしても，そこには，汎世界的に行なわれたアルプス造山運動を代表する典型がなければならない。しかし，ヒマラヤの自然と社会は，長い間地質屋の到来をよろこばなかった。白い巨峰に魅せられた多くの男たちが争そって足をふみ入れた現在でもなお，世界の地質図に空白のまま残されている部分は広い。

ヒマラヤがこれから地球科学発展の舞台となることは間違いないであろう。

そこで，多くの地質屋が，そこに展開された造山運動の一頁でも実際に自分の手でひもといてみたいと思う。むろん，偉大なるヒマラヤは，小さな人間の意志などそう簡単に寄せつけはしない。だから，利口な地質屋は，真正面からとり組むことはしないかも知れない。しかし，少し無謀で冷静さの足りない地質屋は，とにもかくにもヒマラヤの岩肌にたどりつきたいと思った。そんな若い男が何人かいて今回の計画が生まれた。

ネパールヒマラヤに本格的な地質と氷河の調査隊を送り込もうという動きは，われわれが出発する2，3年前から，北大関係者の間にあった。しかし，遠征隊を組織して行くとなると，さまざまな障害が起るものらしく，実現しないでいた。今回の計画は，1964年の暮から大学院学生を中心に進められたもので，若い行動力と西ネパール遠征に参加した渡辺隊員の経験によるライト・エクスペディション方式がものをいい，順調なすべり出しをみせた。隊の母体は日本地質学会北海道支部と決まり，一方ネパール鉱山局の協力もうけられそうな情勢になった。

しかし，重大な障害がなかったわけではない。第1に，1965年3月にネパール政府からだされた突然の登山禁止令である。学術調査を含めた一切の遠征隊のアプリケーションを受付けないという。これについては，デリーにいた小野田隊員がカトマンズにとび努力した結果，旅行パーティにするということでパーミッションをとりつけることができた。また，日本からインドまで予定していた船が，日本寄航前に衝突事故を起し利用不能となり，

貨客船に分散して出発する事態が起きた。これは，不況のどん底といわれた当時，募金活動も思うにまかせなかったわれわれにとっては，相当な痛手であった。

われわれの隊は，大学の権威から派遣されたものでもなく，これといった経済的バックも何ひとつ持ち合わせていない。ヒマラヤの生いたちをさぐる仕事がどんなに困難な仕事か，そしてそれに対し自分達の力があまりにも小さいことも知っている。それにも拘らず，われわれがここまでやって来たことには，それだけの背景があった。それは，われわれが北海道の地質屋であったことである。日高山脈に，日本におけるアルプス造山運動の典型をみいだしたのは，北海道の地質屋である。ここ数年の間に，北海道の地質屋は，すでに3回にわたりヒマラヤの岩にハンマーをふるった。それらは，登山に付随したものであったが，地質調査を主眼とした遠征隊を送り込むのに充分なだけの基盤をつくりあげた。そしてまた，明治初年以来，北海道における地質屋の仕事は，開拓のつち音と共に未開の山野を跋渉することにあった。それは，今日なお泥くさき伝統として受けつがれている。

見よ，威厳に満ちたヒマラヤの山も，俺たちのために，ほんの少しばかり道をあけてくれたではないか。

シワリーク越え

標高にして300 m も登ったであろうか。ふり返るとガンジスの平野が際限なく広がっている。そして直下には熱帯の緑がこもるテライのジャングルが横たわる。われわれが今登っているシワリーク山地は，いきなり2,000 m 級の山なみを連らねる。たしかに，ヒマラヤが始まる感じである。

地球の歴史に関して，大陸漂移説というのがある。これは，地球上の大陸は，かつてひとつに纒まっていたが，次第にいくつかにわかれて，湖上を漂う筏のように移動し，現在の形をとったとするものである。これは，1930年グリーンランドの氷原に非業の死をとげたA. Wegener の発想になるもので，大陸の形の起源や，山脈および孤状列島形成の過程，あるいは古生物の分布や古気候などの事実を，実に合理的に説明する。この考えは，当時地球科学の分野で大きな波紋をまき起し，いくつかの賛成論や反対論が論争の場に出された。しかし，何故大陸が動くかということを決定的に説明できないまま，この説は1930年代の終りには立消えになっていった。ところが，1950年代の後半になって，岩石磁気学の急速な進展により大陸の移動量が量的に表現され，また今でも大陸は動いているという海洋底地質学の成果もあって，大陸漂移説は再び大きく浮かび上ってきた。

それによると，インドは，約3億年前までマダガスカル島と共にアフリカ大陸と接

しており，はるか南方にあったが，その後離れてインド洋上を7,000 km以上も北へ北へと移動した。そして遂にはアジア大陸と衝突した。その衝突したところがもり上ってできたのがヒマラヤ山脈であるという。インドの移動量は，大陸のなかでもっとも大きく，ジュラ紀以降1年間に数cmも北上したことになる。そこに世界最高のヒマラヤがそびえることもまた当然と考えることができるわけである。しかし，ひとかけらの石が語る太古の歴史を，ひとつひとつ地道にたずねまわる地質屋にとっては，あまりにもロマンに満ちた物語に聞える。

いま，強烈な南国の太陽に照りつけられながら，インド平原を見下し，彼方より迫りくる大地の姿を想像するとき，ともすれば妄想的神話の世界に落ち込みそうになる。大陸漂移説など，あるいは，インド哲学が説くところの人間の意志がえがきだした幻想なのかも知れない。それも，ヒマラヤにおける造山運動の本質がときあかされたときに解ることである。

若い男がこの日だけ記憶を喪失したのも，南国の太陽のせいらしい。キャラバン第1日目の宿泊地ドバンに着いたとき，市村がおかしいという。気分が悪いといって寝込んだ彼は，一時的にこれまでのことを忘れてしまったのである。高松ドクターの診断によれば，汗をかいた割に塩をとらなかったので，血中の塩分濃度が低下したためらしいとのことだった。彼は，次の日から黄色いヌン（岩塩）をガリガリかじりながら，わりと元気に歩きだし，少しずつ記憶を回復したが，キャラバン第1日目については，ついに思いだせなかったようである。かくて，彼の青春に小さな空白が存在する結果となってしまった。

最初の頃は，彼に限らず多くの隊員が，個性的な症状を呈して調子をくずしてしまった。2度目のネパール調査行という副隊長格の渡辺は，故郷に帰ったかのごとく大いに気を吐きながら，時に苦しんでいる。石田は，すでにキャラバン開始前からもの静かにくたばった。しかし，動き出してからの足どりは意外にたしかで安心させられた。益田は，なだめすかすのが最高の良薬のような症状である。そして，腹がへって元気のない連中は論外といわねばなるまい。

タンシンへの道

ブトワールからタンシンへの道は，ネパールでも有数の街道らしい。インドとチベットを結ぶ重要な交易ルートでもある。男も女も，額にひっかけた紐で三角の籠に入れた荷をかつぎ，10人前後の組をつくって，次から次と通って行く。昔の東海道の賑いもかくならんと思う。ただ，日本のいにしえの街道には，松や杉の並木がかもしだす日本的情緒がある。ネパールのこの街道わきに並ぶは，人間排泄行為の遺跡であった。

ネパールが初めての人間にとっては，見るもの全てが珍しい。しかし，珍しいことは，

ネパール人がわれわれを見ても同じである。出会う人間のほとんどが話しかけてくる。こんな山の中までくる以上，ネパール語をしゃべるのが当然といった顔をして，ペラペラまくしたてる。何を言っているのか解らないまま，こちらは同じ言葉をくり返す。

〝ジャパニ（日本人である）〟

〝タンシン　ジャヌ（タンシンに行く）〟

〝サルベシ（公共的な調査をしている）〟

これだけ言えば，たいてい納得して行ってしまう。これでも人に会うごとにくり返さねばならないのだから，しまいには本当に面倒くさくなった。

道は次々と山を越える。ときにふっと人がとだえる。人家もない。谷間の姿は，日本のそれとほとんど同じである。ハンマーで岩を叩くとき，北海道の山中で調査をしているような錯覚が瞬間的に通り過ぎる。それは，ヒマラヤの岩と日高山脈の岩が，それほど良く似ていることを意味すると思った。事実，調査の間中みることができた岩石は，一見日本でみなれたものばかりであった。自信のなさからくる不安が次第に消えるとともに，調査の眼が両者の類似点ばかりに集中するのはやむをえないし，また当然と考えた。しかし，悲しいかな，それが浅学な地質屋の大きな誤りであったことに気付いたのは，日本に帰ってからである。資料を調べる程に，両者の間には，いろいろな相違点が明らかになってきた。

日本人もネパール人も同じ人間であり，同じアジア人である。だから見かけは良く似ている。しかし，そのたどってきた歴史は，お互いの距離だけ異なっていた。そして，その国をつくる大地もまた同じ意味で違っていたのである。

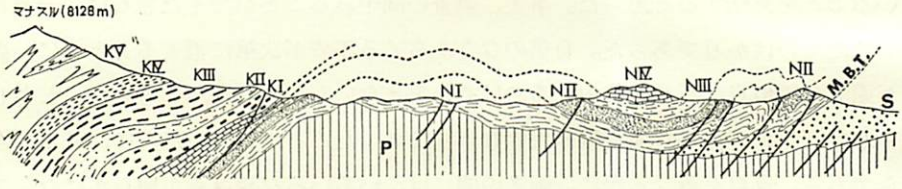
タンシンにて

ブトワールからタンシンまでは，2日の予定であったが，ポーターの足は遅く，結局3日かかった。2人分のかせぎをしようと，60 kg 以上もかついだのがいたためである。タンシンの街は，このあたり随一の都会で，バラ・ハキム（Governor）のいる地方政庁がある。ブトワールを出発するとき，これから10月上旬にかけては全国的な祭があるので，タンシンからのポーターは集まりにくいだろうと聞かされていた。案の定，祭の間，バラ・ハキムの声がかかっても，ポーター達はやってこなかった。ネパールには祭が多い。主都カトマンズでは，平均すると3日に1日は祭になるというが，その中でもこの祭は大がかりなものらしい。祭は，日毎に高まって行き，最高調に達したとき善が悪にうち勝つという。しかし，気の短い日本人にとってネパールの物事はまことに悠長に感じる。まして，先を急ぐわれわれにとっては，まさにうらめしい日日であった。いつ終るともなく続く単調な歌と踊りを眺めながら，悪の滅びる日の1日も早やからん事をドウルガの神に祈った

ものである。

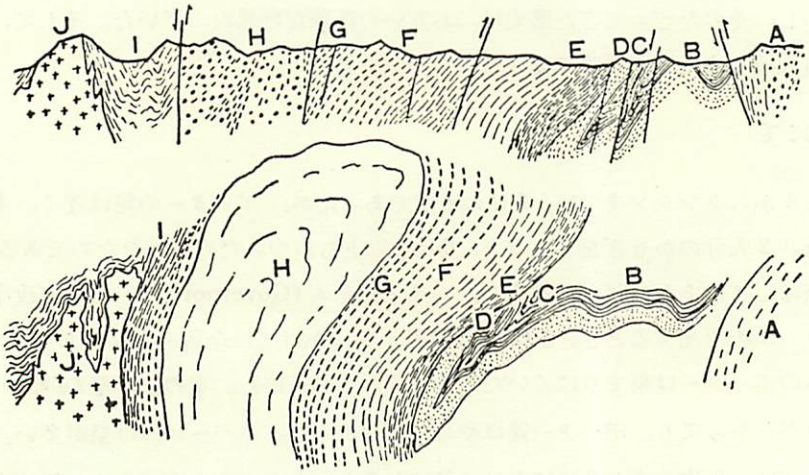
そんなある日，1人のフランスの地質屋が現れた。モンペリエ大学の教授，Dr. Remy である。シェルパ1人に長期契約のポーター2人をつれた身軽な旅を続けているらしい。聞けば，もう3度目のネパール調査行で，今回も3ヵ月あまり歩いているという。

ヒマラヤの地質に関する調査は，これまでほとんどがヨーロッパ人の手によって行なわれている。インドは，かなり古くから調査を続けているが，それとて英国系である。このため，ヒマラヤの地質構造については，スイス学派の流儀による考え方が支配的である。それは，ネパールヒマラヤについても例外ではない。1950年から8年間の間に，ネパール全土を14,000 km にわたって歩きまわった男がいた。スイスの地質屋 Toni Hagen である。彼は，ヒマラヤの山を上下に950,000 m も登り降りしなが



第1図a　Hagenによる中央ネパール地質断面図（略図）

K：カトマンズナッペ　P：ポカラ帯　M.B.T：シワリーク帯とヒマラヤ帯の境界衝上断層
N：ナワコットナッペ　S：シワリーク帯



第1図b　橋本によるカトマンズ—マナルス地質断面図

A：シェオブーリ片麻岩
B：ナワコート層群
C：上部ナワコート層群の変成した緑泥石片岩
D：下部ナワコート層群に当る雲母片岩
E：黒雲母片岩とざくろ石雲母片岩
F：ざくろ石雲母片岩と片麻岩
G：珪線石片麻岩
H：ミグマタイト
I：石灰質片岩，石灰岩などのチベット層群
J：マナスルの花こう岩

ら，ネパールヒマラヤの地質構造発達史を作り上げた。まさに，彼の業績は画期的なもので，その情熱と努力には心から敬服させられるものがある。

ところが，1955年の日本マナスル偵察隊に同行した北大の橋本誠二教授は，道すがらの調査結果から，Hagenの考察に対して大きなアンチテーゼを提起した。Hagenの考え方は，要するに，山脈は，烈しい横圧力によって地層がいちじるしく褶曲し，いくつかの推しかぶせ構造が発達することによって形成されたとする。これに対し，橋本教授は，そのような推しかぶせ構造の存在に疑問を持つと同時に，各種岩石の発達状況から，山脈の形成は，横圧力よりもそこに行なわれた深成作用に原因するもり上りを重視する必要のあることを強調した。

ネパール王国の地質調査機関としては，カトマンズの鉱山局がある。われわれは，日本出発前から連絡をとり，そこの地質屋と話をする機会をもつことができた。タンシンの衣料品店の弟もそこの地質屋で，祭のため帰郷したらしくわれわれのキャンプに何度かやってきた。アメリカの援助でできたというその鉱山局は，まだ一部の調査を開始したばかりであるが，新しいだけに，既成概念にとらわれることなく，独自のものを作り上げようという意慾を感じさせた。いくつかの調査結果など，提供をうけた資料のなかで，Dr. Sharmaは，西部ネパールにおいて，Hagenのいう推しかぶせ構造の存在をきっぱり否定している。

フランスのRemy教授すらも，話を聞けばHagenとはまた違った，2列の変成帯があるというユニークな考え方で仕事を進めているらしい。ともあれ，ネパールヒマラヤを論ずるために，われわれの知ることのできる資料はあまりにも少なすぎる。今はまだ，どこにどんな岩石があるかということすらよく解っていないのだ。Hagenが96本の地質断面図を作り，10,000ヵ所のスケッチをとったというネパールヒマラヤが，われわれにとっては処女地のようなものである理由は，ここにある。

さあ，一歩でも多く歩かねばならぬ。祭のロキシーに酔いしいれているのかポーター達よ。早くきて俺達の荷物を運んでくれ。

タンシンからバルコットへ

タンシンでの8日目の朝，鉱山局の地質屋の案内で，ラニガート付近まで調査にでかけようとしたところに，ポーターが集まったと知らせが来た。今朝方は1日20ルピーだといっていたのが，12ルピーでよいという。たちまち13人そろって全員が出発できることになった。そういえば，昨日列席した政庁での儀式は，善の勝利を祝うものだったのだろう。長い祭ではあった。バラ・ハキムと約束したその夜のスキヤキパーティーに未練はあ

ったが，そそくさと挨拶をすませ，あっけない出発となる。ドールパタンへ直行する渡辺・遠藤・高松ドクター・パサンダワ・シェルパの氷河隊とはしばしの別れである。渡辺は，途中地質調査をして行く筈だ。

われわれの調査範囲は，東西約150 km，南北約110 kmの地域で，目標は25万分の1の地質図を作ることにある。これまで一般に公表されているネパールヒマラヤの地質図は，フランスのBordetの手によるアルン河流域一帯の25万分の1地質図だけである。Hagenは，ネパール全土にわたる40万分の1地質図を示すことを約束したが，それはまだ発表されていない。ネパール鉱山局の調査も，まだ踏査図の段階である。

踏査図は，調査コースにみられる岩石の種類，特徴，構造あるいはまわりの岩石との関係などを記載したもので，これにより1つの線上の地質状況が明らかにされる。この踏査図を網目状につなぎ合わせ，地表部における地質状況を平面に表現して，はじめて地質図ができあがる。勿論，この網目が密であればあるほど精密な地質図ができる。これまで，いろいろなヒマラヤの地質断面図がつくられているが，それはたいてい線上の踏査図から判断してつくられている。われわれは，地質図を完成した上で，自信のある地質断面図をつくることを夢みたのである。

北海道の日高山脈がそのまますっぽり入る広さのところを，2ヵ月半位で歩こうというのであるから，調査中は最大限にわかれて歩くことを必要とした。それで，タンシンからは3班にわかれ，それぞれのコースを通ってドールパタンで落ち合う予定をたてた。順調にゆけば，氷河の上で再会の乾杯となる。そして再び3班にわかれ，調査の最終地点ポカラで集結する計画である。各班は，必要に応じてさらに分れてルートをとることにした。

こうして，わが隊は，日本を出るときからそうであったように，集まったりはなれたりの調査行となった。いつしか感傷的な旋律が，われわれの隊歌となった。

どこかでまた　いつか逢えるさ
泣かないで　泣かないで　さようなら

きれいな思出だきしめ
また逢う　また逢う　あの街で

リリコーラの小さな村で，1人の老婆がボロボロ涙を流して泣いていた。何故かと聞い

たら，兵隊に行っている息子から便りがあったそうな。今年の祭には帰れなかったが，来年は帰れるだろう。生水は体に悪いから必ずわかして飲んで元気にしていてくれとの便りがあったと。

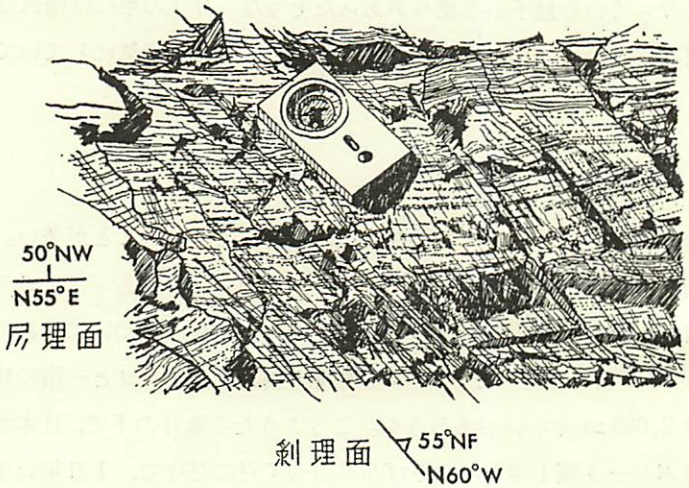
バルデンガリーをまわる

バザールのある部落以外では，必要な食糧すら購入できないことが多い。われわれを何よりも意気銷沈させたネパール語は，チャイナ！（無いよ）であった。タワ・シェルパを残して，益田と小野田と3人でバルデンガリーへ向った夜は，ついに泊めてくれる家もなく，水をもらうのが精一杯だった。テントも食糧も寝具も全てタワと一緒に残してきた身である。高度は2,000 m ぐらいであろうか。こうこうたる満月の下で，日本からたずさえたウィスキーのポケット瓶1本と，少しばかりのつくだにだけで，1日早い小野田の誕生日の祝宴となった。そのとき，空腹と寒さは現実であった筈である。しかし，その貧しさは，どうでもいい程ささいな事にすぎなかった。そして，夜露にうたれて眠った夜が明けたとき，その現実は確実に存在していなかった。目に映ったのは，谷間を埋めてひろがる雲の海と，厳としてたち並ぶダウラギリーアンナプルナの連山だけである。そのあまりにも清潔な白い肌は，朝日をうけて処女のはじらいのごとく赤みをおび，まぶしく輝いていた。

行程が進むにつれて，次第にヒマラヤらしい山肌が現れてきた。遠くから岩石にきざまれた節理がはっきりとのぞまれる。アルプスやヒマラヤの写真やスケッチによくでているやつだ。この節理を眺めれば，広い範囲にわたる地質構造が，居ながらにして解るというものである。しかし，足もとの岩をみたとき，それだけで物事は済まないことを知らされる。

バルコットからピウタン一帯にかけたあたりの岩石は，何枚にもはがれるような剝理をもった千枚岩である。ところが，この岩石には，剝理とは別に明瞭な縞がみられる。この縞は，黒色の炭質物の多い部分と灰色の石灰分に富んだ部分とでできており，この岩石が海底にたまったときつくられたものである。これは，ラミナといわれるもので，層理面をあらわしている。剝理が比較的一致した方向に並んでいるのに対して，この層理は，剝理とさまざまな角度で斜交しており，一定していない。地層が堆積したとき層理は当然水平であった筈であるから，このことだけから次の事柄がわかる。古代の海底に堆積した縞状の泥の層は，長い年月の間に粘板岩層となった。その後，大地の変動で，その地層はもり上り，褶曲し断層で切られ，複雑な構造をとった。その変動の最中に，層理とは関係なく剝理が形成され，千枚岩ができた。

つまり，遠くから望まれる褶曲構造は，初生的な地層の褶曲ではなく，全く後から



第2図　千枚岩の層理面と剝理面

形成された千枚岩の構造である。ここの千枚岩が，どういう過程をたどって形成され，現在の構造をとったかということを知るには，まず，初生的な地層が，どのように擾乱されていったかを明らかにしなければならない。それは，ラミナと剝理をこまかに測定していけば，解るであろう。しかし，これが片岩や片麻岩になるともう絶望的である。何故なら，それらの岩石には，ラミナのような初生的な構造が全く残されていないからである。しかも，同じ時に堆積したひとつの地層のある部分は千枚岩であり，ある部分は片岩や片麻岩となっている可能性は強いのだ。ヒマラヤ山脈南面の地質構造解析が困難なゆえんである。

切実なる現実ですら我々の実感として存在しないこともあるのだ。まして，ヒマラヤが生まれんとして胎動した頃の真実が，容易にその姿を表わす筈がない。先を急ごう。

アルカあたり

グルミ地方のバラ・ハキムの住むタンガスを過ぎ，高い山を越してアルカに着いたとき，様子はがらりと変った。昨日までは，ほんの少しではあるが，南から文明の匂が流れてきていた。それも高い山でさえぎられているのだろう。ここでは，火をつけるのも火うち石である。羊の毛をほぐし，指先で1本の糸をつむぎ，気長にハタを織っている。1枚の毛織物ができるまで，一体どれくらいかかるのだろうか。

高い山越えでポーターの足は遅く，彼等と一緒に歩いている小野田とタワも，今日は来そうにもない。益田と2人でとぼしいネパール語をつかって宿を探す。老夫婦に若い娘が2人の農家で，話が通じたのか通じないのか駄目だというそぶりもないので，軒先にねば

る事にした。意外やマカイ（トーモロコシ），ブトマス（枝豆），タルカリ付の晩飯と次々に馳走になる。だが夜は寒そうである。寝袋もセーターも遠くポーターと一緒だ。野郎2人が抱き合って寝るなんてぞっとしないと思っていると，娘が親切に新しい毛布を持ってきて使えという。何と気のいい連中だ。ついでに家の中で火にあたらしてくれないかなと思ったとたんに，中からピシャリと扉がしまり，かんぬきをかける音がした。次の日，朝食もたっぷりいただき，出かけに謝礼をしたい意を示すと，その年老いた主人は，大金を要求するかの如く，威厳をつくって大声を出したものである。〝エク・ルピー！（50円）〟。

再びタワを残し，シウリバングからコーラコーラと（川沿いに）一巡する。この付近は，結晶片岩が発達する地帯である。そして，問題の論争点，この片岩帯が北方のグレイトヒマラヤからすべり出してきた推しかぶせ地塊であるのか，あるいは単にこの地の下から衝し上げられたものなのか，いずれかに断定を迫まられるところである。これは，中央ネパール地域に発達する千枚岩，結晶片岩，片麻岩などがどのようにして現在の構造をとったかを知り，それら相互の関係をどのように理解するかによって決まる。しかし，そのために必要な資料をそろえることは容易ではない。

例えば，推しかぶせ構造説の大きな証ことして，向斜構造をとる地帯に深部相が発達することがあげられる。理くつからいえば，向斜部には浅部相が，背斜部には深部相が，それぞれ発達していなくてはならない。それが逆の関係にあることは，層序が逆転していることにほかならないからである。しかし，ここの向斜構造は，剝理や片理によってしめされるもので，2次的にできた見かけの向斜構造であることはすでに説明したとおりである。この片理の向斜構造は，衝上説によっても充分説明することができる。

さらに，推しかぶせ構造説を否定する材料として，向斜部の非対称性や，そこに発達するものと根もとにあたる部分との岩質が，いちじるしく異ることがある。だが，構造的に非対称褶曲がつくられることは，すでに19世紀後半に実験データを基礎にして証明済みである。構造的に非対称の褶曲ができることは，岩石形成のさいの力のうけ方が均等ではなかったことを意味するから，形成された変成岩の岩質が，場所によって異るのは当然のことであろう。まして，数10 km いや数100 km もはなれたところでは，岩質が違っていなければ，かえっておかしなことになる。

このように，多くの点でいずれかの考えを決定的に支持する資料はまだない。この種の論争は，ヒマラヤの構造に限らず，推しかぶせ構造説の本場であるアルプス山脈においてすら，いまだに続けられている。さらに，花崗岩や鉱床の成因など，地質学の分野では，100年以上にわたる論争の末，今なお結末がつけられていない問題は多い。

われわれとて，少しばかり歩いてこれらの問題を断定しようとは思わない。しかし，歩けば歩くだけその終着点は近くなる筈である。今日も高い山を越したとき，そこにはわれわれの知らない人々の生活があった。3日間山ひるにくいつかれながらの一巡は，知ることの喜びを倍加してくれた。先人が10 km歩いて知った事柄に疑問を持ったなら，鈍才は100 km歩けばいい。ヒマラヤの山は，十分にそれだけの価値をもっている。

ドールパタン

ありとあらゆるものに感謝すべきである。全てをたたえよう。いま，わが身はヒマールのふところにいだかれているのだ。これ以上何をいうことがある。巨大なダウラギリ主峰に従うジャイアントの群。けがれを知らぬヒマラヤ肌のつらなり。限りなくすみきった青い空すらも，その輝きをうけてかすんでいる。10月も末，ここ標高5,000 mの地はすでに冬である。新雪の合間に顔を出す草地には，咲き残ったエーデルワイスが冷い風にゆれていた。この自然が，あまりにも長かった地球の歴史の造形であろうか。いや，ネルタスの神のふとしたいたずらにしておきたい。アカデミアの森の精にうったえよう。われわれは神のしわざを冒瀆しようとしているのではない。ただひとつの幸いなる夢をみたいだけなのだと。

調査を終えた氷河隊と共にドールパタンに降りたとき，全員再会を祝う夜がやってきた。ネパールを歩いて1ヵ月半，予定の半分以上を終えたいま，各自の胸中にはそれぞれの感がいが流れているのであろう。静かなドールパタンの飛行場の闇の中に，隊員のそしてシェルパの歌声が流れていく。それは，いつ終るとも思えぬ宴のさざめきであった。

今日まで，調査は予想以上に順調に進行している。いく度か時間の無駄を余儀なくさせられたために，氷河の調査を縮小したほかは，調査に大きな支障をきたすようなトラブルもなかった。全くもってばらばらの調査行ながら，全ては計画どうりに動いている。むしろ計画以上といってもよいかも知れない。何故なら，このまとまりのないそして経済的余裕のない隊でありながら，不思議なほどに順調なのだから。隊員の間には，いろいろな不満は多くある筈である。しかし，その不満が潜在している様子もない。この分だと，明日から始まる後半の調査もうまく行くだろう。今日の酔心地は最高である。チベッタンの作るチャンの味は格別だ。あるいは，この身を包む幸福感に酔ったのかも知れない。

おお，キケロ曰く。〝計画と希望の一致ほど人と人とを固く結びつけるものはない。〟

カリガンダキを遡って

ドールパタンから東へ東へといくつかの峠を越して，ひと月ぶりにカリガンダキを眺め

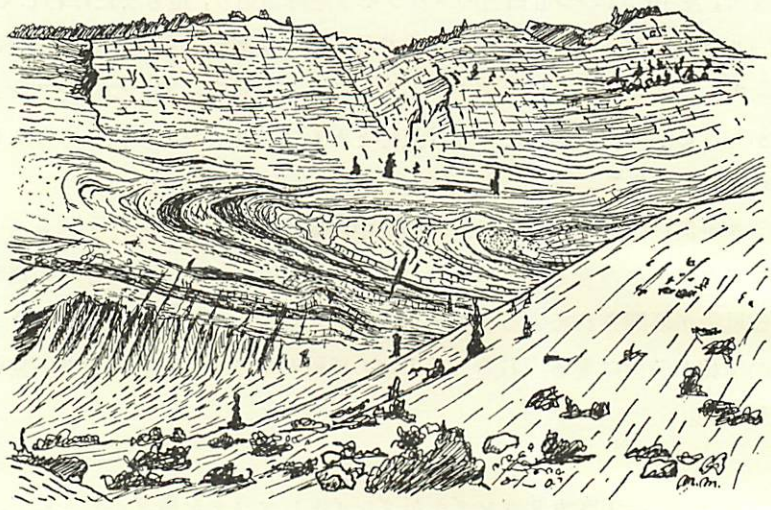
る。ここまで，左手にはいつも白雪のダウラギリ連峰が迫り，道もまたけわしく遠かった。あのヒマールは冬であったが，途中は深まり行く秋の気配に，収穫を急ぐ農民の姿も忙しそうであった。そして，ここにはバナナがなっている。見事に実をつけたスンタラ（ミカン）の木がしげる。何か救われたような気持とともに，ヒマラヤの大きさをあらためて感じさせられたわけである。

カリガンダキ沿いに北へ向うと，ロバの背中に塩や畜産物を積んだチベット人のキャラバンが，賑やかにかねの音をひびかせながら続々とやってくる。そこここの宿場で南の米と交換する風景が展開されている。チベットもそんなに遠くはないのだと思うまもなく，ガンダキの様相が急激に変る。石造りの人家の屋根が平になった。タカリー族の故郷タコーラに来たのだ。

このあたりは，丁度カリガンダキがグレイトヒマラヤを横ぎるところで，露出する岩石は片麻岩である。それは，結晶片岩よりも一段と変成度の高い，花崗岩に似かよった岩石である。ヒマラヤには，この片麻岩がかなり広く発達しているようであるが，われわれの調査地域には少なく，ほとんどが片岩であった。ヒマールの直下にきてはじめて現われたわけである。ここの片麻岩が，それほど優勢なものではないにしても，ヒマールの直下という発達位置からして，ヒマラヤの隆起と片麻岩の形成とが，やはり密接なつながりをもっていることが，容易に想像される。ほかの地域では，この位置に，より変成の進んだミグマタイトや花崗岩が発達しており，造山帯の深部相とされるものが現われているのである。

片麻岩帯をすぎると，ヒマラヤ帯の北側を構成して拡がるチベット帯になる。カリガンダキは，片麻岩帯を通過する間に大きく高度を上げる。そしてチベット帯の岩石が現れるあたりでは，膨大な量の河床礫に埋まり，幅1km以上もある広々とした河原をみせる。はるかかなたに見えるのがツクチエの街であろう。今は，この河原の中を真直ぐに歩いて行くことができるが，雨期には渡れなくなるらしい。河岸の山腹にモンスーンルートがある。この広い河原のすべてが，とうとうとして流れる水の下になったときのことを想像すると，ヒマラヤはまだ若く，いまもなお大きく変りつつあることが，実感として迫ってくる。

ここのチベット帯の岩石は，石灰質の結晶片岩や大理石などである。ドールパタンのあたりから，片麻岩帯を過ぎるまで，岩石の片理面はすべて北に傾斜していた。マヤンディコーラ上流付近の片岩帯はドールパタンあたりの千枚岩帯の上に，片麻岩帯はマヤンディコーラの片岩帯の上に，それぞれ北から南へ衝し上っているのである。そして，チベット帯も一見同じように片麻岩帯の上にのし上っているようにみえる。



第3図　チベット帯の褶曲

しかし，チベット帯の岩石で構成されているヒマールの斜面には，あざやかな過褶曲構造がえがき出されている。それは，大きくあるいは小さく複雑に折れ曲っているが，いちじるしい事は，初生的な地層をしめすと思われる石灰質の岩層そのものの構造であることである。これは，南の千枚岩のところでみた2次的な剝理面によってあらわされる構造とは，本質的に異っている。つまり，ヒマラヤ帯がもり上るときの力と，チベット帯が褶曲するときにはたらいた力とが，はっきり区別されるほど違うことをしめしている。氷雪に覆われた巨峰の北と南とでは，これだけの違いがあるのだ。山脈のもり上りが，地質構造の発達にどれだけ影響を与えているかが解ろうというものである。

違うのは大地だけではない。すべての自然が，そこに住む人間がその生活が違っている。ここツクチエの街には，ラマ教の経文をしるしたタルチョ（祈禱旗）がはためき，チョルテン（祈塔）がたちならぶ。宿で，はじめてのチベット茶やギー（バター）と蜂蜜とチーズの入ったロキシーを味い，チベットのかおりをたのしむ。しかし，外ではヒマールから直接吹きおろす乾燥した冷たい風が叫び続けている。チベット人の明るい表情とはうらはらに，荒涼たる不毛の地である。普通なら人間の住むようなところではないと思うのだが——。宿で聞かせてくれたタカリーの少女の歌は，あの遠い忘れたものを思い出させる日本のわらべ歌のように，たまらないほどの郷愁をよび起した。明日からは帰り道だ。歩くほどに日本は近くなる。

12月5日。こうしてわれわれは，当初の計画どおり調査を終了してポカラに集結した。2ヵ月半ほどの調査行であったが，ヒマラヤでなくては知ることのできない多くの資料を集めることができた。しかし，ヒマラヤは想像したよりも大きく，また想像したよりも繊細であった。そのため，末尾にしめすような地質図を完成することはできたが，これは充分に満足できるものではない。たとえば，日本でつくられているような精度の地質図は，やはり日本と同じ程度に踏査図の網を密にしなければならない。地層の時代のこともまったく不明といってよい。古生代と考えられていた地層から，新生代の化石が見付かったこともあるらしい。今思う事は，これから何回か，より充実した地質調査隊がネパールヒマラヤを訪れてほしい事である。われわれの資料はそれによって生かされ，問題は大きく深められるものと信じる。

また，われわれの収穫は，地質のことだけではない。ヒマラヤの山に根ざす自然のすべてが，われわれにとって必要なそして新鮮な資料となった。その大地に住む人々の生活や感情すらも，われわれの目的と無関係ではなかった。12月の空はそこぬけに明るく晴れ上っている。正面にそびえる端麗なマチャプチャリの姿とアンナプルナの連山を一望にみわたすこの盆地の，あまりにも恵まれた美しさは，すぐそこにある白い氷雪のおかしがたい厳しささえも忘れさせようとする。その中で旅を終ろうとしているいま，ときおり飛行場に発着するＤＣ—3型機の爆音が，満ちたりたまどろみの中に快くひびいてきた。

地質についての調査結果は，逐次学術雑誌に報告する予定である。これまでに，次の報告がまとまっているので参照していただきたい。

酒匂純俊・石田隆雄・益田　稔・渡辺興亜・伏見碩二（1968）中央ネパールヒマラヤの地質．地下資源調査所報告，第38号，北海道立地下資源調査所．

Sako, S., Ishida, T., Masuda, M., Watanabe, O. and Fushimi, H.: Geology of the Central Nepal.（地質学雑誌に投稿中）

なお，石田隊員は，隊の解散後独自に東部ネパールの調査を行ない，次の報告を行なっている。

Ishida, T (1968) Petrography and Structure of the Area between the Dudhkosi and the tambakosi, East Nepal.（地質学雑誌に投稿中）

石田隆雄（1968）東部ネパール産ザクロ石黒雲母の物理性質と変成度について．北大理学部修士論文．

グスタング氷河への旅

渡　辺　興　亜

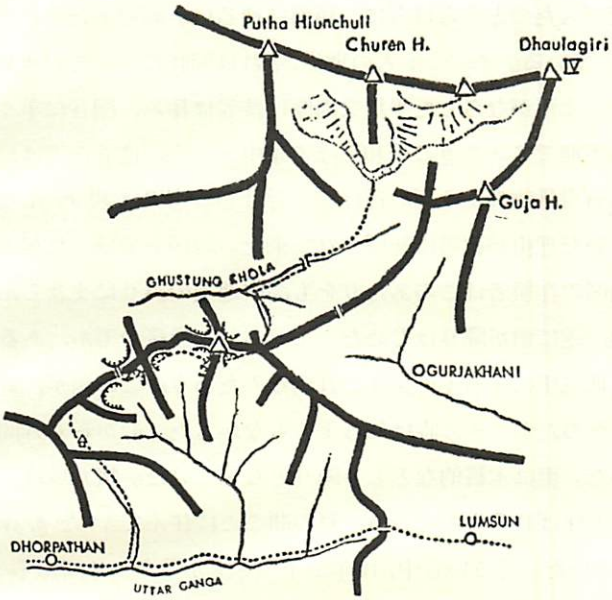
ダルバンよりグルジャゲートへ

10月16日，ダルバンの宿場の少しさきから登りはじめた道は思ったより長く，峠に着いたときは，かれこれ1,000 m近い標高差を登ったことになっていた。峠の反対側に，唐突に，いかにもヒマラヤらしい作法で現れたダウラギリの連山は，圧倒的なスケールで僕の前にあった。ダウラギリやアンナプルナ・ヒマールはインド平原にいた時から見えていたが，近づくにつれだんだん見にくくなり，ここ数日間は全く見ることができなかった。

これからの道は，しばらくダウラギリ連山と平行にはしっているので毎日豪快な景色を味う事が出来る。カリ河沿いの低地にいた時は，毎夜活動していた南京虫も，これからは少し寒くなるのでおとなしくしてくれるだろう。事実タルコンでの防戦以後，敵はすっかり鳴りをしずめてしまった。

10月18日，僕等はルムスン村に着いた。この村の名前は，日本にいた時からすでに知っていた。1960年ロバーツ大尉がここから道を右にとってグルジャ村に入り，チューレン・ヒマール，ダウラギリⅣ峰への接近路を探り，それを見出した事を，ヒマラヤン・ジャーナル誌に報告していたからである。1924～26年，インド測量局によって作られた25万分の1ネパール地形図は，高山地域でしばしば重要な誤りをおかしている。この辺りでも例外でなく，それは完全な誤りとなっていた。

地図上グルジャカニを通って西に向うマヤンデ・コーラの支流は，その源流をチューレン・ヒマールに発していることになっているが，実際はグルジャカニのすぐ西にダウラギリ連山から南にはしる支稜があり，これが分水嶺となり，チューレン・ヒマールから流れ出る河はベリ河（カルナリ河の支流）にそそぐ。つまりチューレン・ヒマールからの河は，一旦南に流れそれから西に流れをかえ，地図上の山を越えてベリ河にそそぐというのが真相なのである。河は山を越すことが出来ぬから，その支稜は実際は地図上の位置に存在しないという事になる。（第1図）僕等は当初，ルムスン村からロバーツの道をたどり，彼の発見したグスタング氷河に行き，そこを調査地にするはずであったが，ここまでの道で，グルジャカニでは人夫を集めるのは困難だという事と，ほんの1月前に英国空軍のダウラギリⅣ峰隊がドールパタンからその氷河に入ったという情報を得たので，僕等もドールパタンから氷河に向う事にしたのである。ドールパタンにはチベット人の避難民キャンプがあり，人夫を得るのは容易だということであった。



第1図　チューレンヒマール付近の地形

（注）この地域に関するインド測量局の地図の誤まりは，1965年に，J.O.M. Roberts によって既に発表されており，薬師編の Compiled map にも採り入れられている。
A.J. vol. LXXI. May 1966. NO. 312
J.O.M. Roberts の With the Royal Air Force on Dhaulagiri IV にこれとほぼ同じ地図が掲載（P. 85）されている。

ルスムンから道は急激な登りとなった。登りはじめると昨日まで半月以上も快晴が続いていたのに，それが一転して今にも降りそうな気配となった。もう雨は降るまいと昨日カサを荷物の中にしまいこんでいたので，ここで降り出したら厄介な荷解きをやらねばならぬ。それでも，時々降り出しそうになった雨も結局降ることもなく昼すぎ峠についた。

途中，ポカラまで買物にいった帰りのマガール族の3人組と親しくなったが，彼等は峠で道をいそぐ事をしきりにすすめてくれる。少しポーターの来るのを待つ事にして彼等と別れる。

僕等の氷河調査班は，3人の隊員と1人のシェルパ（パサンダワ）からなっている。通常は，地質調査をしながら歩く僕を除いた3人が，ポータの監督をする事になっていた。しかし，この日は高松ドクターが道の聞きこみにドールパタンに先行していたのと，比較的平坦な道では地質調査をしながら歩く速度とポーターの歩く速度が大体似ているので，全体としてはそれ程はなればなれになるわけでないのだが，今日の峠道のような急坂となるとポーターの速度が急激に落ちるので，結局隊が3つに分かれていた。11月に近い標高4,000 m は猛烈な寒さである。30分もポーターを待つと，もう寒さが我慢出来なくなってしまった。今日の宿場グルジャゲートまでは，ここから2時間も歩けば着く距離だ。先に行ったマガールがたき火でもしているにちがいない。そこで待つ事にしようと歩き出した。天候はますます悪化し今にも降り出しそうだ。途中久しぶりにチベット人の一家に会う。1年半まえに，彼等の中で生活したことがなつかしく想い出される。僕は合掌して「ナマステ」とチベット風アクセントを使って挨拶を送る。彼等は顔一面に微笑を浮かべた。子供が2人近よってくる。実になつかしい。子供は僕に近づくと両手を差し出し「ジガレ・レオ」（たばこをくれ）という。一瞬がっかりするが，僕は喜んで新生を2本プレゼントした。チベット人の世界にやってきたのだ，たばこ位やろう。

峠からの下り道は，登りが急坂だったのとうらはらに，傾斜はゆるい。峠のあたりや周囲の山は，明らかな氷蝕地形を示している。チベット人の世界，それは同時にかつての氷期に氷河が存在していた地域である。氷河がならした平坦な高原に彼等は住み，圏谷に羊やヤクを飼う。途中モミの林に入る手前でアメリカの平和部隊の連中と会う。彼等の姿は，今ではネパールのどこでも見られる点景物のようだ。行けども行けども宿場は現われない。マガール族の人達が道をいそいだ理由が次第に理解されて来た。地図上ではそれ程の距離ではないのだが，どうやら地図の作製者はこのあたりをも高山地域の誤りにまきこんでいたらしい。夕暮れがせまる頃，遂に雨が降りはじめた。モンスーン最後の雨か，あるいは地中海あたりからやって来た低気圧による冬の気まぐれ雨なのだろう。この雨が，最後まで僕等を苦しめることになったのだが，その時は知るよしもなかった。峠から4時間程歩いたとき，目指す宿場に着いた。雨は本格的などしゃ降りとなっていた。宿り場は，近くの村の夏の放牧地で，カルカと呼ばれるものである。夏の間ここに住んでいた人達は，もう自分の村に帰ってしまっていた。そこいら中，山羊か羊のフンが敷きつめてある。今日中にポーター達がここに着く事はあるまいと思いながらマガールの人達のたき火をかこむ。食糧もないし寝袋もない。今日は寒い夜をすごさねばなるまいと，マガール人の食事の準備をながめる。ヒエを煮，唐辛子と干肉と岩塩だけのタルカリ（御飯にかけるスープ）を作っている。粗末な食事だが，こちらはそれすら美味そうにみえるほど空腹である。僕はポケットの中の金を数える。2ルピーはあるな。これで今晩の食事にはありつける。食事の用意が出来ると僕がいい出す前に，僕の分の御飯もよそってくれ，今日はもうポーターは来ないとなぐさめてくれる。寝る時も一番上等な毛布を借してくれた。

僕等はついに氷河の世界にやって来た。標高3,500 mのこのあたりには現在氷河はない。しかし，かつての氷期に，このあたりまで氷河が存在していた事は，現在残っている特異な氷蝕地形によって明らかである。もし当時のヒマラヤを見る事が出来るとしたら，その白い部分はずっと下まで降りていたにちがいない。今僕等のいるこのあたりは，草も木も生育し得ない岩と氷の世界であった。

第四紀とよばれる最近の2百数十万年は，氷期とよばれる寒冷な気候の時期と間氷期と呼ばれる暖たかい気候の時期が（そのうちのいくつかは現在よりも暖かであったと考えられている）交互に現れた事を特徴とする時代である。現在，近代的な都市がたくさんあり，いろいろな国に色分けされているヨーロッパ大陸も，かつてはスカンジナビヤ半島に中心をもった大きな氷床によっておおわれていたといわれる。その当時の氷の量は，現在の3倍に及んだ。19世紀の後半にスイス生まれの地質学者ルイ・アガシー等によって，ヨーロッパに想像に絶する氷床が存在していた事を体系的に論

じはじめられて以来，多くの研究者が，第四紀の歴史を編む事に多大の努力を払い，現在ではヨーロッパやアメリカ大陸での様子はかなり詳しくわかっている。しかし，僕等の住む日本と同じアジアにあるヒマラヤ山脈—チベット高原—中央アジアにかけての広大な地域の第四紀の自然史については，漠然とした想像以上には何も明らかにされていない。日本での第四紀の研究が進むにつれ，伝統的にヨーロッパやアメリカ大陸との対比のみに心をうばわれていた研究者の中に，アジアのこの広大な地域の未知を明らかにしない以上，決して日本の第四紀の歴史を知る事は出来ないという新しい波が生じたのも決して偶然な事ではあるまい。ネパール・ヒマラヤ地域は，その巨大な未知のほんの一部にすぎないが，そのネパールでさえ外国人にその自然を解放したのはほんの10数年前にすぎないのである。しかもネパールを訪れた外国人の大部分の関心は，その魅力ある未登の巨人にあった。その自然に対する学術調査は，開国と同時に地道に続けられているものもあるが，それはほんの一部であり，氷河や第四紀に関心をもってネパールを訪れた日本人は，どうやら僕等が最初のようである。

ドールパタンにて

翌日雨は昼まで降り続いた。昼すぎにパサン・ダワがやって来た。昨日は峠の下で野営したという。峠では夜半から雪になったというから，夏の衣類しか持たぬポーター達にとっては地獄の寒さであったにちがいない。氷河までついて行くといっていたが，今日あたり逃げださねばよいがと案じていると，先陣の一団がやって来た。寒くてまだ何も食べてないという。今日はここまでだ。また1日無駄にしてしまった。翌日は，再び天候がくずれ，霙まじりの雨が降り続いた。昼すぎドールパタンのチーズ工場の前にテントを張った。まわりの山の3,500 mから上は真白になってしまった。賃金を支払うとポーター達は，文字通り一目散に彼等の村に向かって去っていった。最初は何やかにやと難くせをつけ賃金つり上げを計った彼等であったが，15日の旅を共にするうちに，すっかり気心もしれ，別れるのがさみしい。

10月20日から25日までの6日間は悪天候が続いた。朝方や夕方は晴れるのだが，日中は数度雨がやってくるという不安定な状態である。最初10月の初めに氷河に着き，本格的な冬の到来前に氷河調査の仕事を終える予定であったのだが，船の事故で日本脱出が遅れ，インド到着以降はその遅れをとりもどすべく，能率的な作業計画のもとに通関・輸送の仕事を進めたのだが，インド官吏に僕等のあがきが理解出来ようはずもなく，結局数千年の歴史がかもしだすインド的環境に埋没してしまい，哀れなのはあくせくゆく日本人という事になってしまった。そのうえタンシンではネパール最大の祭り〝デワリ〟に出喰わし一週間の停滞を余儀なくされ，ここで又悪天候とポーター集めのためにしばらく滞在せ

ねばならぬ破目になってしまった。朝夕の冷えこみさえ，冬の到来を想わせ，あせる心を刺激されたのだが，氷河への最後の1週間を目の前にしての停滞は，氷河での仕事が計画通り出来るかどうかという不安を一杯にしてしまった。

ドールパタンではたくさんの外国人に会った。その1人レミー教授はフランスのモンペリエ大学の地質学の先生である。僕等はすでにタンシンで彼に会っていた。タンシンに僕等が着いた翌日，1人の外国人がたずねてきた。よれよれのシャツにぼろズボン，インドで買ったという靴は質が悪く最早や使用不能寸前であった。目ざとくこれを見つけたタワ・シェルパは，我方のキャラバン・シューズの売りこみをした。今，再び僕等の前にやってきた先生は，そのキャラバン・シューズをはいている。2人のタマン・ポーターと1人のシェルパを連れての気軽な調査旅行をしている先生を見たとき，僕はこの位気軽な実行力のある教授を生んだフランス文化の深さを感じ，フランスに対し敬意を表した。「先生紅茶にしますか，オレンジ・ジュースにしますか」「この山の中でオレンジ・ジュースにありつけるなら無論オレンジ・ジュース」。

フランスなまりの英語と和製英語の会話は午後の日課となった。ある日，先生と近くの山に巡検に出かける。先生は遠くの山を眺めスケッチをし，地質図を作っていく。1万分の1の地質ルートマップを作りながら歩く僕等からみると，ずい分大ざっぱな調査だと思ったが，今のヒマラヤではこれは重要な調査法である事が後で解った。ヒマラヤにはヒマラヤに最も適切なスケールの調査法がある事を，アルプス育ちのレミー教授から学んだのである。

チベット人の避難民キャンプには技術指導のスイス人が4人いた。3人の無愛想な男と1人の看護婦さんだ。背の高いチーズ製造技師は，わかりにくい英語で指導の苦心を語ってくれた。日本のチーズに話しが及んだので，僕はわが雪印チーズと罐入りのバターを進呈した。彼はその完璧な包装に素直に敬意を表した。彼等が着いたとき他の3人は英国空軍隊のキャンプに遊びに行ったとかで留守であった。僕等がドールパタンに着いて3日後に帰ってきた彼等の話しによると，往きは3日程で氷河に着いたが，帰りは大雪のため5日もかかったという。僕の不安は一段と増したが，2，3日すれば雪もしまるだろうとひとまずたかをくくる事にしたが，この話しは一きょにチベット人の中に広まり，翌日はチベット人の示す賃金が急激な値上りをした。どうやら事態は級数的に悪化しはじめたようである。

氷　河　へ

10月26日，やっと3人のポーターが集まった。しかし，彼等を正式に雇うにはまずチベット人村の頭に挨拶するようにとのことなので村に行く。村に着くともう頭はどこかに

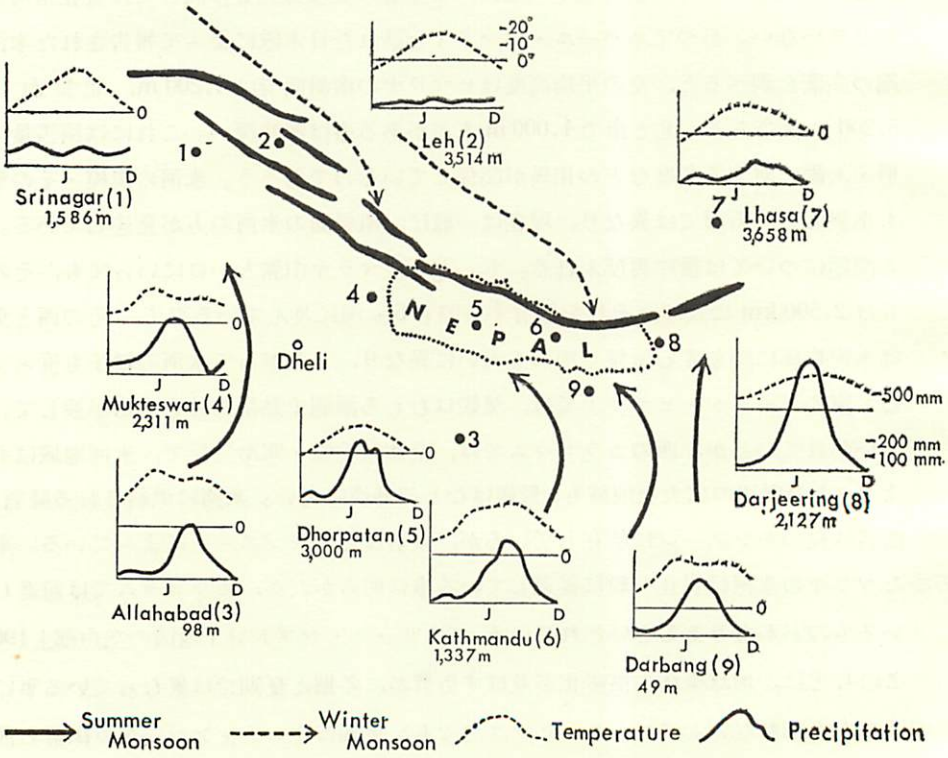
行ってしまった後であった。チベット人の世界にはいると，時にこのような策略めいた事が起る。しかし，ここで腹をたてても仕方がないので，先手を打って僕とパサン・ダワが6日分の食糧とテント，寝袋をもって先行する事にした。チベット人にヒューマニズム的ゆさぶりは利かぬわけでもないだろう。ドールパタンからすぐ北に入る沢を登る。道は十分に整備されている。2時すぎには4,000 m の高度に達した。盛りをすぎたエーデルヴァイスが可憐だ。このエーデルヴァイスはアルプスのものとは大きさも花の色も少しちがう。シェルパ族の人達は高地に住んで，氷河付近のアルプを牧場としているので，高山植物に対してもひとつひとつ名前をもっている。エーデルヴァイスはシァーチュンと呼ぶそうだ。押し花にしようと，その花をせっせとつんでいると，パサン・ダワがそれを見て，何故そんなものをつむのだという。「日本にはこの花はないんだ。これをあげると喜こぶ人がたくさんいるんだよ」パサン・ダワはその事が理解出来ないとみえて金になるのかとたたみこんできた。僕は笑うだけしか思いつかなかった。4,000 m の高さの広い尾根の上に出る手前から30 cm の積雪が現われた。先日のスイス人のシュプールをたどり，スイス人達のチーズ小屋に向う。

このあたりからの地形は完全に氷蝕によるものとなる。この高さでは現在氷河は存在していない。かつてネパール・ヒマラヤを訪れた日本隊によって報告された氷河末端の高度を調べると，その平均高度はヒマラヤの南斜面では4,200 m，北斜面では5,200 m 位である。北と南で1,000 m も差がある事は興味深い。これには積雪量・地形・太陽に対する角度などの相異が関係しているのであろう。氷河の規模・その形態も南斜面と北斜面では異なり，現在は一般に，南斜面の氷河の方が発達している。この問題については後に再びふれる。もっともヒマラヤ山脈と一口にいっても，その全長は2,500 km に及び，それを領有する国も6ヵ国に及んでいるので，その西と東では氷河形成に関与する気候や地形も大いに異なり，したがって氷河の様子も変っている。東のブータン・ヒマラヤでは，気候はむしろ湿潤で熱帯雨林と氷河が接しているといわれているが，西のカラコラムでは，全体に乾燥・寒冷気候で，氷河地域はもとより，その周辺の広大な地域も，景観はむしろ砂漠に近い。氷河に供給される降雪も，前者は夏のモンスーンに依存しているが，後者は冬のモンスーンによっている。東部ヒマラヤの氷河は現在一般に後退している事は明らかだが，カラコラムでは前進しているものがかなりあるといわれている。(エリック・シプトン「地図の空白部」1967) これなどは，地球全体の温暖化が及ぼす影響が，冬期と夏期では異なっている事によるのかも知れない。ネパール・ヒマラヤでも，東端のカンチェンジュンガ山群と西端のカンジロバ・ヒマール，アピ・ナンパ・サイパル山群では，ずい分その様子もちが

うが，全体としては，ネパール・ヒマラヤはその中間的な位置にあると考えてさしつかえないだろう。

ガスの中から忽然とヨーロッパ風の山小屋が現れた。この小屋を宿舎に使う事はすでにことわってあったので窓から小屋に入る。4,000 m の高地はさすがに冷える。暖炉の火が暖かい。

太陽によって最も暖められる赤道付近では，南北両半球から吹きこむ貿易風によって，熱帯前線が形成される。この前線は，太陽高度の季節的変化に伴なって変動し，北半球の夏では北に移る。海面よりも陸地の方が直射日光によって暖められ易いので，その変動は陸地の方がはるかに大きい。春になると熱帯前線が北上をはじめる。5月20～25日頃，セイロンに到達したモンスーン・トラフは，さらに北上を続け6月上旬にはネパールに達する。モンスーン・トラフがヒマラヤの山地に影響を及ぼす前を，プレ・モンスーン・シーズンと呼ぶ。ヒマラヤの巨峰が登られたのは主としてこの時期である。一般にモンスーン・トラフがヒマラヤの頂上付近にまでやってくるよ



第2図 ヒマラヤの気候

うに考えがちだが，モンスーン中，ヒマラヤの高地に滞在したスイス人の報告によると，モンスーンの雨が7,000mの高度に達するのは稀であるといわれる。事実，高層観測によると，インド洋上空で8kmの厚さをもっていた南西季節風も，インド上空では約3kmに減じ，ヒマラヤ山中では偏東風によって，北に移った偏西風とへだてられる。モンスーン・トラフがヒマラヤ山脈を越して北に上るという事はない。むしろヒマラヤが夏の季節風の動きを定めているといえる。夏のモンスーン・シーズンは6月から9月までで，その間氷河の涵養域に降雪をもたらし，たまにヒマラヤを乗り越える低気圧はチベット高原に恵みの雨をもたらすのである。太陽高度が低くなるとモンスーン・トラフは再び南下をはじめ，ポスト・モンスーンといわれるシーズンがはじまる。この頃のネパール低地帯は，暑からず寒からず，しかも空気の澄んだ旅行に絶好の季節となる。ヒマラヤの冬は，北東季節風の吹き出しを特徴とする。地上で観測するかぎりでは，それらの季節風は，チベットからモンゴルにかけてできる巨大な高気圧からの吹き出しと考えられるが，高層観測による3km上空の風の流れをみると，インド上空に亜熱帯高気圧が横たわっている事をしめしており，必ずしもチベット高気圧からの吹き出しとばかりは考えられない。

稀に地中海・トルコ方向からやってくる低気圧によってもたらされる降雨以外，天気は乱れることもなく寒冷な好天が続く。これがヒマラヤの冬である。僕等は正に，その冬のはじまりに氷河に向って歩いていたのである。

翌早朝，スイス小屋を発った僕等は，アンナプルナ・マナスル山群からカンジロバ・ヒマールまでの中央ネパールすべての巨峰がモルゲン・ロートに輝く中を，氷河に向って歩き出した。スイス人がネパール人の小屋と呼んでいる小屋をすぎると，道は再び急な登りとなった。このあたりの積雪は50cmを越え，時折り残っているシュプール以外どこが道だか判然としない。7段もステップ（圏谷底）のあるカールを横に見て右手の尾根を登った。日本では3段以上の圏谷底のあるカールを見る事は出来ない。帰りに測量する事にして，道をいそいだ。稜線に出ると道は全くわからなくなってしまった。この付近の地形図は全くデタラメなので勘に頼って歩くより仕方がない。「パサン，道はどこだと思う。何か見えないか」彼は地元の人間のくせに何を聞いても知らないと答える。彼にとって，僕は，万能の方向探知の力をもつサーブか，あるいは今さら何をいっても仕方のない程うろたえたサーブかのいずれかであるのだろう。僕は腹を決め，ともかく北へそしてより高い所に行く事にした。ガスが晴れてシュプールが見つかるかも知れないし，まちがっていても下るのはたやすい事だ。氷河がここより北にある事も間違いない。北アルプスの稜線のような所に登りついたが尾根はふたつの方向に分かれている。ともかく北の尾根を行く事にし

た。その尾根は北にいくにしたがい，次第に高度を減じ結局カールの中腹に出た。そこで再び足跡を見つけたがすぐ見失なってしまった。しばらく行くと雪の中に大きな岩が見つかったので，今夜はそこで寝る事にした。高所影響のせいか無精に喉が乾く。ここの高度は5,000mに近い。ローソクで水を作り，簡単な夕食をすますとガスが晴れてきた。そこはカールの真中で，ひょっとしたら今日越したかとも思っていた，氷河までの最大の峠が行手に黒々と現われた。

今日は結局5つの圏谷を横切った。これらの圏谷のあるものは，その源頭で5,000mに達しているものもあるが，氷河は現在残っていない。これ等はいつ頃作られ，いつまで氷河が残っていたのであろうか。第四紀と呼ばれる最近の2百数十万年の間には4つ（ドナウ寒冷期をいれると5つ）の氷期があった事がわかっている。それ等は古いものから（ドナウ）・ギュンツ・ミンデル・リス・ウルム氷期と呼ばれている。最も新しいウルム氷期（主ウルム亜氷期Ⅲ）は，今から約1万年前に終り，現在は後氷期であると考えられている。現在の人間にとって，それではこれから再び氷期が訪れるのかどうかという事は最も関心のあるところだろう。だが今のところはっきりした事は解っていない。せめて現在の地球が暖かくなっているのか，その反対なのかという事位はっきりさせたいところだが，これも正確には解っていない。南極大陸での氷収支の研究によると，いずれも乏しい資料ながら，大勢は氷収支は平衡しているという説が現在のところ有力である。問題の解明にとっては，間接的手がかりではあるが，そのうちこの問題もはっきりしてくるであろう。

今日，僕等が横切ったカールは，その地形の解析度や規模から見て，ほとんどウルム氷期の産物と考えてよいと思われる。少し古くしてもリス氷期（15万年前に終る）までであろう。それらの形成時期を明らかにするのが僕等のひとつの目的ではあるが，河岸段丘や他の氷河形成物の資料を考え合せても，この程度の事しか言えないのが実情である。ヒマラヤの場合は山脈そのものの，第四紀に入ってからの上昇をも考え合せねばならないので，第四紀の編年は一層困難な仕事である。ヒマラヤ南斜面の前山に残る氷河遺跡と北斜面のそれとを比較して，大変興味深いことは，前者が後者にくらべてはるかに規模の小さい事である。氷河作用によって形成されたり，取り残されたりする地形には，カール（圏谷）・U字谷・氷蝕平坦面・氷蝕段丘・種々の堆石堤などがある。これ等の分布を詳しく調べ，その形成順序を組み立てると，かっての氷期における氷河の姿をある程度まで復元する事が出来る。一般に氷河は，もし地形や気候的条件が許せば次のような順序で，現在グリーンランドや南極に見られるような氷床まで発達する事が出来る。（フリント 1960）

圏谷氷河⇔谷氷河⇔山麓氷河⇔氷床

これらの順序は可逆的であり，又どの段階まで発達するかは，先にのべたように地形や気候条件で決まる。現在のヒマヤラ南斜面では，谷氷河までの段階であり，北斜面では圏谷氷河か又は小規模な谷氷河までしか見られない。しかしながら，過去の氷期のヒマラヤの姿を復元してみると，前者は現在より少し規模の大きい谷氷河（勿論雪線降下によって，現在よりはるかに低高度まで氷河が存在した。）までしか発達していないにもかかわらず，後者（チベット高原を含めて）は氷床の段階まで達していた事が明らかとなった。現在はそれとは全く逆になっているのであるから，氷期の終了時に（それがいつの氷期かという厳密な吟味はさておいて）降水機構又は大気循環あるいはヒマラヤの高度のいずれかに逆転的な転換をもたらすような変化があった事を想像せねばならない。先に現在のヒマラヤの気候についてふれたが，それはあくまで現在の状態についていえる事であって，もし気候が寒冷化した場合それがどう変化するか，もしヒマラヤが今より1,000mも高度が低かったならば気候はどう変化するか，それは誰にも分っていない事なのである。ヒマラヤの氷期の氷河と現在のそれとで，場所によって規模が異なっている事と，氷期における気候変化の問題は全く無縁ではあるまい。このようにヒマラヤの氷河を調べる事によって将来ひき出されてくる問題は，アジアの古気候の問題や，氷期の原因にまで及んでくる事が予想されるのである。ヒマラヤは，その美しい巨峰と共に，巨大な未知の宝庫をもっており，人間の叡知の及ぶ日を待っているのである。

グスタング氷河

今朝（10月28日）も快晴とともに夜が明ける。寒さの匂のするあの寒さだ。昨夜，黒黒と見えた峠は，明るくなってみると，思ったより高そうだ。ピッケルを突きさし，靴をけりこんで足場を作りながら登る。この道なら荷物をもったポーターにはまず無理だろう。このことは，つまり僕等の兵站線が切れた事を意味するのであるが，その時は稀薄な空気の中で，ぼんやり考えただけであった。5,200mの峠に達した時には，ポーターも何んとか越せるであろうという楽観的考えを無意識に変え，下り道をかけ降りた。いきなり1,000m近い高度を下ると再びタンネの林が現れた。今日は焚火が出来る。そうすればビスケットばかりの食事からおさらばだ。降りたったせせらぎで3日ぶりの水を腹一杯に飲んだ。ここからはヒマラヤン・ジャーナルで読んだ道だ。頭に描いていた情景よりはるかに明るい谷であった。しばらく沢沿いに歩いて一休みした時，ザクロ石をたくさん含んだ花崗岩の転石を見つけた。久しぶりにハンマーを振って適当な大きさのものを取ろうと思

っているうちに，それにすっかり熱中し，それ以上進む気持がなくなってしまった。石拾いにもあきて，久しぶりの暖かい陽光を楽しんでいるうちに睡ってしまった。パサン・ダワが着けば焚火だ。そして暖かい夕飯にありつける。

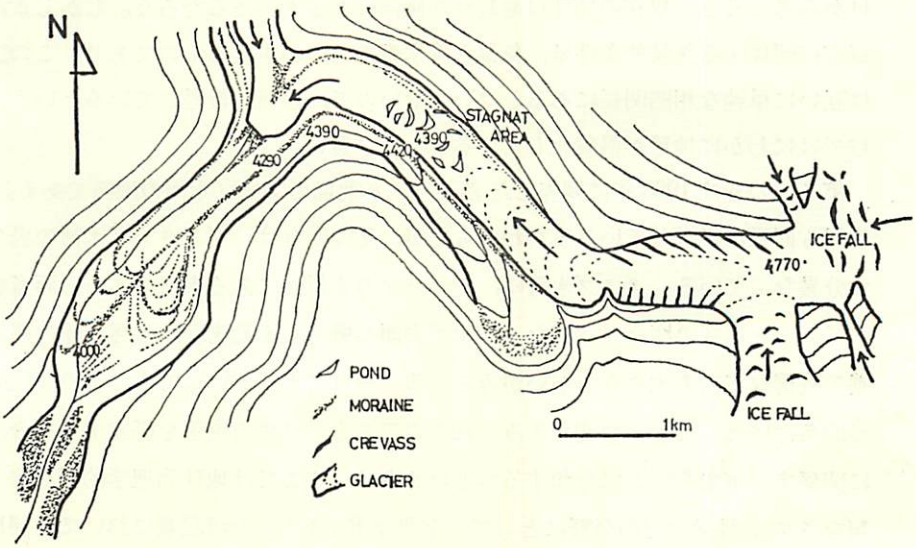
テントをたたんで歩きはじめるとすぐ広い放牧地に出た。そこからヒマラヤ杉の林を数100 m グルジャ・コーラに向って下る。グルジャ・コーラをさかのぼっていると，スイス技術援助団のシェルパに会った。氷河にはまだイギリス空軍隊がいるという。ダウラギリⅣには登れずあと数日でキャンプをひき払いポカラに向うとのことである。こんな奥にも羊を放牧に来るのだろう，細い踏み跡が続いている。氷河が近いわりには氷蝕谷らしいものが現われない。グスタング氷河もその最盛期においてさえ，さほど大きく発達しなかったのであろう。4,000 m 少しの高度なのにやたらと息苦しい。これから数年いや10数年と続くヒマラヤ研究の展望に想いを馳せ，息苦しさをまぎらわせているうちに，突然前が開け，巨大なエンド・モレーン（端堆石堤）の丘が現われた。そこから見えるモレーンの丘は，その後にチューレン・ヒマールの3,000 m の壁が見えなかったら，小高い山と見誤った程の大きさである。イギリス空軍隊のキャンプも見えはじめた。とりあえずそこを通りすぎ，少し上手にテントを張った。テントを張り，一服したところに1人のネパール人がシェルパを連れてやって来た。英国隊の連絡官（リェイゾン・オフイサー）らしい。「How do you do」連絡官は英語で挨拶をした。「ナマステ」と答える。「君はネパール語が話せるか」「アリカテ・ネパールクラ・ブッチャ」(少しなら話せる)「……」「？」「そんなネパール語は小生にとって理解困難である」「あなたはどこの人ですか」「日本人です」「パスポートを見せて下さい。許可書は」「これこの通り」「シェルパと君と見分けがつかなかった。ところで此処で何をしますか」「科学的調査です。そのうち他に二人の日本人がやってきます」「君を英国隊に紹介しよう」「それは御親切に」というわけでその夜，僕は英国隊のごちそうにありつけた。有名なロバーツ大佐は人夫集めに下に行っているとかで会う事が出来なかった。

氷河の夜は猛烈に寒い。夏用シュラーフにシュラーフ・カバーだけの寝具では4,000 m のヒマラヤ初冬の寒さを防ぐのは少し無理であった。しかし氷河にたどりつけた喜びは，この位の寒さの苦痛をはるかに凌駕していた。一編の紀行文を頼りにたどりついたグスタング氷河は，少し汚れてはいるが堂々たる氷河である。

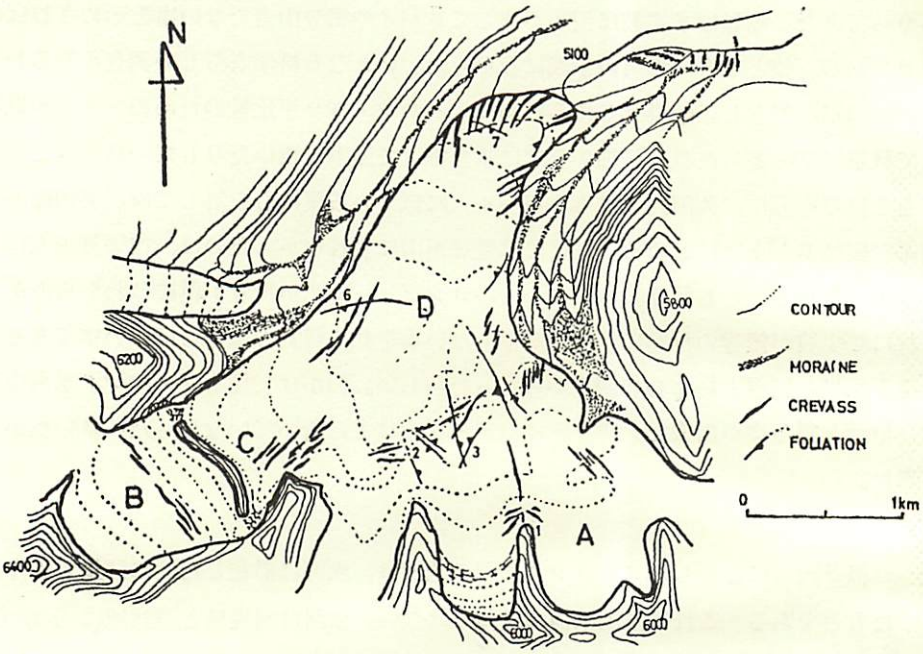
氷河での第一日は，チューレン・ヒマールの頂上を照らす朝日ではじまる。そこから僕等のテントまで3,000 m はある。うす茶色の石灰岩の壁はしだいに朝日に染まり，長い時間の後にテントまで降りて来た。朝日は明るさと同時に，最初はほのかな，そして次第に強烈な暖かさをもたらし，結局人を寝袋から追い出し，最後にはテントから追い出してしまう。食糧節約のために半食分の粥を食べたところに完全装備のラナ・バハドゥール大尉

がやってきた。今日はまず彼に僕等が決してスパイや密登山者でない事を示めさねばならぬ日である。彼とともに氷河の末端にむかった。いきなり科学者らしい調査をやるわけにはいかぬが，彼をして納得せしめるために，パサン・ダワを比較のためのスケール風に使って風景写真をとったり，仔細ありげに氷を掘って漫画を画いたりして一日をすごした。打ちとけるうちに，英国人よりもネパール人に似ている僕に心を許しては，英国隊のうっぷんを僕にぶちまけはじめる。最後には彼等が山に登れなかったのは，彼等英国人に勇気がなかったからだとも言う。ネパール人のコンプレックスか反骨か僕にはわからぬが，いずれにせよ彼が僕等の行動に干渉しそうもない事を知り得たのは喜こばしい事である。今日の視察は，監視と好奇心の両方からだったらしい。おかげで僕もグスタング氷河の全般的な概念を得る事が出来た。テントにはポータ達はまだ着いていなかった。寒い夜がやって来た。

第3図aにしめしたグスタング氷河の地図は，氷河に滞在した間に測量して作製したものである。これは無論氷河の全体ではない。氷河は涵養域と消耗域に分けられる。その境界は雪線とよばれる。ここに示された部分はグスタング氷河の消耗域である。ここでは氷河の氷は水や水蒸気に変るだけで，新たにつけ加わえるという事はない。氷河の末端は，もしその氷河の収支（それは会計年度内の収支と似ている）の均り合いがとれている場合，前進も後退もせず，エンド・モレーンという構築的な堆石堤を作る。グスタング氷河の末端付近，数100mの様子は，現在氷河が急速に後退し



第3図a　グスタング氷河



第3図b　タ　ク　プ　氷　河

ている事をしめしていた。土砂まじりの融け水が，30m程の氷の崖をなす末端からたえまなく落ちている。東部ヒマラヤの氷河のほとんどが現在後退し続けている事が，登山隊などがもたらす氷河末端付近の写真から読みとれる。アラスカやアルプスも同様に後退しており，この傾向は一部を除いては，ほぼ汎世界的ともいえる。この点だけから考えると，現在の地球は温暖化の傾向にあるといえるだろう。しかし氷河の氷収支に関係する気候的条件は，気温と降水量の二つが主たるものであり，この二要素は互いに単純な相関関係にあるとはいえないので，氷河が後退しているということだけではにわかに地球が温暖化しているともいい難い。

第3図のbは1963年に調査した西ネパール北部のタクプ氷河の地図である。この氷河も同様に後退している事がわかったが，その度合は，グスタング氷河の場合とは大分異なっている。タクプ氷河は，ヒマラヤの北斜面にある氷河である。両者をくらべてみると消耗の度合だけでなく，氷河表面の構造，流動速度，氷河全体の構造，函養の機構などにも大きなちがいがみられる。一口に氷河といっても，その気候的，地形的条件によって大きな変化がみられるのである。自然の現象を研究する場合，それに関係する事象をいかに分類するかという事は（ここでは地球物理学的な意味での分類をさす），科学のどの分野にとっても重要な事であり，氷河記載においても同様である。1948年スエーデンの氷河学者アールマンによって提案された地球物理学的分類

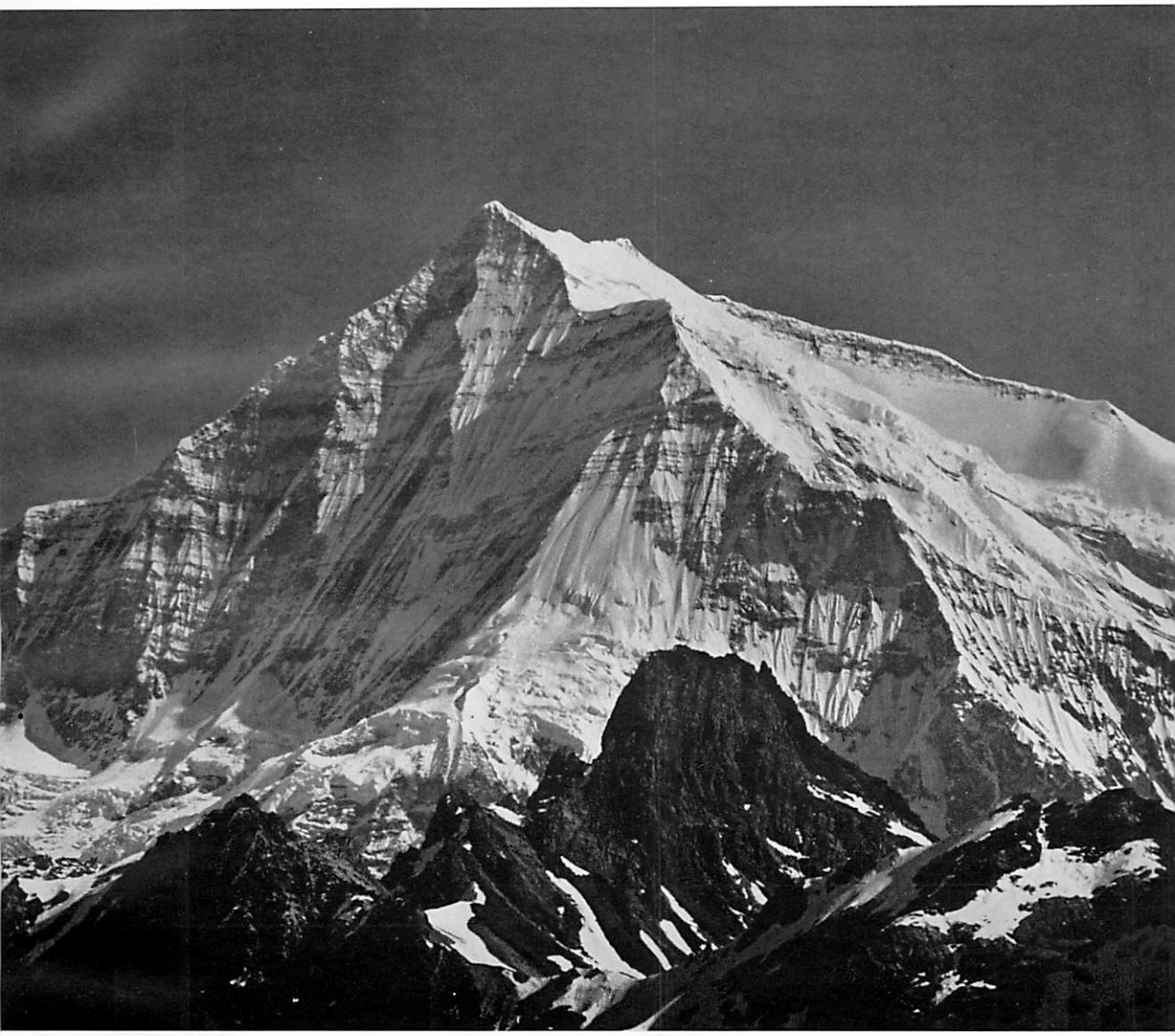
は，氷河における温度の重要性を認め，氷河を極地氷河・準極地氷河と温暖氷河に分けるとしたものである。前者の典型的なものとして南極やグリーン・ランドの氷河を，後者の例としてアラスカやアルプスの氷河をあげている。しかしこれにも矛盾がないわけではない。例えばグリーン・ランドの氷河の場合，高緯度・高所のものは明らかに極地氷河の範囲に入れられるが，緯度や高度が低くなるにつれて，準極地—温暖氷河の範囲にはいる部分が現われてくる。ヒマラヤの場合にもその矛盾は明らかに存在する。例えば頂上付近は年間を通じて極めて寒冷である（−10°〜−30°C)。しかし末端付近では氷の温度は0°Cになっている。それだと，ヒマラヤの氷河全体を温暖氷河だとか極地氷河だとかに分類する事は出来ない。その矛盾を解決するためにC・S・ベンソンは1962年にダイアゲネテイック相という概念を提案し，それによってひとつの氷河をいくつかの相に分け，ひとつの氷河をひとつの分類名で呼ばなくてもよいような，より合理的な分類法を考え出した。しかし，これとて完全なものではない。この相による分類はその積雪層についてのみ厳密性をもっているが，氷体内部については，適用することは出来ない。そういうわけで現在のところ，氷河の分類はもう一歩という状態にある。ベンソンの分類法は，少し粗雑なのでアールマンの分類法をもってヒマラヤの氷河を分けるならば，南斜面の氷河はより温暖氷河的であり，北斜面の氷河はより準極地〜極地氷河的といえる。このような違いは，氷河をとりまく気候的・地形的条件（この場合はとりわけ気候的条件がきいている）を反映するものであるから，現在のヒマラヤの氷河を詳しく調べる事によって，逆に地形と気候の関係や，氷河の形成条件などを明らかにする事が出来るのである。われわれはこのような氷河学の方法論に対し比較氷河学ということばを用いている。この比較氷河学にとって，ヒマラヤはまさに絶好なフィールドなのである。緯度や高度がさほど違わないにもかかわらず，ヒマラヤの南北両斜面の氷河には対照的な要素が多いからである。しかも，その関係は，すでにのべてきたように，氷期においては逆になっていた可能性も，現在の野外現象から読みとることができるのである。ヒマラヤの氷河については，まだ多くの事が不明のまま残されているが，興味ある多くの未知と，世界の他の場所における同様の未知を解き明かす鍵をもっている事については，明らかであると確信している。

数日間氷河末端のテントでポーター達の来るのを待ちながら，氷河の観測や測量に日を費いやしたが，ポーター達はやって来なかった。6日目には帰りの食糧を除いて何もなくなってしまった。4日分の食糧を9日にのばして，さらにポーター達の来ないのを見込んで非常用食をとってあったので，1日分を3日分にするような状態である。毎日腹が減っ

て仕方がない。しかしこの位の事は，日本からわざわざここまでやって来た事を考えると何んでもない事なのだが，氷河に到着して6日目にはさすがにまいってしまった。全くいやな事ではあったが，英国空軍隊にわけを話し，食糧を少し分けてもらった。それがレーズン入りのオートミルとチョコレートだったので，それからしばらくは明けても暮れても甘い生活が続いた。

11月4日，もう僕等以外誰れもいない氷河をあとに，再び訪れる日のある事を期待しつつ，全部の隊が集まっているであろうドールパタンに向け帰路についた。岩角をまがった時2頭のカモシカがほんの数メートル先で草を食べていたが，僕等を見つけるやものすごい勢でチューレン・ヒマールに続く岩尾根をかけ登っていった。チューレン・ヒマールの頂は今日も紺碧の空にくっきりと映え，すこしそり気味の3,000mの壁は圧倒的なスケールで僕の目に入る。首が少し痛くなるまでその巨人を眺めた。

調査の結果については，次の報告を行なっているので参照されたい。
渡辺興亜・遠藤八十一・石田隆雄（1967）ヒマラヤの氷河について　I，—ネパールヒマラヤの二つの氷河—．低温科学，物理篇，第25輯，北海道大学低温科学研究所．



チューレン・ヒマール

3,000 m のヒマラヤ肌の壁に見える縞は，チベット帯の石灰質岩層の層理である。

ヒウンチュリ　　チューレン・ヒマール

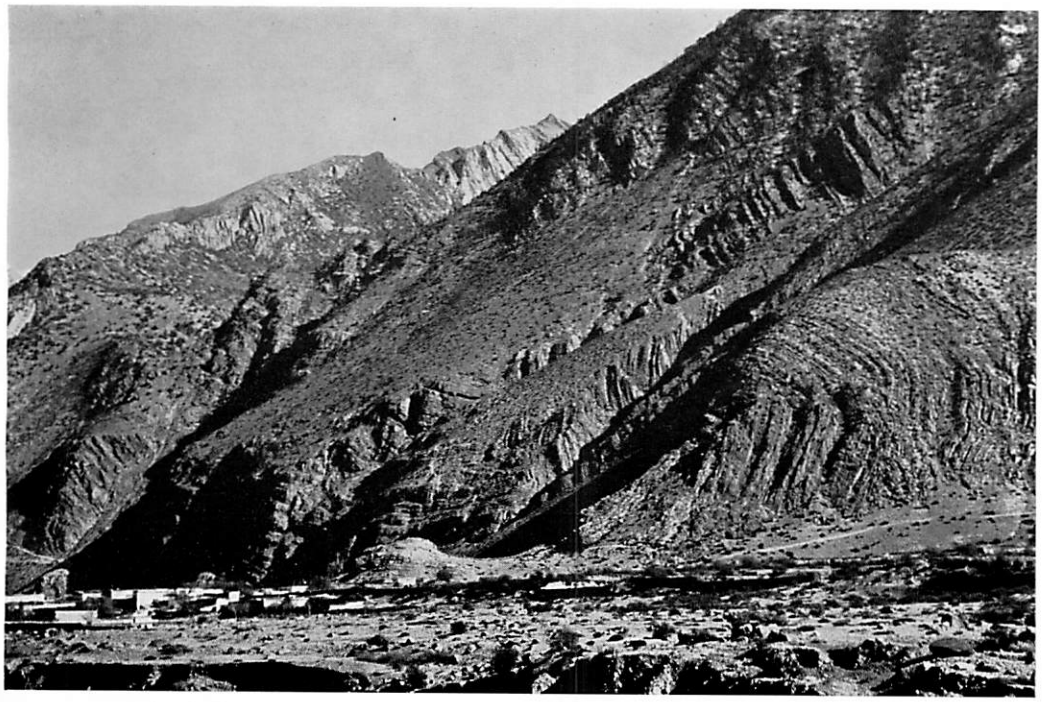
ダウラギリ連山

ヒマールの稜線部はチベット帯で，前山との間に片麻岩帯が発達している。手前は，絹雲母片岩帯である。

雲母片岩の単斜構造による地形

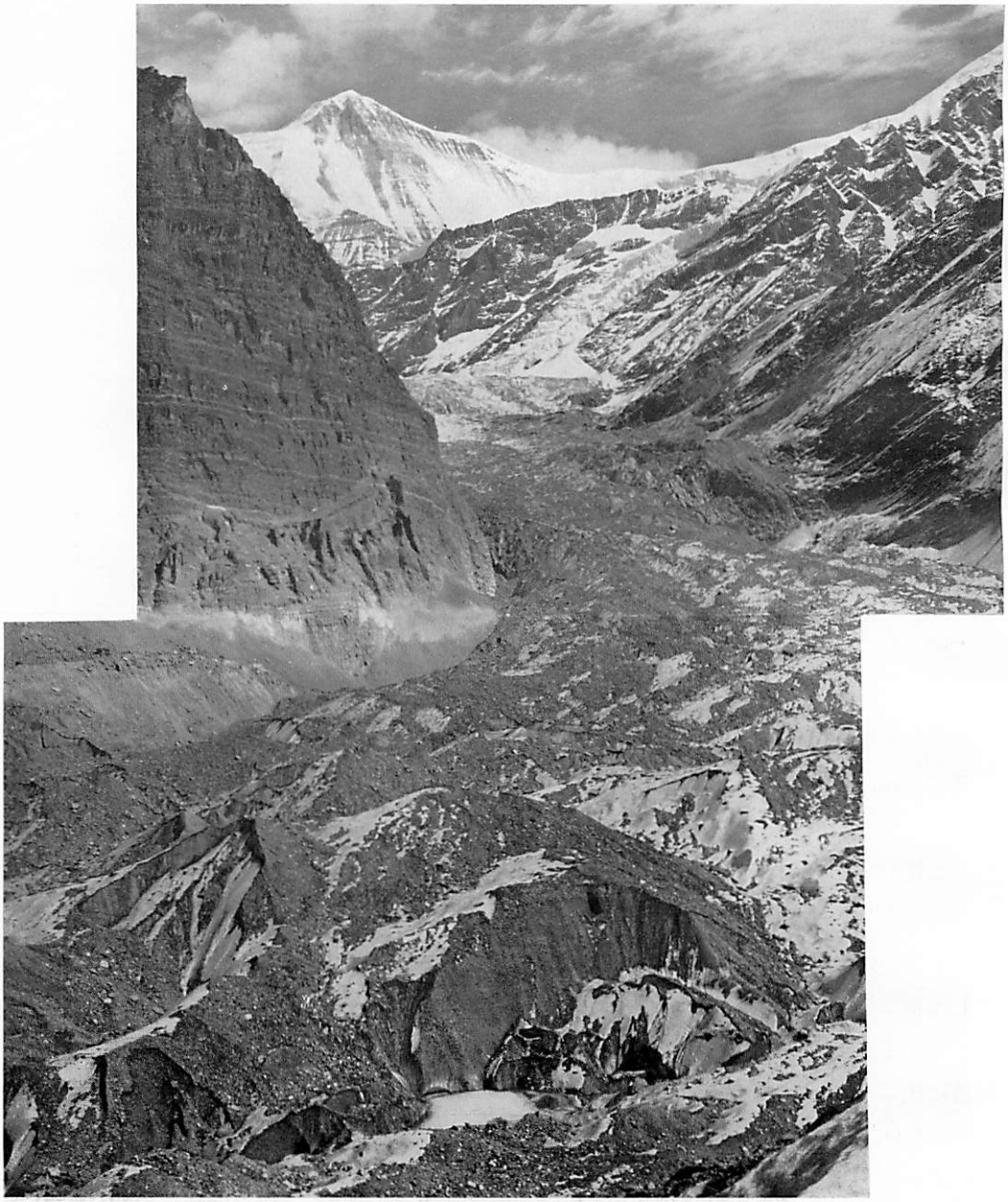
片麻岩帯の南側に発達するマヤンディ片岩帯に特徴的に表われている。

ダウラギリⅣ　　グルジャ・ヒマール　　ダウラギリⅠ



チベット帯の褶曲

マルパ付近に露出する石灰質岩層による。



ゲスタング氷河

末端付近が沈滞氷域で，上部に見えるのが最低位氷瀑である。

小さなキャラバン
——C隊の日記より——

石田隆雄・米田　功

バルコット——ピュータン

10月10日，バルコットで酒匂隊長らのB隊と別れて，われわれは進路を西北西にとって歩き出した。隊長格の市村は植物学者の卵である。得意の写真をパチパチやりながら，のんきそうに歩いているが，いったん水溜りや川に出ると，水藻の採集に忙しい。米田は，シネカメラに熱中している。しかし，それ以上に彼を多忙ならしめたのは，プラナリヤ(三岐腸類)，蝶，蜂，蟻等の採集を，日本の研究者に頼まれていたことである。カメラや虫網などを抱えて走り回っている。僕は地質踏査図作りが仕事だから，専ら石コロを叩いて歩くのが商売というわけである。

こんなわけで，三人三様のペースで歩くから，案内役のテンジン・シェルパも，このジャパニ・サーブの奇妙な行動に，いささか面喰った様子である。彼が優秀なシェルパであることは，既に聞いていたので，荷物の輸送，つまりポーターの監督には全責任を負わせて，サーブのことは気にせず，とにかくコンスタントに歩く様に指示した。

こんなバラバラな行動をする隊は，おそらくまともな旅ではすむまいと予想されたが，この心配は，バルコットを発った初日に現実となった。

「○○へ行く道はどれだ？」最初にマスターしたこのネパール語を，人に会う度に連発して歩くのだが，なにしろネパールの道は，日本の山路ほどのものだし，その上部落の近くではこうした道が縦横に走り，どれが本街道か判然としないため，われわれはしばしば道に迷った。

初日は，われわれ隊員三人と，シェルパ・ポーターの組とが別れ別れになったまま一夜を過すことになった。ネパール語が皆目解らないわれわれだが，ともかく晩飯にはありつけて，いくぶん自信を持ったとはいうものの，これから先の道程を考えると不安を隠せず，満月を祝う人々の歌も耳になじまない。

翌朝，テンジンは二人のポーターと共に，その部落に現われ，無事再会出来たことを歓び合った。その日は，さすがに慎重に歩き，つかず離れずの行動をした。しかし，仕事の能率を考えると，そんなことを続けるわけにはゆかなかった。次の日からはまた迷子続出の珍道中となった。

山桜が桃色の花をつけて美しい。その樹の下で，稲の刈入れをやっている。この妙なとり合わせは，われわれの季節感を鈍らせるが，これに慣れた時，ネパールの自然が無季節な単調な景観ではなく，躍動する自然の営みの輪廻を秘めていることを知る。

市村は，時々思い出した様に大型植物を採集する。秋に花開く桜や，つくしん坊が彼にとっては何かの意味があったに違いない。

10月12日，尾根上の村，ナワコートを出てビジューリに着く。米田はドクターの役も兼ねていたから，乏しいネパール語とジエスチュアーを駆使して現地人に投薬するのに忙しい。われわれの隊のポーターの一人も患者であるが，二，三日前に薬をつけてもらったら，彼の手足にあったデキモノはすっかり良くなっている。驚くべき効き目である。

10月13日，陽もとっぷり暮れて，最初の目的地ピュータンの街についた。カトマンズから帰省中の学生が，われわれを自宅に招待してくれた。初めて見る中流家庭の中身は，それほど豊かそうにもみえなかったが，彼の妹の手料理は格別の味がした。

ピュータン——ルクムコート

10月14日，三日後の再会を約して，市村と僕は，米田らを残して，シワリーク方面へ足を延ばしたが，この旅は実に惨憺たるものであった。最初の日は道の途中で日暮れてしまい，行けども行けども部落一つなく，遂に路上にゴロ寝するはめになった。遠くで稲妻が光り，今にも一雨来そうな寒い晩だった。非常食に持っていたビスケットを二人で分け合い晩飯とした。

翌日も食糧調達にひと苦労した。朝食にはチャン（ドブロク），昼食にはトーモロコシひとつかみを得られたのみである。これじゃ飢え死にだ。こんな処に長居は無用とばかり調査もそこそこに引き返す。だがすきっ腹には足も重く，その日約束のビングリ村まで行けず，遂にマルシバンでストップした。

一方，ピュータンに残った米田らは，街の広場にテントを張っていた。ポリスがロキシーを持ち込んで一緒に気焔を上げたのはよかったが，新しいポーターを捜すのに四苦八苦させられていた。こんなわけで，われわれの方も予定を半日遅れて，10月17日，ビングリに着いたわけである。陽はまだ高かったが，誰の顔にも疲れが目立ち，調査試料の整理もあったので，そこで泊りとした。

翌18日は快調に歩いた。最後にマリ・コーラの渡渉を終えると，クングリ村である。この村は高いテラスの上にあって，部落中にバナナの木が植えてあり，さっぱり見透しがきかない。その上，道は迷路のように入り組んでいるため，またもや迷子になった。テンジンは毎日のように，はぐれた隊員を捜し出すのが日課となった。

ピュータンで雇ったポーターは早くも旅のつらさに音をあげたのか，ピュータンへ戻っ

てしまった。村長がわれわれに同情して新しいポーターを捜してくれた。

10月20日，ラマチャウルの少し西から，愈々進路は北向きに転じた。これまでのルートが地質構造と並行であったため，出てくる岩石の単調さに，いささか厭気がさしていたので僕は大いに張切った。ジグザグの道を登り始めた途端に雨が降り出して，カルシンゲという部落で雨やどりすることになったが，雨は夕方まで降り止まず，遂にそこに泊る。せっかく張切っていたのに，出鼻をくじかれた感じである。

夜になって，近所の人達が集まって来て，笛や太鼓や踊りを披露してくれた。雨もあがり雲間に月の光が漏れて，若者のかなでる笛の調べが，ひとしお郷愁を誘った。

10月21日，われわれの泊った家の親爺さんと部落の若者二人を新しくポーターとして雇った。親爺さんはやせ型で，浅黒い顔にチョビヒゲをつけた，典型的なマガール人である。彼は第二次大戦中グルカ兵として，シンガポールで日本軍と戦った経験の持ち主である。手榴弾の投げそこないで，彼の右手の指は三本吹っ飛んでしまったという。その時のことを身振り手振りもおかしく，何度も繰り返して説明してくれるのだった。

ネパールにはこうした戦争体験者は多いが，不思議なくらい日本人に敵意を示さず，むしろわれわれに一種の懐かしさを感じている様でさえある。

ルートが北向きになってから，期待したとおり，岩石の様子は一変した。各種の片岩類が表われ，露頭も比較的良いので，俄然，ハンマーを振う手に力が入る。しかし，尾根上の道なので市村は水溜りの不足で仕事にならず，いささかオカンムリである。その上，彼はシワワークの旅で痛めた膝がますます悪くなり歩くのも苦しそうだ。

リバンからダングシと長い登りを終り，10月23日，峠にさしかかった。数日前に降った雨は，ここでは雪であったらしく，まだ10cmくらい残っている。テンジンは，そこまで履いていたボロ靴を捨てて，われわれが支給した新真しいキャラバン・シューズに履きかえた。そのボロ靴をポーターの親爺さんが拾って，雪道にそなえた。ところがこの靴，実は米田が，タンセンを出発する時に捨てたものであった。

峠付近は湿潤のせいであろうか，あらゆる樹木が完全に厚い苔に包まれている。おまけにガスが立ち込めて，一種異様な妖気を感じさせる。その妖気にあてられたのか，降りの道でまたもや二つに別れてしまった。気がついてみると，正規のルートから沢を一つ隔てた別の尾根筋に出てしまっていた。二人の若いポーターはしきりと文句をいったが，チョビヒゲの親爺さんが彼等を説得してくれた。ルート・ファインダーとして，僕は少々不安と苛立ちを感じていただけに，元グルカ兵のこの親爺に大いに感謝したものである。幸運にも細い踏み分け道を捜し出し，懐中電灯の明りをたよりに，やっとのことで，米田やテンジンの待つタコール村に着いた。

ところがこの部落では食糧を売ってくれないという。テンジンが四方八方手をつくして

得られたのが，隊員用一食分だけ，気の毒にもポーター達は晩飯ぬきである。翌朝は早々に発って，次の部落で朝食をした。

10月24日，ダラムシャラは祭りの最中だった。おかげで，血祭りにあげられた水牛の肉を安く大量に仕入れることが出来た。村は穫り入れも全く終わり，軒々にはトウモロコシが干してある。ふと北海道の冬仕度を思い出す。

よく頑張ってくれたポーター達であったが，祭りだから帰りたいという。聞けばネパールの正月にあたるという。「あと一日で，ルクムコートだから……」と引きとめたが詮ないことだった。結局，この部落の若者三人を新しく雇ったが，この現代子風のポーターには全く手を焼いた。歩くのが遅い上に，ストまでやって賃上げを要求する始末。それをなだめすかして，ルクムコートの手前2km程の部落，ルマルバテまで何とか荷を運ばせて，早々に首を切った。

ここまで来れば，ルクムコートに着いたも同然だ。時に10月25日，ブトワールを出て丁度一と月目である。村長の家の別棟に落着いて，ルクム到着と僕の誕生日を祝って，ささやかな酒宴を催した。

ルクムコート——ドールパタン

ルクムは期待したほど大きな街ではなかった。ネパールは，このように地図上の地名の大きさに比べて，街はガッカリするほど小さいことが多い。けれども，一応はその辺りの中心であり，地方行政都市である。ロクに仕事もなく，一日中茶屋で駄べっている役人の多いのも，こうした街の特徴である。

翌26日は僕を残して，食糧調達とポーター捜しのために，ルクムの街へ出かけた。ところが，この街にはバザールなぞはなく，閑な役人の一人がわれわれのために食糧を集めてくれるという。ポーターは祭が終らなければ集まらないというので，われわれは更に北に足を延ばしてみることにした。

ルクムの台地を下り，ウッタル・ガンガの渡し場に出たが，橋も舟もなく，急流の上にロープが一本渡してあるだけである。これをレインジャー部隊よろしく，綱わたりをするわけである。やってみると仲々難しく，予想外に時間を喰った。結局，ルクムとは川一つ隔てた，目と鼻の先にある，ダンデイン部落までしか到れず，そこで一泊してルクムへ戻った。しかしこの川をはさんで岩石は，ガラリと変わり，予期に反して変成度の弱い千枚岩が出てくることがわかり，僕は大いに，その成果に満悦した。一方，ルクムに独り残っていた市村も，村の中の池から大量の藻を採集して，大いに成果をあげていた。

もとの村長の家に戻ってみると，バラ・ハキム（知事）や近所のお偉ら方が集まり酒宴をはっている。われわれも招かれ，席に加わった。歌あり踊りあり，ケンカあり，日本の

田舎の酒席と全く同じだ。

翌日になってもポーターは集まらない。われわれは，たった三人のポーターを集めるのにこんなに苦労しているが，一体何十人ものポーターを使う遠征隊はどうやっているのか不思議でならない。

しかしこうした停滞も，われわれには，それ程無意味ではない。それぞれ，集めた試料かデータの整理の仕事があるからである。

村長が豚を一頭買わんかと勧めに来た。テンジンが料理して保存が効くようにするというので，飢えたる若者の衆議は一決。足をケガした豚なので値切って40ルピーで買入れた。それから連日豚肉を喰って，行動はすこぶる快調だったし，鶏が一羽10ルピー前後という相場から比べれば，お買徳品であった。もっとも屠殺する時は大騒動であったが……。

11月1日，今日も駄目かと思って，洗濯なぞしていると，午頃になって，やっとポーターが三人得られた。午後2時，一週間も滞在したルクムコートを後にして，ドールパタンに向った。B隊との約束の日まであと5日を残すばかり，心ははやったが，われわれの顔からやっと陰鬱な影が去り，ポーター集めに奔走したテンジンは，やっとホッとした表情をとりもどした。

ところがこの喜びもつかの間，11月2日カークリ村に着いた途端，ポーターは帰るといいだした。そこで実働賃金として一日半の給料をわたしたが，どうしても二日分くれろと言ってきかない。村の小学校の先生に仲裁をたのんで，やっとケリがついた。彼はわれわれを自分の下宿部屋に泊めた上に，新しいポーターを世話してくれた。色眼鏡をかけ，黄色い派手なシャツを着た，一見ダンプの運ちゃん風の彼も，この村では最高のインテリであるらしい。われわれの仕事の意義を尋ねたり，彼がカトマンズから単身，この片田舎の学校に赴任した決意なぞを語った。

村人達はわれわれをとり巻き，ガヤガヤ，ケラケラ，皆んな陽気である。二階の窓から外をみると，屋根には石ぶきとわらぶきとがある。この辺りが，北方系と南方系の文化の接点であるらしい。顔つきも，モンゴロイドの血をうけついだ丸顔のダンゴ鼻が多くなった様だ。

テンジンも慣れて来たのか，時々冗談を言うようになった。米田の採集した大量の蜂を「あとで喰うんだ」と村人に真顔で説明し，こちらを向いて，ニタッと笑ったりする。

翌3日2,800mの峠を越えると，再びウッタルガンガに出る。そこはもう今までのような牧歌的な生活圏ではなく，荒涼とした山岳地帯である。樹木も明らかに針葉樹が急増するし，水牛や山羊にかわってヤクや羊が登場する。急に集落は少なくなり，街道にも人影がなくなる。チベット人の隊商に会って，ようやく憧れのチベット文化圏に入ったことを

悟る。

11月6日，一日遅れで，たどりついたドールパタンは冷たい風の吹きぬける荒れ果てた広い河原である。スイスの経済援助で作られた飛行場がなければ，そこは地の果とも見えたであろう。

長い旅だった。タンセン以来，否，日本を発つ前から，この地図の上の一点に行きつくことのみを考えていた。夢から覚めた時のあのうつろな感覚が全身を支配した。だが感傷に浸っている時ではなかった。調査はまだ終ってはいないのである。　　（石田記）

ドールパタン――タンシン

11月7日，チユーレン・ヒマールから戻って来たA・B隊を途中まで迎えに出て，その夜，全員がドールパタンに集合した。既に小野田とシェルパのクサン・ノルブ・タワはカトマンズに帰っていたが，新しく伏見が加わっていた。

11月11日，隊の再編成をして，後半の調査キャラバンが始まった。僕の班は石田，益田，パサン・ダワのメンバーである。ドールパタンから不要品を空路カトマンズに送ったから，ポーターは一人である。

3,250 m の峠から半日も下ると，そこはもうバナナの出来る亜熱帯である。2日目にブルティバンに到着。久しぶりの茶屋泊りである。食事に魚が出たが，こうした機会は少ないから，大いに喜んだ。

標高1,000 m 辺りでは，米の穫り入れの最盛期である。刈り採った水田の一部に泥をぬり込めて，きれいなタタキに仕上げて脱穀，撰別の作業場にする。農具らしいものはほとんど使わず，籾落しは穂先を地面にたたきつけたり，牛に踏ませたりする。

14日，ワミタクサールに着く。早速ポリスがビザを点検に来たり，病人がゾロゾロ来たりで，休む暇もない。視学官の歓迎会に便乗して，夜遅くまで歌や踊り，歌謡演説を楽しんだ。翌朝，出発間際にまた，病人がぞろぞろおしよせて来た。皮膚病，胃腸疾患，結核，怪我と様々である。なにしろ専門家でないから適当に茶濁しの投薬，処置で済ませたのだが，不平を言うものはいても，礼を述べる者は1人もいない。その上，メデイカル・アシスタントと称する男に薬品をゴッソリ巻き上げられたりで，全く不愉快であった。

ワミタクサールからは益田がパサン・ダワを伴なってガルコット廻りの道を行き，石田と僕はバリ・ガッド沿いに下り，フブディ・コーラの合流点で彼等を待つことになった。

近くでは，アメリカの平和部隊員3人が，ネパール人を200人程使って小さな飛行場作りをしていた。東西両陣営の緩衝地帯になっているネパールには，各国がいろいろな形で援助の手を延ばしている。ちなみに同国の1964～65年の会計年度諸経費のうち国内分担額はわずか41％といわれている。

益田らは17日われわれの待つ合流点に到着したが，翌18日は約束したポーターが来ず，やむなく停滞。11月19日，ようやく他の男を雇い，逃げだすように出発した。石田と僕は，食糧も手に入らない，薪もないこの合流点に三日も居て，いいかげん厭気がさしていたのである。

20日，ジュアンを発って，途中，遅れているポーターとシェルパを待っている間に，益田が先に行ってしまい遂に三つに分裂してしまった。僕と石田が懐中電燈の光を頼りに，ガンダキの河原に着いた時は，7時を過ぎていた。ラニガートの灯が対岸に見えるが，渡し舟の通いは既にない。路傍の破れ小屋に乾草を持ち込んで寝床とし，残っていた一本のタバコを分けて喫み，ポンチョを被って眠ろうと努めたが，空腹と寒さで，夜半に幾度か目覚めた。

11月21日，タンシン到着。わずか6週間の旅であったが，辺地から戻ってみたこのバザールは，ひどく大きく感じられた。真すぐ食堂に直行して，腹一パイ詰め込んだ。「有る時に食べろ」の喰い溜め主義は消化器不調の原因となるけれども，現地食でその日凌ぎをしていると，常に飢餓恐怖につきまとわれ，こうした機会には無意識のうちに大喰いをしてしまう。

タンシン——ポカラ

11月23日，日蝕になった。人々は早朝ガンダキに沐浴し，一日食事も摂らぬという。官庁は休み，ポーターも雇えない。

24日，ポカラへ向けて出発する。さすがに本街道ともなれば茶屋が多い。

時折り，一匹，二匹と蜂を見掛けるが，菜種畠に群がっていたのを最後の採集として，ネットをしまい込む。プラナリヤは50ステーションを目標にしているから，あと10ヵ所程採集しなければならない。

ブトワールからポカラに至る自動車道路の工事が，ところどころで行なわれている。ビルガンジイからカトマンズに至るトリヴーバン・ラジパットが開通したのが1956年だが，それ以後，数本の幹線道路が計画着手されている。カトマンズからラサを経由して北京に至る，ユダリ・ハイウェイは中国の経済援助で1967年開通したし，テライ縦貫道路や，カトマンズ——ポカラ間，それにこのブトワール——ポカラ間なぞが目下工事中である。しかし，まだマハバラート以北では，自動車道の総延長は500 kmに及んでいない。

27日，ビルバスから二隊に分かれ，石田と僕はクスマを回ってポカラへ，益田とシェルパはポカラへ直行することになった。健康優良を誇っていた石田は下痢で，前日から絶食治療中である。このため歩くスピードも上らず，尾根上のアルチャウル村に着いた時は，陽はすっかり落ちてしまっていた。家路を急ぐ野良帰りの人達を相手に，片言ネパール語

で，民泊の依頼をするが，なかなかラチがあかない。やっとのことで，シコクビエの穂を背負った，人の良さそうなおばあさんが，彼女の家に案内してくれた。至れり尽せりのもてなしである。このような素朴な人情を受けた時の快さは，茶屋泊りをしていると味わえないものである。

28日，尾根筋に出ると，アンナプルナと，ダウラギリが指呼の間に眺められる。こんな尾根道で，結婚式の行列に合った。にぎやかな楽隊を先頭に，赤い布のハンモックにすっぽり包まれた花嫁が担がれて行く。早速，シネ・カメラをザックから取り出して，行列の前後を飛び廻る。

明るい内にクスマに着けると思っていたのに，カリガンダキの左岸のテラスに出た頃，陽が落ちてしまった。道程を尋ねて得られる情報はあまり頼りにならない。コース（1コース≒4 km）という距離の単位はあるが，彼等は「1時間に歩ける距離」くらいに考えているから，坂道と平坦地，昇りと降りなどで違うほか，個人の歩く速さでも異なるのである。おまけに彼等の歩く速さはめっぽう速いから，われわれは常に彼等の言った距離の⅓くらい余計に見積もった方がよい。

結局クスマには行きつけず，リミ・ガンディ村に落ちついた。宿の主人は好人物，食事も豪華版だったが，夜半，南京虫に悩まされて良く眠れず，掃討を試みたら12匹の戦果があった。

翌28日はカリガンダキ沿いに歩き，ドビレから更に一日尾根道を登ると，バドウレである。ヒマラヤ下ろしが吹きぬけるこの峠の村からは，アンナプルナの連峰が眼前に展開して，その迫力に圧倒される。

12月1日，ポカラ着。バザールの北のはずれに，チベットの避難民部落を見つけ，茶屋へ上り込み，ギュマ（腸詰め）やツァンパを腹一ぱい喰べたのち，バザール入りをする。ポカラは想像していたよりも大きく，ウナギの寝床みたいに長いバザールである。先に着いているはずの益田を尋ねて，小一時間余りも歩いているうちに飛行場まで来てしまった。益田は手作りの小さな日章旗を目印に掲げて，滑走路の傍の茶屋に陣取っていた。

単調な太鼓のリズムに合わせて歌う，女の合唱が，いつ果てるともなく続いて，酔客のざわめきが夜半まで絶えない。月光に冷たく輝くヒマラヤの影とは対照的に，そこには既に都会の顔があった。

（米田記）

氷の島からヒマールへの旅

伏　見　碩　二

僕は……いや，僕というより僕達といった方が適当かもしれない。1965年9月初旬，アフガニスタンでインド，パキスタン戦の終結と，そしてその国境の再開に首を長くしていたのは，ニュージィランドのメルとイギリスのボブと僕だったのだから。

僕達にとっては，とりわけ長い40日間だった。というのは，つい2ヵ月程前，同じように長い期間を，僕達は，カスピ海沿岸のバブルサールで，コレラのために閉じられたイラン・アフガニスタン国境の開くのを，くる日もくる日も，水を浴びてまぎらわしたばかりだったのだ。

パキスタンからの避難民に情報を流してもらったり，大きくくい違うインド，パキスタン両領事館からのガリ刷りに首をかしげたり，景勝地バーミアンを訪れたり，街見物に暇をつぶし，そして同じように東への道の開かれるのを待っていた旅人と，とりとめもない話に時間を殺していた。

そんな時だった。中学の教科書にも使えそうにない地図の中にカワーク・パスの名を見い出したのは。まてよ，この名前はまえに聞いたことがある。どんな峠かは忘れた。とにかく標高3,600 m，ヒンズークシの主脈にあることだけは，この貧しい地図から読めた。それで充分であった。

僕達は，カブールからタシュケントへ通ずる街道を，バスで半日いき，ケンジャンから東へ折れ，河を遡り，途中デサラ・バザールで馬の背にまたがり，3日目に峠に立った。そして遠い昔，氷河に覆われ，けずられたであろう円く広いその峠から，5～6000 m級のとぎすまされたナイフのような山の連らなりをみた。このヒンズークシは，これからカラコラムへ，そしてパミールへ，ついには大ヒマラヤに続いているのだ。そしてそこには，僕の友達がいるのだ。僕は彼等に会わなければならない。アフガニスタンからロシアまわりで日本へ行くメルとボブ，そしてインド，ネパールへ行く僕。この旅は約3ヵ月つづいた3人の最後のものとなった。初雪の降りはじめるなかを，僕達は峠をあとにした。

カブールに着くと，3日後に，ニューデリーへの直通便が飛ぶという。国連監視員が入ってからも，なお硝煙の止まぬこの戦争は，どうせどうころぶかわからないのだ。よし僕はそれをつかまえよう。

その一番機には，ありとあらゆるルートをたどり，一点カブールに集まり，そして，おなじように東方への道を探していた若者でいっぱいだった。

眠下にひろがる赤茶けた，裸の山々と半砂漠，そして続く，緑のガンジス平原，そこにはいまもなお戦火に逃げまどう幾百万の人間がいるのか。僕はいたずらに感傷的になるのはやめよう。パキスタン，インド国境を越えさえすればよいのだ。だが途中，パキスタン軍により，ラホールにて強制着陸を命じられた。パキスタン兵による検閲，インド国籍のものは容赦なく捕えるという。汗をかくのは何ヵ月ぶりだろう。3時間近く，湿気の多いラホールにくぎづけ。飛びたちぎわ，若者の一人が“I'll take you to New Dehli with us”と，パキスタン兵士に呼びかけたのは，とりもなおさず僕等の気持を代弁していた。そして大きな平坦な広がりをもつ，茶色の大地に，ニューデリーの姿を見い出したのは，10月15日，午後2時35分だった。思えば1年半の北極暮しから開放されたのが，今年5月，そして，2ヵ月半のヨーロッパ自転車旅行，つづく3ヵ月の中近東ヒッチ，ついに僕はインドにきた。もう僕の歩みをとめるものはないだろう。うまくいけば，一週間以内に，2年このかた会わぬ札幌の友に会えるのだ。

一日で，ネパールビザ，その他身仕度をととのえ，通気の悪い三等車に乗り込み，3日後に国境の街，ラクソール，そして4日目にカトマンズ入りした。僕の最初の仕事は，友がいつ，どんな計画でネパール入りしたかを知り，そして現在どの辺にいるかをつきとめなくてはいけない。その日のうちに，外務省へ行き，友の計画書を入手することができたのは幸運だった。ポカラまで歩いて10日，経費約70ルピーか，それなら，5日後にでる54ルピーの飛行機に乗った方が安くて早いぞ。

明日までには，ビザの延長，旅行許可証もおりるだろう。Himalayan Society に行き，キャンプ用具を借りようとしたが，高くてダメ。ユース・ホステル用シーツは，ネパールの寒さから僕をまもってくれそうにない。さてどうしよう。アフガン製の靴はOK，着物はまあまあだ。自製の羊皮ザックは僕の気に入りだ。しかし寝袋はほしい。あれこれ物色するうち，ネパール製100％ウールの70ルピー毛布にした。ククリとマラリヤ錠剤とDDTとヨーチンを購入，ヨーチンを混ぜれば，どんな水もOKと聞いていた。あとはなるようになるさ。ポカラから，アンナプルナ連山を右手にみながら進み，3日目にカリガンダキを渡り，さらに西へ，マヤンディ・コーラ沿いにジャルジャラ峠を越えて，6日目に，ついにチベット避難民の村，ドールパタンへ着いた。

白い旗をかまえた，にわかづくりの木造の家々とうす汚れた簡易テントのたち並ぶ，この3,000 mの広い谷間は，すでに冬の風に支配されていた。この非情な風を吹きとばすものは，河沿いにつづく，広い牧草地で，馬に鞭をいれ，その速さを競う若者達の叫び声だけであった。僕は彼等に近づき，その一人に尋ねた。“僕は，日本人を探しているんだが”と，その一人は，“きのう，山へ行く二人の日本人に会った。”といいながら，僕を彼の家へ案内した。僕は腹一杯ジャガイモの夕飯を喰い，あのすばらしいチベット茶をすすっ

た。

この塩味のきいた，滋養のある茶は彼等の生きた文化だ。ふつう直径 10 cm，長さ 7·80 cm の装飾をほどこした竹筒が彼等の茶筒だ。熱い茶湯とバターと塩を入れ，円型の板を先につけた捧を用い幾百回となく，入念に攪拌する。その役はたいてい女だ。この強い味のする茶をはじめ僕は好まなかったのだが，彼等の住む，北ネパールを旅するうちに，宿をともにし，笑顔をかわすうちに，そして一言，二言の会話をもつうちに，いつしか僕はこの味に解け込んでいった。この茶は，彼等に懐かしき郷里を思い出させるのだろう。インド旅行中の彼等が，汽車待ちの短い間にも，ストーブで茶をたて，塩とマーガリンのインスタント・チベット茶を飲む光景をしばしば目にしたものだ。異郷にあって，郷里の便りをはこぶのは，これをおいて他にないのだから。

客用のベッドなど，用意しているはずがないのに，彼は最良のベットを僕にあてがい，“横になるように”とすすめるのだった。粗末な家のつくり，貧弱な家具しかもたぬ彼だったが，ダライラマの祭壇だけは格別なものであった。外を吹きすさぶ風はガラス代用のビニール窓を激しくたたいた。ランプを消し，彼は静かに語った。“6 年前に郷里ブータンをでて，しばらくダージリンでイギリス人のもとで働いていました。今 20 才です。スイス人によるチベット人避難民援助計画を聞いて，この村にきてから 5 年になります。英語とチベット語を話したので，スイス人指導者のアシィスタントになりました。どうして僕がチベット人達と生活を共にするようになったのか，自分自身でもよくわかりません。1959 年ダージリンにいたとき，毎日毎日，北の郷里をすて，南へのあてどもない旅をする多くのチベット人に接したのがその原因かもしれません。

2 年前，この村のチベット娘と結婚しました。そのとき彼女は 16 才でした。僕達の国籍は今ではネパール人になっています。

僕はネパール人のもつ習慣や，社会の機構をにくんでいます。この国の生活には，たくさんの制限があって，窮屈でたまりません。楽しそうに笑う少女を，君はこの国でみたかい。するどいまなざしをむける男達や，ともすると目をそむけ足速やにさりがちな女達を，君は知っているだろう。

しかしチベット人は違うよ。僕はチベット人の中にいると心が落着くのです。いまにネパール人もかわるでしょう。そしてチベット人のもつ良さに気がつくときを僕は信じてます。”

翌朝 2 人のチベットの少女に村はずれまで送ってもらい，昨夜教えられた山道を登った。道はいつしか針葉樹の林をぬけ，エーデルヴァィスの咲きのこる牧草地に達し，ところどころに残雪をみるようになった。期待していたダウラギリ・ヒマールの大展望は，峠へ着く頃から厚さを増してきたガスがいつしか雪にかわり実現しなかった。雪はいよいよ深さ

を増し，吹き荒れる風の中にみる，屋根のない夏の牧童小屋の凍りついた石壁は，僕に孤独の念をかきたてた。僕は叫んだ。昔，友と日高の山でしたと同じように。もしや友は僕の声を聞きつけるのではないだろうか。だが答えるものは，冬の風をおいてほかになかった。あと1時間歩いて友をみつけ出すことができなかったら，僕は引き上げよう。この状態では，僕の装備はあまりにも貧弱だった。峠をすぎ，急だった道が次第にゆるやかになる雪原の中に僕は山靴の跡を発見した。そこを歩いた者は，友の他に誰がいよう。僕はその場にかがみこみ，友の足跡に手をのせた。よかった。友はこの雪のどこかにいるのだ。

カールのお腹の平らをいく道が，再び急になり，壁に達するところに，石作りの小屋があった。酒匂隊長と益田に，そこで僕は再会した。僕の気持はおどろくほど静かだった。心に画きつづけてきた興奮はなかった。数日間，チューレン氷河へ足をのばしていた渡辺，高松，遠藤各先輩を待ち，ドールパタンへもどり他の全員に再会した。その夜，ドールパタンの地酒を手にし，皆と語り，歌うにつれ，いつしか僕は心にこみ上げてくる感動をおぼえた。

このドールパタンを境にして，調査隊の行程は後半に移った。渡辺サーブのもとに，僕とポーターは，一路南へと，バグルンへの旅に向った。そのことについては，僕等のすばらしきポーター兼コック兼シエルパ役のデイル・バハドゥールに語ってもらおう。その前にちょっとばかり彼を紹介しておくとする。ピュータン生れのチエットリで23才，まだ独身。体つきはほそく，15貫に満たない，それでいて身長は日本人の平均を越える170 cm，日本映画のスクリーンで良くみかける身体つき。ピュータンからタンシンへ荷運びの帰りにこの調査隊に会い，ポーターとして雇われることになった。1日10ルピー，一ヵ月で300ルピー，ことによると2ヵ月600ルピーが彼を引きつけたに相違ない。ちなみにネパールの年平均現金所得はというと，それは50ルピーにみたないのだ。もっとも，自給自足をたてまえとする彼等に，日本流の解釈は適用できないが。

11月10日　朝，サーブ連はきのうからひきつづいて荷作りに忙がしい。いっしょに発つことになっていた他のパーティは，ポーターがみつからず，出発は明日だという。午後わしらだけで，ドールパタンをたつ。ひさしぶりの重荷，荷かつぎはいつも楽じゃない。わしはやっぱり暇をもらうべきだったのかなあ——。いやいやそんな考えをおこすのはやめよう。道中はヒマールを離れて，これから南へいくんじゃないか。南にはわしの部落がある。わしの村へかえりついでに……。

きょうは，ウッタルガンガ川沿いに3時間登っただけ，まだヒマールから離れることはできない。

わしのみたところ，バラサーブはどうみても日本人じゃないな。新しくきた奴は，いか

さない無精ヒゲをのばし放題。わしらだってヒゲぐらいちゃんと整えるぜ。バラサーブはネパリーがわかり，わしの気持を伝えることができるが，この新入りは全くしょうがない。ネパリーができぬ奴が，ネパールにきて何ができるというものだ。きっとこいつは頭が悪く，学校へ行ったことがないのだ。

11月11日　たまらなく寒い朝だった。サーブ連はあったかそうだが，わしはといえば，布きれ一枚だ。あたり一面に，霜柱がたった。川を渡り，バリ・ガッドへ越える峠まで2時間，ゆるやかな登りだった。この峠から南の眺めはいいね。どこまでいっても緑だ。この緑の山，南へとだんだん低くなって，ついにあのボーットかすんだむこうにインドがあるんだろう。とするとそのちょっと手前のどこかにわしの部落があるんだな。ドールパタンは何もかも冬だったが，もうこの峠のチョルテンをすぎれば寒さともお別れだ。サーブ達は北の方ばかりみている。いつまでも凍ったグルヂヤ・ヒマールをみてる奴等の気がしれない。それにしても峠の南側はなんと急なことか。夕方までにボンダ・カニにつき，学校に宿をとる。サーブ連は，がらんとした教室の中に，先生の椅子と石の黒板しかないのを見て首をかしげていやがる。

まえからどうしても，たずねようたずねようと思ってたことをバラ・サーブにいってみた。「どうして，毎日毎日石ばかりたたいているんだい。金鉱でも……」バラ・サーブはむずかしい言葉をならべた。「ずーっとずーっと昔，海の底にあったネパールに，どんなふうにしてヒマールができたのか。……を調べているんだ」ひえっ，石などたたいてそれがわかるのかね。わしはバラ・サーブのいう10のうち9もわからなかったが，このむずかしい言葉をつかう奴，きっと頭がいいに違いない。ひさしぶりに青物を食った。

11月12日　何年ぶりかと思うほどの暖かい夜をすごした。すがすがしい朝。出発前サーブ連は何やら白い薬を飲んでいる。何だと聞いたらマラリヤよけだといいやがる。もう手がかじかむことはないだろう。ぬくいのが気持いい。ドールパタンとは天気が違うだけじゃない。人の面つきが違う。川の姿がまるで違う。チベット人の住むところでは，川はゆるく流れ谷は円い。広い河原のどこでも歩ける。だがこちらでは，川は荒々しく山をけずり，深い谷をつくり，川は叫び声をあげ，左右に激しく振れ，急角度に流れ下る。道はだいたい川沿いにつけられているが，登り下りが激しく，しばしば川沿いにすすめぬ難所にぶつかる。そんなときは，一，二日かけ，尾根を越え，悪場をまわらなくてはならない。背負いにくい30 kgのかたい箱荷をかついでるとそんな時が一番つらい。峠の微風とサーブのくれるタバコだけが救いだ。昼にフンドラ・フェリーに着き，支流を東へ遡り，バンガ・ドーバン村で泊る。いつものように，サーブ連に，野菜タルカリを作る。米を毎日食えてうれしい。軒下に3人ならんで横になった。

11月13日　昨夜にかぎって，バラ・サーブはなかなか寝つかれぬようだった。それに

しても間に寝る新入りの高いびきは……。バラ・サーブもウドウス（南京虫）にやられているな。わしとバラ・サーブは，夜中に二度も，身につけてるものの点検に起こされたなんのことはない，わし等は，ウドウス攻撃をふせいだ城壁だったのだ。おかげで，新入りは熟睡だ。

竹あつめに精を出していた親子が教えてくれた橋は，川幅がいつしか5mになり，やがてとび越えることができるようになっても，ついにあらわれなかった。越すべき山は見えていたのだが。このあたり，牛がつけた間道がたくさんあって，わし等は幾度も行きづまった。午後一杯，道を探し，竹藪をわけ登ったが，夕日が沈むころわしらは引き返さざるをえなかった。そして，小さな見捨てられた家畜小屋に荷を下した。

11月14日　朝みれば，なんと対岸の尾根づたいに登ってゆく道がみえるではないか。昨夜はひえた。歩くたびに道がサクッ，サクッと答えた。天気はとりわけよかった。空気はひややかだ。踏みかためられていた道は，いつしか，わずかに残された踏み跡をいくようになり，ついには消えた。急な斜面の藪をこぎ，午後おそく，わし等は11,330 ftの山頂に着く。サーブ連は，いつものように北に目をむけた。ここからみるアンナプルナからダウラギリ，さらに西へヒウンチユリへとつづく，風景はものすごかった。わし等の国に，どうやってヒマールができたんだろうね。サーブ連が腰を上げないのを幸いに，わしはまどろんだ。疲れた体に，どこからとなく，風にはこばれてくる鈴の音や，やわらかい人の声が心地よかった。これからはタラ・コーラ川だ。牛のつけた急なシグザグの道を，どこまでもどこまでも下った。次第次第に夕闇がせまり，厚い林の中を行く道は暗く，足もとがあやぶまれた。と突然目の前10mを黒い影が横切った。体は1mもあったろうか。いや2m……。尾が長かった。わしの村近くには，ヒョウや熊がでる。今の体つきからして熊ではない。

道がだんだん跡みかためられてきているのは村が近い証拠だ。一番星はすでに輝きはじめている。一陣の風とともに，するどい叫び声を頭上できいた。わしは一瞬体をひきしめ，身をかがめた。そうすれば背中の荷がわしを守ってくれるだろうと思った。……なんだサルか。タメシを求めて移動する10頭ほどのサルの集団じゃないか。

さて，はやいとこ荷を下したいものだ。黒い林をぬけ，しばらくすると煙のにおいがした。それは村のにおいだ。薪集めの子供等と，どこからともなく一緒になり，そしてあとさきになりながらタラ・コーラ川最奥の部落シパへ入った。山のむこうからこっちへと，1,000m登り，そして又1,000m下ってきた体は，死ぬほど疲れていた。

先に行っていたサーブは，すでに宿を決め，村人に夕食を作らせていた。トウモロコシの御飯に，ニワトリのタルカリそして乳の腹一杯は豪勢の一語につきた。今夜の宿はとりわけ快適であったにもかかわらず，わしはなかなか寝つかれなかった。サーブ連は心地よ

い寝息をたてていた。ちくしょう。今日はよほど疲れたのだろう，わしは何回となくうなされ，今までみたこともない恐しい夢をみた。

……プリテイビ・ナラヤン王の死後，政治は非常に腐敗し，世の中は混乱に落し入れられた。人々の目は不気味にひかり，すきあらば，何かをたくらんでいた。とりわけネパール谷の偉い奴等にそれが強くあらわれていた。第二王女が第一王女を毒殺したのは序の口だった。ある時は，狂人が王を殺害したり，又あるときは12，3のがきが王冠をかぶったりもした。それは今から200年程前のこと。その頃わしの一家はクラサールにほど近いカネガールと呼ばれた，それはそれは良い土地に住んでいた。米は年2回とれ，トウモロコシ，ヒエはよく稔り，季節にはミカンが稔った。村人は幸福だった。わしはその時8才だった。

だが，そんなわしの村にもネパール谷の風が吹きすさび，よそ者が村に入り込んでき，ありとあらゆる悪事を働くようになった。わしの父は両隣りの者と組んで，わしらの土地をまもっていたが，ついに武器をとり，村人を集め，よそ者を一掃した。それはいいことに違いなかった。しかしその時から親父の目の色がかわった。親父が親玉になったことから親父は大地主となり，両隣りのものも，それ相応の土地を占めた。多くの村人が反対したのは当然だった。無慈悲にも，親父ははむかう村人を，容赦なく切った。やがて家には米倉がいくつも建った。わしは何不自由なく遊んで過ごした。さしもの親父もあれから10年後にはおとろえた。その年はいやな雨がくる日もくる日も続いた。隣り村でコレラがはやり，それがわしの村にもうつってきた。村人は苦しさにうめき，死んでいった。

ある夜，わしの家の塀の外に，聞いたこともない物音がし，同時に正門は壊され，骨と皮になった村人の一団がなだれ込んできた。隣室で，弱りきった体を休めていた親父のかぼそい声は，村人の狂いたった声にかきけされた。わしが物かげに隠れたのと，村人がわしの部屋に入ってきたのは同時だった。わしは簡単にみつけだされ，怒り狂う村人の前に引きだされた。“いかしてはおけぬ。あの親父の子だ。”そして親父の血にぬれたククリをわしの目の前にふり上げた……

あっ……わしは呻き，体中を走る汗に目を開いた。わしはきっと叫び声をあげたに違いない。わしは目を閉じるのが恐しかった。

11月15日　眠りから解放された時，日はすでに高かった。サーブ連も疲れていたに相違ない。ゆったりと拡がる谷に位置を占め，家々の造りからおのずと裕福であることが読みとれるこの村シパを，サーブ達は“ラムローチャ，(すばらしい)”を連発していたが，それよりわしは昨夜の悪夢から早いとこ逃げたかった。はじめ静かに流れていた川は，いつしか荒々しく流れ下る，深く切りたった断崖をもつ，男らしい顔つきとなった。その断崖は巧みにつけられた道を伝わり，ガルコットへと下っていった。朝のうち晴れ間をみせ

ていた空が，泣きだした。わし等は，とある茶屋に飛び込んで，地酒をのみ，焼きトウモロコシを食いながら，女神の涙のきれるのを待った。そこへ，きちんと背広を着こみ，短靴をはいた35，6の男がかけこんできた。この男は，インドの或る会社で門番をやっている，といった。どうりでしゃれていやがる。その会社から7日間の休暇をもらい，家に帰るところだが，道中予想外に時間をくい，すでに4日を使ってしまった。帰りのために3日は是非とも必要だから，今日中に家に着かなければ家族の者には来年まで会えないという。その時は，あとすこし行ったとこにある親戚の者だけにでもあってくる，といい残して，飲みかけの茶もそこそこに，雨の中を登っていった。降り止まぬ雨に，サーブも業を煮やし，立ち上った。わしもその後を追った。暗くなる頃，大きな村，いや大きな町，ガルコットに着いた。この秋とりたての新米のうまいことうまいこと。サーブの食うこと食うこと。サーブ連の食う手つきも大部板についてきたな。

11月16，17，18日　この三日間，ガルコットに荷を預けて，小旅行にでた。わしの背中には，サーブの寝袋と炊事用具しかなく，足どりは軽かった。しかしバラ・サーブにこの3日間は，日給を半分にするといわれ，心は重かった。

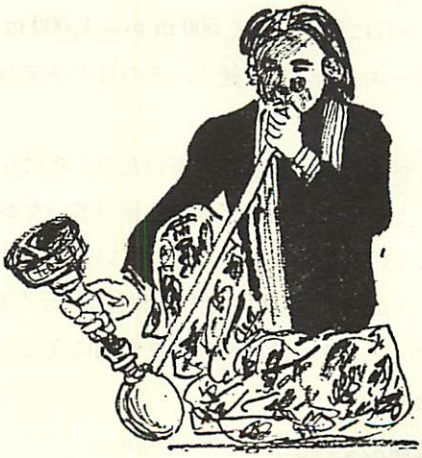
11月19日　ともに大きな町，ガルコットとバグルンを結ぶこの道は立派である。雨が降ってもこれなら文句ないし，2人並んで歩くこともできる。おまけに登り勾配が適当だ。まずどこへだしてもはずかしくないネパールの一級国道だ。人の往来もはげしく絶えることがない。峠にでる手前で，荷物もないくせに，従者をしたがえ，ふんぞり返って歩いてくる年の頃55，6の男が来た。ステッキを片手に，左胸にありとあらゆる勲章をぶらさげていやがる。ほんとうをいえば，わしは，こういう男をみると胸が煮えくり返りそうになるのだが，そんなことはおくびにもださず，さも尊敬の念をいだいているかのように装って，頭をかるくさげて，通りすぎるのが常だ。あの男，さも満足げな面していきやがったに違いない。あいつらは何も仕事もせず，年に一度近くの大きな町の政府出張所へいって，イギリスより送られてくる，グルカ兵年金とやらを，懐に入れてくる奴だ。年とった奴のなかには，年450ルピーも，もらうのもいる。勲章がぶつかりあって鳴らす，胸糞わるいあのガチャ，ガチャの音が大きいほど，年金も多いと聞いた。

道はすでに峠をすぎた。わしはかなりの速さで歩いたのに，先を行くサーブ連をいっこうにつかまえることができない。サーブ連，すでにバグルンへ着いたろうか。いやいやそんなはずがない。峠からヒマールがみえるはずだから，きっと又あきもしないでヒマールとにらめっこしているにきまっているさ。ドバニの部落をすぎ，次の村にさしかかるころ，上の方から何やら叫び声が聞えた。豆のように小さな点が二つ，かけ下りてくる。サーブ連に違いない。わしは待つことにした。息せききって，下りてきたサーブのいうには，も一度登れという。そしてドバンの学校までもどるという。まだ日はこんなに高いじゃない

か。サーブ連の剣幕におされ，わしは再び重荷を背にし，急な坂道をひき返した。けっ，なんのことはない。その理由がよめた。夕方わしが例によって野菜タルカリを作ってると，今宵の宿である学校からでてきたサーブ連は，日が落ち，赤くなっていくヒマールをパチパチ写真を撮ってるのがみえた。

11月20日 行こうと思えば，きのう行けたものを。バグルンまでは半日歩きだ。道はゆるい下りだ。道が町に近づくに従って，人がどんどん増えてきた。牛のケツを追う裸の子供，器用に腰をつかって水ガメを運ぶ娘達，井戸の周りで水を浴び，洗濯をし，話しに1日をつぶす女達，わしのような荷運び人。1ヵ月前，ここにきたとき，あたり一面稲穂が揺れていたのに。新米のとり入れを終えた男達はバクチに精を出してることだろう。トコトントン，トコトントンと家々から聞えてくるのは，女達のする脱穀の音だろう。人々の笑い声，子供のふざける声，ミカンの甘酢っぱい匂い。わしが重荷から解放されるのはもうすぐだ。ざっと計算しても400ルピーはかたい。わしは何を食うとしょうか。何を飲むとしょうか。クスマにいるタカリーのべっぴんさんは，わしの顔を憶えてるだろうか。

この2ヵ月というもの，わしは何をしてきたのかなあ—。重荷を背負いながら。首がつかれたわい。それにしても，海をはるばる越えてきたサーブ連中は，何が好きで，わしの国を歩いているのかなあ—。いざ，こうして大枚400ルピーをふところに入れてみると，わしは正直なところ，どう使ったらよいのか，迷ってしまう。ふところの厚味が，気持ちいい。しかし，ちらっとのぞいたサーブのガマグチには，それこそ数えきれねえぐれえ，大枚があったのを，わしは見のがさなかったぜ。今回は，まあ—いいとして，この次にきた奴等からは，たんとまき上げてやる。それじゃ，バラ・サーブ，そして口のきけぬ，あわれなヒゲ面よ！ ナマステ！ さよなら！



ガンダキの道

——ドクター・ノート——

高松秀彦

モンスーンが明けて澄み切ったヒマラヤの空を，雁の編隊が南を指して飛んで行くのを見ると，氷の山々には冬がもう真近かな事を感じない訳にはゆかなかった。冬になって雪に閉ざされてしまうと氷河調査は完全にお手上げになるのだと，少壮氷河学者達は心配そうだ。しかし焦ってみたところで此処ネパールの山地では，唯一の交通運輸機関は人の脚であり背だけである。われわれ一行3人のサーブ，シェルパのパサン・ダワ，そして8人のポーターによるキャラバンが，漸くタンシンの街を後にしたのは10月6日の朝であった。

お祭りの最中に稼ぐ者が無いのは洋の東西を問わず，しかも娯楽に乏しいネパール下層民が年最大のお祭りにのんびりしたいのは当然である。そのお祭りを目前にネパールに飛び込んだわれわれは，丸9日間というものをタンシンの街に足止めを喰ってしまったのである。

氷河隊と称した我々の小隊は，タンシンから中部ネパール最大の河カリガンダキに沿って北上し，ダウラギリ・チューレン・ヒマールの麓ドールパタンへ達し，ここからチューレン・ヒマール南東の氷河を探る予定であった。カリガンダキは，大ヒマラヤを断ち切ってガンヂスへそそぐ大河で，この河沿いの道は太古からチベット高原とインド平原を結ぶ通商のメインルートとして栄え，今も尚，人の往来は多く，南からは米を，北からは岩塩のキャラバンによく出会った。そのため沿道の諸物価は高く，現地食を専らとしていた貧乏隊には楽ではなかった。道は谷へ降りたり，かと思うと驚く程の高さの尾根へ追い上げられたり，一日に幾度となく500mから1,000mに及ぶ登降が続き30キロから40キロの荷を担ぐポーター達の足は鈍く，その日の予定の目的地へ着かずに泊りとなることが多かった。

シェディベニという泊り場へ着いたのも夜になってからであった。着いてみるとひどい病人がいるとの事で，訪れてみると旅の若い女が苦悶しており，枕頭には簡単な祭壇がしつらえられており祈禱でも行なわれていた様子である。どうやら腹が痛いらしいのだが，僕のネパール語は「この村の名は」「〇〇へ行く道はこれでよいか」程度しか話すことが出来ないので，シェルパのパサンダワを間に立てて，恐ろしくトンチンカンな英語を介しての問診が始まった。

「何時から痛んでいるか」

「どんな痛みであるか」

「下痢はしているか」

「嘔気嘔吐はあるか」

下痢，嘔吐などがパサンの頭の単語帳にある訳もなく，ゼスチュアを混じえての珍奇なやりとりが続き診察にかかる。どうやら胆石症の発作のようで，鍋に湯を沸して注射器の消毒を行ない，物見高い野次馬連中を尻目に特効薬なるものを注射に及んだ。幸いに利胆剤などを持ち合わせていたので与え，2・3日休養してゆくようにいったのであったが，急ぎの旅との事で翌朝さっさと発って行ってしまった。この患者一族もそうであったように，ネパールでは乞われて治療を行なっても，総じて一向に喜んでくれた様子がみられず，感謝されているのかどうか分らない。ヒンドゥの社会では，富める者の施しは当然のものであるとして受けるとの事であったが，凡夫の僕などは張り合いの無いような妙な気がしたものである。

このたびのエクスペディションでは，いろいろなヒマラヤ紀行文で読んだり，話に聞いた程は現地人の診療を乞われることはなかった。それは，僕の歩いたルートが殷賑な通商路であるカリガンダキに沿っていたためか，キャラバンが余りにも小規模で人々の耳目に触れなかったからなのかもしれない。診療ノートを繰ってみても50数名にしか達していない。それらは感染創，慢性中耳炎，地方病性甲状腺腫，不明の下痢，結核性頸部リンパ節炎などであったが，通りすがりの僕には満足のゆく治療の行なえる事は少なかった。単純な感染や一見してそれと分るような疾病ならまだしも，このような若い女の腹痛などには言葉が通じないだけに苦労させられたものである。

ネパールではインド程強固ではないというものの根強くカースト制度が行なわれているという。最高のカーストは，バウンと称するインド系の種族であり，他種族より富裕な谷や尾根に住み，まれに他種族と共同の部落を作っているが，多くは彼等同志で部落を形成し他種族に対して孤高を保っているかの如くである。彼等にとってはシェルパ族やポーター連中，まして異教徒の我々ごときは実に汚らわしい賤しむべき存在であったようだ。だから旅人にとっては，このような部落の続く行程は，茶店も宿も無く，味気なく不便なものであった。

カリガンダキに沿うキャラバンのある日，ポクシンというバウンの部落で日が暮れてしまい，やむなくある家に一夜の宿りを乞うたことがあった。その家の主はしぶしぶながら我々に物置き小舎の軒下を提供してくれたものの，ポーター達には軒下すら借してくれない。またポーター達もその様な事に慣れ切っているのか苦情もいわない。ややあって主人は息子を連れて来て病気を直せという。みると年の頃20才位であろうか，甲状腺腫があり

化膿性の耳下腺炎をも有している。しかもどうやら甲状腺機能不全による痴呆の様でもあった。青年の処置を終ると，この家の者が病気と称して次々と薬をねだりに来るに及んで一計を案じ，ポーター連中を物置きに寝かせてくれるならば薬をやろうと交換条件をもちかけたが，遂に折り合わず交渉は物別れに終ってしまい，カースト制の根強さを感じたものであった。

タンシンを発って丁度7日目にバグルンという街に着いた。此処はダウラギリの真白な壁が望まれるカリガンダキの高いテラスの上である。この街は，バザールを中心として4,000人の人口をもち，郡役所，軍隊などが置かれているこのあたり最大の街である。われわれのキャラバンも漸くその半分を終え，ポーター達は給金を払ってもらってのショッピングデイであった。ポーターの中には2組の夫婦者がおり，女達はそれぞれ上衣を新調してもらい，亭主達はそれをうれしそうに眺めてはいたが，その生地の粗末な事は全く気の毒な程であった。ポーター達の日当は邦貨にして約600円。ところが彼等ときたら一日に何度も茶店に出入りするし，加えて物価高のこの旅行では半分以上が食費に消えてしまう。しかし彼等は日本のニコヨン的な生産苦を背おった様子はなく，天真爛漫で毎日を歩いていたものであった。インド平原の鹿爪らしい苦汁に満ちた表情に比べて，何とモンゴロイドの彼等の平和な柔和な顔つきの気持の良い事であったか。これは僕の持説であるが，インド人のあの苦り切った表情は，全くあのインドの暑さに由来するもので，暑さに顔を焦ら立たせているうちに長い年月がそれを固定させたものではないかと考えている。ちなみに，東南アジアの国々の人々の顔をみると，南下するに従って日本人の様な柔和さが失なわれて，顰み勝ちな顔となってくるようである。

「暑さ」で忘れることの出来ないのはネパールに入ってキャラバンの第1日目の事である。秋とはいってもネパールのテライのジャングル地帯は，気温も高く，札幌の真夏の暑さであった。マラリアはほぼ撲滅されたとはいうものの，夜毎の蚊の襲来と暑さに夜も満足に眠られず，加えて3度の食事は完全にネパール風となり，後になってはむさぼり食べたものであったが，当初は慣れぬ上に調理の不衛生さも手伝って，食指は進まずにいた。あまつさえ下痢を起したり，感冒様症状を呈したりする仲間が出ていた。彼等に対しては，適宜処置し，恐らくは環境の変化による一時的なもので，徐々に適応してくるものであろうとたかをくくっていた。

キャラバン第1日目は殊のほか暑い日であった。そのうえ久しく山歩きなどしておらず，しかも日本を発ってからの一ヵ月以上というものは，ろくすっぽ体を動かしていなかった我々には，充分骨折りな峠越えの一日であった。遅れ勝ちなポーターについて殿をつとめ宿場へ着いた頃は，すっかり暗くなっていた。着いてみると，市村が変になり，意識

も朦朧としていてウワゴトもいっていたが熱はないという。早速まくらもとに行ってみると，やつれて落ちくぼんだ目付きで，反応もやや少なく，軽度の無関心状態ではあったが，意識は一応明瞭に保たれていて，「今日一日の事は何も覚えていない」などという。発熱もなく，皮膚はむしろ冷たい位の感じであった。髄膜炎などの様子は全くない。彼と一日同行してきた石田の話では，午後から少し足元が怪しくはなってきてはいたが，植物採取など型どうりに行なっていたとの事であった。数日前から軽いながら下痢が続いていた彼は，朝食もろくに摂らず，水や茶だけを飲んで炎天下汗を流して歩いて来たことから，あるいは低張性の脱水（水の不足と，それ以上に塩類の不足する状態）ではなかろうかと考えた。勿論点滴輸液も不可能であったので，宿の女将に水と塩を所望したところ，出てきたのはチベット産の薄黒い岩塩であった。岩塩を水に溶くのは容易でなく，市村に嚙らせてみたところ，彼はウマイウマイと水を飲みつつ20グラムも食べたであろうか。僕が遅くなった夕食を食べ終った頃，ひょっこりと起き上がってきて「もうすっかり良くなったヨ」と岩塩を嚙りながら車座の仲間に入り，完全にもとの市村にもどってしまった。

今回のヒマラヤ行のドクターとして日本を発つ前に，抗生物質を初めとして大量の医薬品を用意し，ネパールまで持ち込んだが，登山を行なわなかった事と，隊員の壮健さによってか，ほとんどの医薬品は使用するに至らなかった。使用した薬剤は，毎日オヤツの様に皆から待ち遠しがられたビタミン剤と，他は消化剤，座薬位のものであり，隊員最大の病気が先に述べた岩塩の塊で全快した市村の脱水症であった。衛生状態の悪いネパールでは，消化器系感染病を恐れて，飲料水なども入国当初は生水を飲む事を制したりしていたが，慣れるに従って現地人の使用している流水であれば全く気にすることなく用いて一向に差支えはなく，用意して行ったサラシ粉は一度も使用されることはなかった。また，今回の様な小人数パーティの旅行では，現地人の宿に泊り，あまり衛生的ではない調理による食物もしばしば摂したが，このようなときに汚染された食物が摂取される危険は必ずあり，万一の用意は必要である。

一方われわれはマラリア予防のために入国前から塩酸キニーネを服用していたが，これは副作用も強く，入国時期やテライ地方を通過する期間によっては，絶対に不可欠なものではないと考えている。隊員の栄養管理の面では，現地食をもっぱらとしたわれわれ貧乏隊にとっては，ニワトリ一羽にしても高価であるわりに，さっぱり筋付きが良くないなど，特に動物性蛋白質と脂肪の不足，また生鮮野菜の不足が目立ち，したがって米飯のみを飽食することとなったが，旅行自体が短期間であったためもあって特に障害が生ずる事はなかった。

ネパール私観

石田隆雄

幾重にも連なる山々，その上に広がる田畑，遙かに輝く白い巨峯群，それらは異郷の旅人である私の心を慰やし楽しませるに充分であった。だがそこにも，欲望に狂い，神におののく人間の生活があった。彼等の喜怒哀楽は時として，われわれのそれとは異質であったが，互に裸の人間として，心の触れ合いを感じた時，無上の喜びに心が踊ったものだ。

文明人としての寛容，無知に対するあわれみなどといった外交的礼服で人間性を包み隠した時，すでに彼等は私を共通の仲間として扱わない。むしろ，感情的，感覚的に相対してこそ，自然の意味の対等な立場が築かれるものなのだ。これを悟ったのは，私が独りぼっちの旅で，まさに一個の飢えた人間となって，彼等に接した時であった。

彼等が，われわれには理解出来ない，あるいは不合理な風俗習慣を持っていることは事実である。しかし，その中にもそれが当然とみなされるに至った歴史と，環境の背景を内包しているのである。一方それらが今や急速に崩壊して，新しい時代への脱皮が進行しているのも事実である。

ネパール滞在中，私のネパール観は二転三転したし，今もなお定まらない。それはこの国の複雑さと，激動する時代の波に混乱している彼等の浮動性によるのかもしれない。だが，とりもなおさず，何百年か後には世界はひとつになり，人類は国境のない共同体を作るだろうというバラ色の希望と，何千年たっても結局人間は永遠に理解し合えないものだという灰色の宿命感の交錯のうちに，私自身が低迷していることの反映であるかもしれない。従ってこの印象記も，ネパールという国の持つ複雑さに加えて，私自身の自己矛盾の記録でもある。

水と生活

聖なるガンジスは有名である。ヒンドウ教徒の多いネパールでも，水や川が神聖視されている。勿論，生活の糧としての水の重要性が認識されればこそ，宗教の中でそれが高い位置を占めるに至ったと見るべきであろう。

首都カトマンズの水道事業は，インドの経済援助で着々と進められているが，消毒もせず，河水をそのまま送り込んでいるのが現状である。少量の例外を除いて，市民は道端の共同水栓を利用するが，時間給水なので，朝夕水ガメを持って水場に集まる女達の風景が，カトマンズの風物誌に欠かせぬものとなっている。女が水ガメを小脇にかかえて歩く姿

は，地方でも同じだが，何百㍍も降りなければ水が得られない村も稀ではない。そしてこれは等しく女の仕事なのである。

オカルドウンガ付近の小さな部落に着いた時は，もう夜もとっぷり暮れていた。道づれになった旅人達と一緒に，その晩の泊家を捜し回ったが，どの家でも家族が一日に使う水しか用意がないので，快く承知してくれない。尾根筋に位置するこの部落の水場は，何とそこから200㍍も降りた谷底だという。結局，われわれは椀に一杯のチャン（ドブロクの水割り）を売ってもらうのが精一杯であった。

こんなわけだから，自分の村にはきれいな，うまい水があるということは自慢の一つである。ネパール各地の民謡や流行歌の中にも，水や川を礼讃したものが多い。「ネパールの水は清く，美しく……」という歌が政府の胆入りで作られ，人々に歌われているが，当の政府発行になる外人向け旅行案内書に「ネパールでは生水を飲むなかれ」と書かれているのも皮肉なことである。

「冷たいネパールの水は身体に良いが，ヒンドウスタン（インド）の水は熱いので，飲んだら病気になる」

こんなことを言っていた旅の老婆がいた。一見科学的に見えるこの言葉も，実は宗教的信仰の所産である。神々の座ヒマラヤ，そこに源を発する水が神聖の証かしなのである。

カトマンズ盆地は，地下水の豊富な所である。そこに古くから開けた街パタンには，遠くゴザインクンドの氷河湖から，地下を通って湧き出していると信じられている湧泉がある。盆地内の各所に，こうした湧水を利用したヴァーピー（貯水槽）やダーラ（水場）や掘抜き井戸を見かける。しかし，地方では多くの場合，川の水がそのまま飲料水として利用されている。

ベナレスと同型の沐浴所が，カトマンズでもいくつか見られるが，雨季以外は水量が乏しく，利用する人も少ない。そのかわり，ダーラで水浴する人を見かけることは多い。老若男女を問わず，水を頭からかぶり，身心を浄めると同時に入浴の役目をもはたすという次第である。

死骸や遺灰を川に流す風習は，ネパールでも一般的である。カトマンズ等では薪が高価なため，充分灰にならないまま河に流すこともある。川は下流ほど不衛生になるのは理の当然であるが，透明度1㍍以下の，下流域の水も，やはり聖水にかわりはないし，勿論飲料水として使われている。

ネパール人は沐浴はしても，水泳をする人は少ない。彼等は水に対して畏敬の念，または一種の恐怖感を持っている。イカツイ顔立ちのポーターも，河の渡渉点では赤子のようにおじけづく。道の途中に渡渉のあるような所では，決して独りで通らないといった旅人の掟のようなものさえある。

ある時，私は靴をはいたままジャブジャブと川を渡っていると，老人が呼びとめ，川には神が住むのだから靴を脱ぐよう命じたものである。また，渡し舟に乗る際にも，靴を脱がされた経験がある。いつも裸足で歩いている彼等にとっては苦もないことだが，靴底より汚ない舟に乗るのに，いちいち靴をぬがされる方こそいい迷惑である。

インドの古典「ヴェーダ」の教えるところによれば，足は人間の身体の中で一ばん不浄なものである。天地創造の時，原人を切りわけ，口から最高カーストのバラモン，両腕からはクシャトリエ，両腿からヴァイシャ，そして両足からは最低カーストのシュードラが創られたというのである。靴はその足よりさらに不浄なのだから，さしずめアンタッチャブルは原人のはいていた靴から創られたであろうと，皮肉の一つも言いたくなる。

ともあれ，水は生物にとって不可欠であり，生命力の源，汚れを清めるものとして，あらゆる宗教に「聖水」の思想がある。だが，ヒンドゥ教ほど，これを厳しく神格化したものはない。それだけに彼等の日常生活にそれが生きていて，合理性や科学性の浸入をさまたげている。かつては生活の智恵としての真理があったであろうが，それが，宗教という排他的，形式的な思想体系の中で，固定化されてしまったことに問題があるのである。

歴史とカースト制

ネパールの宗教は，北部のラマ教と中南部のヒンドゥ教に大別されるのは周知のとおりである。他にも回教徒や，チベットの古代宗教であるボン教や，土俗的なアニミズムを信仰する人々がいる。しかし文化的な影響力から見て，この二つが大きな役割を演じている。

山また山のネパールには，多くの異った部族がそれぞれの政治的，経済的，文化的特質を保持しつつ独自の発展をとげるための自然環境があったと言える。勿論，これらは長い歴史の中で，互に影響し合い，分化していったであろうことは，彼等の言語，宗教，風習等の比較から読みとれる。

紀元前六世紀頃から，カトマンズ盆地にはキランティという種類が住みついたと言われ，A.D. 1世紀頃まで29の小王国が，現在のネパール全土に散在していたと言う。この頃の仏教の古い型式の寺院*がカトマンズ盆地に多く残っている。

A.D. 2～3世紀までは北インドのニムシャ王の支配に，更にインド系の王族リチャビスの抬頭によりこれに隷属することになった。この頃からネパールにヒンドゥ教が浸透し始め，パシュパテイナート寺**が建てられた。

7世紀頃にはチベットとの通商が盛んになり，チベットへ仏教が伝播し，後に北ネパールに住みついたシェルパ等によって，ラマ教となって逆輸入されてくる。

---

* パタンのアショーカ王建立になるストゥーパ，ボーダナート，スワヤンブナートのストゥーパ等。

** カトマンズ郊外に現存。

9世紀以後カトマンズを中心に商業経済が発達し，11世紀には現在のカトマンズ，パタン，バクタープルが都市の型態を整えた。

13世紀に入るや，ネワール族による，商業的工芸的才能を背景にしたマラ王朝が栄える。この時代はネパールの歴史の中で特筆すべき黄金時代であった。ところが，1768年，シャー一族に率いられたグルカ軍がカトマンズ盆地に攻め込み，500年も続いたマラ王朝は一夜にして倒されたのである。当時インド半島は英軍の進攻で風雲正に急をつげていた。その後のネパールは，ラナー族による摂政政治によって，国土を守る歴史が続く。そして1950年開国に到るまで世界に門戸を閉じてしまうのである。

このようにネパール史を概観しただけで，種族間の権力の変遷や，それに伴なう文化的多様性をうかがい知ることができる。ひとつ山を越せば，全く違った言語習慣をもった種族がいて面喰うこともしばしばである。それらの間には支配・被支配の歴史があって，彼等の間の部族意識は強く，それだけに統一ネパールにとって重大な問題ではある。

更に問題を複雑にしているのがカースト制度である。インドからの移住者のみならず，グルカ王朝が，ライやリンブー族の一部有力者に高い位を与えたり，ネワール族の王，ジャヤ・シッティ・マラが14世紀に，自からカースト制度を採用したため，ネパール国内のカースト制の複雑さはほとんど絶望的である。われわれヨソ者にはとうてい全体の上下関係を把握し得ない。ネパール人は名前の最後に，自己の属するカーストや部族名をつけるから，苗字の数だけカーストがあると言っても過言ではない。

日常生活では，カースト内だけで通用する独特の様式を持っていて，祭礼，婚姻はもとより，食事の作法にまで厳しい規律がある。原則として同カーストの人としか会食をしないし，ましてや同じ鍋のスキヤキをつつくなどということは気狂い沙汰である。食べ物はカーストごとにタブーがある。卵や鶏を喰わないもの，卵は喰うが鶏は喰わないもの，料理はするが喰わないもの，喰っても良いが殺さないもの，他人の使った食器に手を触れないもの，等々実に様々である。そして隣村といわず，隣の家ではもうそれが通用しないことさえあるのだから，全く理解に苦しむ。

シェルパのパサン・ダワと二人で旅をした時のことであった。いつものように，夕方ついた部落で泊る家を捜して歩いた。

「ここはチェットリーの部落だから……」数軒ことわられて，パサン・ダワはすっかりショゲかえっている。チェットリーは，武士階級のカーストで，現政府の要職を独占する，ハイ・カーストである。数年前まではアウトカーストであるシェルパが，彼等の家に入ることなど不可能だったのだ。

もう暗くなっていた。われわれは食糧を持っていないから，何としても手に入れる必要がある。とある農家の軒先に立つや，大きな犬が吠えたてた。それを聞きつけて娘が出て

来たが，用件を聞いたら，すうっと中へ消えて行き，代わって婆さんが現われた。
「泊っても良いが，米はないよ」
「トーモロコシでいい。腹ペコなんだ」
やせ型の品のよい顔立ちの老婆だった。不審そうにわれわれをしげしげ見定めたのち「ともかく寒いから中に入れ」と言う。
「俺も入っていいかね」とパサン・ダワはオズオズたずねた。勿論さというように，頭を振る婆さんを見て，彼は白い歯をニッと出して嬉しそうに笑った。

二人が炉で暖をとっていると，婆さんは生のトーモロコシをさし出して，「メシが出来るまで間があるから，これを焼いて喰べなさい」という。私はこの家はチェットリーではないのではないかと怪しんだ。もしそうなら，アウトカーストの二人を家に入れ，あまつさえ，炉を使えなぞとは言わないはずである。だがその疑問は，二人の娘が食事の仕度を始めた時，すぐに解けた。部屋の隅に，もうひとつ炉があって，その壁には神棚があり，うやうやしくお灯明をあげてから，炉に火を入れたのである。つまりわれわれが，トーモロコシを焼いているのは客用というわけなのだ。

話好きな婆さんだった。それが一段落した頃合をはかって，私は聞いてみた。
「われわれがこの炉を使っても良いのかね」婆さんは，何やらゴモゴモ言っていたが，最後の「ネパール人は皆んな同じだ」と言ったのが，新鮮で爽快な響きをもって，いつまでも私の耳に残った。この田舎の老婆が何故こんなに進歩的な意見をもっているのか，私には未だに謎である。しかし，彼女にしても，もう一方の炉をわれわれに使わせたりは決してしなかったであろう。カースト制の思想は根強いし，一朝一夕で崩壊はしまい。だが遅かれ早かれ，その時がやって来るであろうことをこの田舎の老婆さえ感じとっていたのかも知れない。

家とネパール人気質

カトマンズの郊外には西欧的な，スマートな家が見られるが，旧市街には，特産の煉瓦を用いたひょろ高い家が林立している。一般に，5階6階建てもめずらしくないが，天井の低い，窓の小さい家だから，外観ほど中は広くない。大きな地震でも来れば，街は一瞬にして全滅してしまいそうである。

その街の西のはずれに，私は四畳半ほどの部屋を借りていた。家主は銀行の使い走りをし，その母親である婆さんは階下で子供相手の駄菓子屋をやっていた。

一般にカトマンズの家庭は大家族制で，親兄弟は勿論，その家族まで，一つ屋根の下で住んでいるから，われわれヨソ者には，中の人間関係を仲々判定出来ない。私の間借りした家は例外的に二人暮しだったが，近所に親戚が沢山いて，半年間遂にその関係を把握出

来なかった。

一方，山村では，長男から次々に分家する，所謂「末子相続」のため，親子だけという単純な家族構成が多い。そのためか，家は小さく，一軒一部屋きりというのが普通である。部屋の片隅に炉があり，その付近が台所兼食堂であり，夜は部屋全体が寝室というわけである。家とは喰って寝るところという概念をこれほどよく説明するものはない。目につく家財道具といえば，鍋，食器，水ガメくらいのものである。

都会でも，これと大差はなく，特に台所のお粗末さは話にならない。家の最上階，すなわち屋根裏部屋が台所兼食堂である。これは階下の湿気や煙が家全体にたてこもるのを避けたものであろう。そこまで水ガメをかついで上るのが女の仕事である。食器類は雑然と床に並べられている。洗い水も，野菜クズも窓から外へ捨てる。さて食事が終ると食器を外へ持ち出して，ドロをぬりつけて，水をちょっと振りかけておしまいとなる。

私が部屋を借りて，最初に手をつけたのは台所作りである。バザールで空箱を買い求め，食器棚と炊事台を作った。家主がそれを見ていて「自分で作らなくともバザールに売っているヨ」と言った。そう言いながら，彼等は相変らず土間にしゃがみ込んで食事している。高くて買えないからという訳であろう。だが，彼等には根本的に工夫の精神がない。面倒な仕事も召使いにやらせれば苦労がない。この精神は役人がもっとも典型的に持っている。ピョンという使い走りがいて，書類をもって歩き，必要なら何時間でも待っている。だから役人には事務能率の合理化など考えも及ばないことなのである。

さて，ネパールの家には便所がないのが普通である。私の間借りした家にもなかったので，隣家のものを借用することになった。そこで，部屋代月20ルピー，(1ルピーは約50円)，便所代5ルピー，水道電気代5ルピー，合計30ルピーという契約で借りることになったのだが，この便所代の事で，帰国前夜家主とケンカをするはめになった。

初め，私は英語を話すM氏を仲介に立てて，上のような契約をした。しかもそのM氏こそ隣家の主，便所の所有者なのである。支払はM氏を通じて行なわれたのだが，初めのうち彼は自分の取分を忘れてか，全部家主にわたしていたから，家主はテッキリ30ルピー全部でが部屋代と合点したのである。ところがM氏は思い出して，後半3ヵ月分は彼の取分ある15ルピーを天引したからたまらない。家主氏は私に15ルピー未払いだと喰ってかかる。M氏にしてみれば，それまで損をして来たわけで，まだ不足でさえあった。

そこで三者会談となったのだが，ネパール語，英語，ネワール語が入り乱れての議論の末，結局M氏が家主に15ルピーわたしてケリがついたものの，後味の悪さが残った。

もとはと言えば契約の不備が招いたトラブルである。しかしこの事件の中には，ネパール人のものの考え方がはっきりとうかがえる。インテリM氏に対する家主の不信，ヨソ者に対する不信，持てる者が持たざる者に施しをするのは当然とする仏教思想，無知なもの

をだまそうとするインテリ根性，それらが混合し圧縮されて起った事件のように思われてならない。

ところで，ネパールの便所には，外に鍵があって内にはない。他人に使われないためである。部屋は勿論，自分の持物には全て，鍵をかけておくのが常識であり，もし盗まれたら，鍵をかけてない方が悪いのである。

ここでは，他人を信用する美徳とか，謙譲の美徳などでは通用しない。たとえ間違いと解っていても，自己主張し，他人をだますことが美徳である。それが出来ない奴は善良ではなく間抜けである。従って彼等にとって「すみません」という言葉は不要であり，禁句でさえある。

日本人はお人好しだという。しかしこのお人好し精神が世界中に行きわたらなければ平和共存も不可能だと思うのだが……。

農村と食生活

カトマンズの生活は，快適とは言わないまでも，とにかく飢えの心配だけはなかった。米，小麦粉等の主食は勿論，肉，野菜，調味料等，一切バザールで手に入る。高いのを承知なら，日本製カン入りビールさえ買える。

問題は地方を旅する時であった。経済的に余裕のなかった私は単独で歩くことにしたが，そうなると食糧はもとより，生活用具一切を担いで歩くのがネパールの常識である。だがそれでは旅の目的である地質調査もおぼつかない。第一採集する岩石資料の重さだけでも相当なものだ。そこで私は一切を現地食で，それも農家の人に作ってもらい，彼等と全く同じものを食べ，彼等の家に泊って歩くことにしたのである。

中西部ネパールでは，バッテイと称する茶店兼ホテルが街道筋にあり，身軽な旅が可能だが，東ネパールでは，茶店もロクにない。大きな（といっても人口数千人）のバザールか地方行政都市には茶店もあり，いくぶん都会風の食事にもありつけたが，普通は農家で頼み込みの一手あるのみであった。

農家には入口に縁が張り出していて，2，3人なら充分泊まれる広さがあるので，そこに寝床を借りることは容易である。だが「私は食物を持っていないので，何か売ってくれないか」と切り出すと，たいてい尻込みする。それには見知らぬ人への警戒心の他に理由がある。

多くの場合，「売る物はない」という。全然ないはずはなかったが，その言葉が全くの嘘ではないことが，私には良くわかる。彼等は日常，コード（四国ビエ）やトーモロコシを粉にして，ダンゴを作ったり，米と同じように炊いたり，熱湯でこねて餅状にしたりして主食にしている。毎朝，その日に食べる分を石臼で粉にひくのが，女の日課のひとつで

ある。夕方突然訪れた外来者のために用意された粉なぞないのが当然なのである。それでも，私の無理を聞き入れて，私の食事を先に出してくれた後で，自分達の粉をひいたりするのを見ると，彼等の親切に心から感謝せずにはおられなかった。

拒否のもう一つの理由は，米を出さなければならないという危惧である。役人達が地方へ行く時には，ポーターに米を担せて，豪勢（？）な食事を召使いに作らせるのが常である。彼等は，私を見て役人と思ったり，外国人と知って高級な食事を出さなければと懸念するのである。実際，遠くのバザールから買って来た大切な米を，私のために出してくれた時なぞは，感謝というよりは，むしろすまないと思ったのだった。

第3の理由，ここでもまたカースト制度が問題になる。

とある部落でのこと，例によって宿泊と食事をたのむと，お安い御用で，といった調子の良い返事だった。だがいくら待っても食事の用意をする気配もなく，家人はヒソヒソ話し合っているばかりである。私が催促するとその家の主人はオズオズ言った。

「わしらはカミンだが，それでもお前さん，わしらの作った飯を食うかね」

カミンというのは鍛冶屋のカーストで，皮はぎ職人，仕立屋等と同様，最低の身分である。現在は必ずしも鍛冶屋をやっているとは限らず，部落の端の方で，ほそぼそと農業を営んでいたりする。

「俺は何んでも，誰の作ったものでも食う。人間は皆な同じだ。第一俺の親父はカミンだが，俺達の国じゃ一番エライんだぞ」と片言のネパール語で演説をぶって，早くメシを作ってくれと促した。

出て来た食事は上等とは言えないまでも，彼等にとって最高のメニューだった。サットウ（トーモロコシのハッタイ粉）にダイ（ヨーグルト）は私の大好物だったので，顔中を粉だらけにしてむしゃむしゃ食ったら，ようやく安心したのだった。

私を食事に招いてくれる役人もあった。彼等は外国人の私と英語で話をし，囲りの農民達の前で気取ってみせたい，というのが本心かもしれなかったが，そんな時の食事は，とびきり上等なので，貧すれば貪すのたとえ通り，有難く御馳走になった。

ネパール人は1日に2回しか食事をとらない。その是非はとも角，食糧調達という面倒な仕事が一回減るという単純な理由から，私もそれに習った。そのうち朝食を頼むのも面倒になって，夜明けと共に歩き出し，10時頃手持のものを食べて朝食とし，夕方ついた部落で宿と夕食をたのむというペースが確立した。朝食用の食糧は，バザールや，比較的豊かな部落で，3，4日分ずつ買い込んだ。主に使ったものはチューラ（乾飯），サットウ，ツアンパ（大麦のはったい粉）インド製ビスケット等であった。

だがその朝食も底をついて，一日中水ばかり飲んで歩いたこともあった。通りがかりの少年がトーモロコシをくれたり，赴任途中の役人がチューラをめぐんでくれたり，道ずれ

になった青年が，私の食糧調達を助けてくれたりもした。今思えば国辱的な乞食行為だったかも知れない。しかしこうした人に限ってお礼にとさし出す金品を受取らないのである。逆に食事に招いておきながら，金をとったチャッカリ役人もいたけれど……。

地方に住む農民達の生活は貧しく，毎日が生活との闘いである。急斜面の土地から上る収穫は少ない。隣の部落へ行くのにも急な山道を登降せねばならない。何もかも想像以上の不便さである。そんな彼等がいつまで，その明るい笑いや素朴さを保ち続けることか。その平和はいつまで続くのか。いずれは外界を知り，自分達の底知れぬ貧しさを知る時が来るだろう。「知らぬが仏」の幸福がよいのか，少しでも物質的な富を与えることの方がよいのか，私には解からない。だが，否応なしに押寄せる文明の波を避けることが出来ないことだけは確かである。

新しいネパール

1950年の開国と同時に，外界のあらゆる文明の利器が洪水のように，首都カトマンズへ押し寄せて来た。それと比例して都市と農村の格差は拡がり，同時に彼等の素朴さや純心さを削取っているように見える。

首都とテライの一部の街には電気がある。しかし夕方のラッシュには，戦時中のローソク送電を思わせるような心細い明るさになる。現在のところ大部分が，重油の火力発電にたよっていて，大規模な投資を伴なう水力発電は，ようやく最近になって，外国の援助で着手されたに過ぎない。

石油ストーブも文化生活の花型だが，石油も，ストーブも輸入品だから，庶民にとってはやはり薪を節約して使う方が経済的である。

自動車，これこそ文明の象徴であり，国家建設の重要な担手である。インド〜カトマンズ間の自動車道路の完成と共に，自動車は急速に増加し，カトマンズ周辺だけで既に3,000台に達している。かって車体を解体し，ポーターの手によって山を越え，カトマンズでまた組立てられたという事は，昔語りとなっている。それと並行して，国内の自動車道路網も，中共，インド等の援助で徐々に進められている。だが嶮しい山を切り拓く工事は遅々としており，輸送手段としてのポーターが姿を消すには，まだまだ時間がかかるであろう。

通信網も全く不完全である。地方都市と首都を結ぶ無電は政府専用だし，電話もカトマンズのみである。手紙は飛行機便が一部都市間を結ぶのみで他は飛脚がとどけるわけだから，江戸時代と大差がないわけである。

新聞，雑誌もカトマンズだけ，ラジオ放送は朝昼晩と2時間ずつ行なわれているが，受信機の普及率が低いから，こもれ一部の役人か金持のものと言える。映画は数少ない娯楽のひとつだが，電気のない地方では当然この恩恵に浴せない。

新興国の常としてまず工業化したがるものであるが，ネパールもこの例にもれず，テライ地方の街（ビルガンジー，バイラワ，ネパールガンジ等）やカトマンズのバラジュー，パタン地域に工場が建設されている。そこで生産されるものは，セッケン，マッチ，タバコ，小麦粉（製粉），織物，砂糖等消費物資で，いずれも粗製品ばかりである。自国消費分を自給する体勢を作るというのであれば結構なことであるが，とうてい輸出できる代物ではない。

現在ネパールが曲がりなりにも開発を進めつつあるのは，実は，多量の，あまりにも多量の外国援助のおかげである。米ソは勿論，インド，中国，その他の資金や技術援助に，おんぶしきっているのが現状である。だがあまりにも無計画な投資は，かえって経済的なバランスを失ない，社会不安の種ともなる。そのひとつの例が医療面に表われている。医療施設は着々と整備されつつあり，その効あって，不幸な死が減少していることは全く喜ばしい。だが当然のことながら一方では人口増加という問題が起きて来る。今でさえ貧しい農民を餓死させないだけの根本的な農業施策が必要になっている。

「今日のネパールは，日本の明治時代だ」ネパールのインテリ層は良くこう言うが，百年前と今日では外界の進歩の度は比較にならないし，更に幾何級数的に速度を増している。彼等が先進諸国の経済レベルまで追いつくには，かつてわれわれの先人が維新以来続けて来た努力の数倍も数十倍もの努力が要求されるであろう。

日本が明治維新以後，急速に発展したのには，日本が一民族で構成されていたことが大きく幸している。多くの社会的歪みは出たにしろ，また必要以上に強調されたきらいはあるにせよ，民族意識と国家意識との強い結合があった事が重要な要素となったに違いない。

その点，ネパールは不幸な状態にある。前述の如く，この狭い国に多数の種族があり，言葉や習慣を異にするばかりか，カースト制が更に問題を複雑にしている。種族やカースト間の不信感は根強く，国家意識という次元より低いところで敵対感情をもっている。

ネワール族達は，かつてのマラ王朝を懐古しつつ「チェットリーの奴め」と，現政府を批判する。タマン族はかつて自分達の祖先もチベットから南下して来たことを忘れて，「ボテはドロボーばかりだ」という。

シェルパは，「南の奴等はウソつきだ」という。

こうした彼等が，共通の利益として，国家の繁栄のために団結するには，厳しい努力と長い時間が必要であろう。このため，政府は初等教育の拡大強化に熱心であるが，これにも，多種族共存の国家共通の難問が横たわっている。すなわち言葉の問題がそれである。一応，標準語のネパール語で教育が行なわれるわけだが，彼等の多くは，日常，部族語を使っている。だから，まず，ネパール語の教育から始める必要がある。その上高学年では

ヒンディ語や英語で学習するから，これも勉強せねばならない。古典理解のためにサンスクリット語もやる。これでは何のことはない。語学ばかりやっているうちに卒業である。事実，他の教科の学力は著しく低く，高校生（日本の中学生にあたる）が，3桁の割算がロクにできない始末なのである。

こうして喋ることだけが達者な，無能な役人がドンドン生産され，働かざるインテリは激増するのに，有能な技術者や指導者はほとんどいないのである。その中で，カースト制が示す労働蔑視の思想はますます助長され，ネパールの前途に暗澹たるものを感じさせるのである。必要なのは働き且つ考えるエリートなのだ。

R氏はかつて農業省の役人だったが，感ずるところあって，今は小さなジャム工場を経営している。2度の欧米旅行と，日本滞在一週間の経験のある彼は語る。

「ネパール人はすぐに『ネパールは小さな国で貧乏だ。外国の助けなしではやって行けない』と言うが，世界にはもっと小さくても豊かな国は沢山ある。われわれはもっと国を愛し，自国のものを愛する心が必要だ。私の工場は小さいが，今にカトマンズから，インド製のジャムを追い出してみせる」

彼の言葉に明日のネパールの良識とエネルギーを感ずる。確かにネパールは資源に乏しい。しかし，ヒマラヤはそれ自身が立派な資源であるし，水資源，テライの森林等，数え上ればいくらもある。それらを如何に開発し，近代国家として成長して行くかは，彼等自身に課せられた課題である。あまりに他力本願な今日のネパールを見ていると，過剰な，無思慮な援助合戦が，彼等の意欲を疎外し，社会的無気力状態に追いやっているのではないかと懸念される。開発という事業が，その国の国民の手によってなされるのが本筋であるならば，援助もまた，彼等自身がそう感じ得るような形でなされるべきであろう。そうあってこそ，民族の独自性を認め合うことも可能となり，国家間の友好も保証されるのではなかろうか。

ネパール一国を見ても実に多岐多様な要素の複雑な組合せで成立っている。そこには他民族のそれとは共通なものと異質なものとが混在し調和している。そうしたところへ，一つの完成された思想体系なり，経済機構を移植しようとしても，それは失敗するか，とてつもない混乱を生むのみである。われわれが真に平和を望むならば，まず相手を理解することから着手しなければならないであろう。その上に立って初めて共存共栄も可能となる筈である。

ネパールや日本のことなど

クサン・ノルブ・タワ

子供のときからいきたいとこ，いっぱいあった。テインボチエで生れて4つのとき，テインボチエの坊さんのお寺入って，そこでごはんたべて，15才のとき，坊さんの先生と，チベットのシガツエへ行った。朝はやくおきて，チョオユーの近くの山，登った。子供でしょ，死んだら大変でしょ。ものすごくむずかしかった。テイングリ・ゾンからシエカリ・ゾンへ行った。ゾンったら，日本では何だろね。札幌なら市役所とか，道庁とか，それだ。村の人，戦争やってもケンカしても，そこへ行くよ。それから，ハルツエ，そこいいとこだ。河もあるし，湖もあるし，山ないし。朝は，ものすごく気持ちいい。きれいなとこ。歌かなんかうたって，ボートに乗った。夜になると，ボートとめて，電気がないから，そこで寝た。ヤクの皮ぬいだボート乗るの，むずかしくないよ。シューとゆっくりいくからあとはそれでシガツエまでいった。

言葉できないし，どうするかなあー，字だったら読めた。お寺でならった。シガツエの町では，誰も知ってる人もないし，ぶらぶらした。商売にきたシエルパの偉い人にたのんだ。タナ・トウクデンのゴムパ，昔のお寺，そこで字ばっかり書いた。朝から晩まで，仏教の本つくった。タイプないから，手でばっかり書いた。肩がへんになった。2ヵ月ぐらい働いて120ゴルもうけた。日本の金にしてなんぼだろーね。1ゴルったら150円くらいかな，ゴハン食べて。

こんどは，坊さんのお寺入った。入るのなかなかむずかしかった。毎日チベットの坊さんとすんで，言葉ものすごく上手になった。一年半ぐらいいた。

さあ，ここで私は，チベットにずっと住んでる気持きたけどね。先生が，ここに住んだらだめ，ここいっぱい病気ある。死んだら大変，帰らなきあだめ。といった。友達もいっぱいいたし，チベットはいいとこだ。たくさん見たよ。勉強したよ。チベットはきれいなとこだ。シガツエの女性もきれいだ。田舎いったら変なとこ，くさいよ。ネパールよりもっと。寝るとき，羊ころした皮で寝袋つくって，みんな洗わないから，くさいけど，ものすごくあったかい。木ないから，ヤクのクソもやせるから，なれるまで大変。くさいよ。あれは。鼻がものすごく悪くなった。1週間2週間したら，くさくない。それで全部ごはんつくるのよ。

肉たくさんたべたよ。羊，ヤク，ゾウ，うまいよ。ものすごく元気なるよ。顔あかーくなる。女性の赤い顔多いよ。背も高い。街で，私と同じ，パンボチエ生れの女性に会った。

その人のお父さん，パンボチエの学校の偉い人，商売にきていた。ナムチエ・バザールから紙とかインクをもってきて，シガツエから塩とかウールをもっていく。馬たくさんもってた。

その人と一緒に帰ることにした。帰るとき前きた道やめて，別の道，サキヤへ行った。サキヤの人，夜は町へ出ない。死んだ人がいっぱいくるから。お寺がものすごく大きい。坊さんたくさんいるよ。何万人ぐらい。すごいおもしろいとこだよ。あそこは河に近いとこ，お寺はとても古い。そこから，テイングリゾンまで帰ってきた。僕の靴の底こわれた。シエルパの1人にたのんだら，知らないいった。別のシエルパにたのんだ〝そうだねー，坊さんだからやってもいいね〟ってタダでもらった。あのへん坊さんの着物きてたら，だいぶタダでくれるよ。みんな喜ぶんだろうね。又帰りは，チョオユーの近くを通って。スキーやったら，すぐだろうね。テインボチエのお寺に帰ると，先生ものすごく，びっくりして，喜んだ。私，勉強できた。仏教の言葉ものすごく上手になった。

ティンボチエのお寺に帰って，すこししたら，お寺の偉い人とケンカなった。手つかうケンカじゃない。口の。〝あなたここでいろいろいっしょうけんめいやらない〟とか〝女性の友達もっている〟とか私きらいになった。英語でもすこし勉強しようかなあーと思った。お寺の中で，ネパール語や英語の本みたらダメ。仏教の本しかダメ。別の本みたらお寺だされちゃう。坊さんの言葉だけしか話せない。頭の毛のばしたらダメ。座るのも坊さんの座り方しか。夜はベットにいるかどうか偉い人さがしにくる。むずかしい。きらいになった。テインボチエに外国人たくさんきたから，外国いきたくなった。それから，お寺半分ぐらいやめてインド行った。ダージリンとカリンポンに2年ぐらいすんだ。仏教の勉強したよ。インドの言葉とネパールの言葉，話せるようになった。それまで私ネパールの言葉ぜんぜんしゃべらなかった。だいぶしゃべれるようになったから，もうお寺いかなかった。カルカッタへ行って商売したり，カトマンズ行っていろいろ金もうけた。北大のナラ・カンカールにもいった。インドへはたくさんいって商売した。お寺入るのむずかしい。やめるのむずかしい。200ルピーお金だしてお寺やめた。ためるのむずかしかった。そのうち，カトマンズにホテルつくって，金もうけした。ヨーロッパ人と日本人たくさんきた。日本人の友達たくさんできた。

私ネパールにいる時，日本もっともっといいとこだと思った。日本人みんないいこといった。仕事たくさんあるし，女の人きれい。私日本にきた。ほんとはほんとだけれど，話がよすぎたね。

日本たべるものは大変，ネパール安いよ。日本のホテルで働く人と普通の人，ちょっと違うね。何かね，ホテルの人気持よくない。ホテルの人，人間なれてるね。

日本の家，みんなエレーベータかなんかついてると思った。

日本の女性勉強できる。いちどチョコレートかった。100円はらったら，つりいくらくるか，なかなかむずかしいでしょう。ネパールの女性できない。ネパールの女性計算しても早くできない。

日本へきてよかったのは，車のメンキョとったこと，歯の病気なおしたこと，スキーもしたよかった。なんでもみるのおもしろい。ひとつのホテルへ行っても，いろいろみるのものすごく勉強になる。金くる勉強でないと心おもしろくない。

こんどドイツいったら，ステール鉄鋼の仕事するか，アルプスのホテル勉強するか。まだわからない。

ネパールにいろいろな人がいるでしょ。仲よくないけど，皆きまっているもん。そこまではその人，ここまではここの人，シエルパの国にバウンきたら，なにも楽しくない。ただ泊っていっちゃう。日本ではだれとでもケッコンするね。北海道の人と九州の人だって。それは一番いいけど，むこうでは，そういうことないからね。そうでしょ。カースト制やめなくてはよくならない。どうしたらなくなるかねー。勉強したらやめるでしょ。いっしょけんめい外国いったら。外国いかなかったら絶対ダメ。

インドよりネパールの方がもっといいよ。国でもきれいし，空気もいいし，水もいい。人間もネパールの方がしんせつだと思うよ。ドロボウとかいろいろないでしょ。いままでは勉強するにインドへ行っちゃった。インドおぼえてきた。私思うけど，ネパールはインドの隣りだからいちばん悪くなった。こんどから，外国で，日本とかアメリカとかヨーロッパとか，おいしいものたべて，電気ついてあるし，いろいろ仕事あるし，それみたら，そしたらやめる。だけど，むこうのネパールの政府はなかなかパスポートくれないでしょ。私くるときカトマンズでパスポートとるのに3ヵ月かかった。毎日毎日いって大変だった。悪い人たくさんいるから，あそこ。

だからだめだ。なくならない。えらい人自分だけみて，帰ってえらくなる。みんなが学生ね。

若い人だしたら，みんながおぼえてくるでしょ。みんなグループ作って，カースト制やめろカースト制やめろと，いま100人ぐらいか1,000人ぐらいいったら，ケンカになるか，つかまるか。それあぶないことでしょ。だからダメ。そのまま住んでるだけ。自分ひとりあきらめて，ぶらぶらするのおもしろいじゃない。いまごろすこしはよくなっている。ヨーロッパ人いろいろきてるから。だけど外国から人がくるより，自分の国から出した方がよい。どこへいっても，いちばんいい国はないよ。

あなた日本がいちばんいいと思う。どこへいっても，悪いとこあるでしょ。

アメリカとヴエトナムがいま戦争やってるでしょ。きらいだね。小さな国と大きな国が

戦争したら，大きい国が悪いでしょ。あなたと同じ年の人とケンカしたら，ちょっとおもしろいでしょ。ケンカもできるでしょ。むこうが石もったら，こっちももったり。ピストルもったら，こっちももつでしょ。子供と大人がケンカしたら何もおもしろいことないでしょ。子供だからカンタンでしょ。それと同じこと。

インドとパキスタンの戦争では，パキスタンが悪い。パキスタンの国は，むかしはインドだった。カシミールはインドの国でしょ。それを私にくれ，だせといったでしょ。あなたの国がここにあるでしょ。そして別の人がきて，それ私の土地ですって言ったらあなたおこるでしょ。それと同じことだね。

中国きらいだね，チベット人の国とった。チベットには，鉄砲もないし，電気もない。中国と日本，中国とアメリカが戦争するのなら，両方とも鉄砲つくるし，飛行機つくるし，それならいい。ラサに住んでた僕の友達がいったよ。中国は夜きた。

シエルパの女の人，いろいろでケッコンするよ。だいたい20才だろうね。18才，21，22，30，35でケッコンするよ。日本と同じじゃない。14ぐらいでは，ケッコンじゃなくてヤクソクだろうね。その人，自分の中ではヤクソクしないの，お父さんとお母さんがヤクソクするの。

日本へきて，はじめてその話きいた。日本人ちょっと変だね。頭パーの人だ。シエルパ人はケッコンまでまたない。バスネしちゃうよ。

もし女の人，30，40，にもなってもらう人いなかったら，どうする。気持悪い。日本はそういう人おおいよ。28とか30でダンナさんいない人。その人ひとりで病気になったらどうするね。〝あなたのお腹いたいか〟っていう人いないし。元気になっても〝あなた元気〟っていう人いないし，大変でしょ。日本でそれ待っている人は，変なことだ。

日本の男はまってないでしょ。日本の女の人，大変でしょ。毎日思うでしょ。女の人は16すぎたら，その気持くる。体そういうふうになっている。ごはん毎日たべるでしょ。僕のネパールにいるコイビト，すきなことできるよ。シエルパの国，ケッコンしないで子供いる人，たくさんいるよ。

シエルパ人はなんもカンケイない。

日本はむずかしいね。

注：本文は日本語による口述の筆記である。

12月5日。こうしてわれわれは，当初の計画どおり調査を終了してポカラに集結した。2ヵ月半ほどの調査行であったが，ヒマラヤでなくては知ることのできない多くの資料を集めることができた。しかし，ヒマラヤは想像したよりも大きく，また想像したよりも繊細であった。そのため，末尾にしめすような地質図を完成することはできたが，これは充分に満足できるものではない。たとえば，日本でつくられているような精度の地質図は，やはり日本と同じ程度に踏査図の網を密にしなければならない。地層の時代のこともまったく不明といってよい。古生代と考えられていた地層から，新生代の化石が見付かったこともあるらしい。今思う事は，これから何回か，より充実した地質調査隊がネパールヒマラヤを訪れてほしい事である。われわれの資料はそれによって生かされ，問題は大きく深められるものと信じる。

また，われわれの収穫は，地質のことだけではない。ヒマラヤの山に根ざす自然のすべてが，われわれにとって必要なそして新鮮な資料となった。その大地に住む人々の生活や感情すらも，われわれの目的と無関係ではなかった。12月の空はそこぬけに明るく晴れ上っている。正面にそびえる端麗なマチャプチャリの姿とアンナプルナの連山を一望にみわたすこの盆地の，あまりにも恵まれた美しさは，すぐそこにある白い氷雪のおかしがたい厳しささえも忘れさせようとする。その中で旅を終ろうとしているいま，ときおり飛行場に発着するＤＣ—3型機の爆音が，満ちたりたまどろみの中に快くひびいてきた。

地質についての調査結果は，逐次学術雑誌に報告する予定である。これまでに，次の報告がまとまっているので参照していただきたい。

酒匂純俊・石田隆雄・益田　稔・渡辺興亜・伏見碩二（1968）中央ネパールヒマラヤの地質．地下資源調査所報告，第38号，北海道立地下資源調査所．

Sako, S., Ishida, T., Masuda, M., Watanabe, O. and Fushimi, H.: Geology of the Central Nepal.（地質学雑誌に投稿中）

なお，石田隊員は，隊の解散後独自に東部ネパールの調査を行ない，次の報告を行なっている。

Ishida, T (1968) Petrography and Structure of the Area between the Dudhkosi and the tambakosi, East Nepal.（地質学雑誌に投稿中）

石田隆雄（1968）東部ネパール産ザクロ石黒雲母の物理性質と変成度について．北大理学部修士論文．

グスタング氷河への旅

渡　辺　興　亜

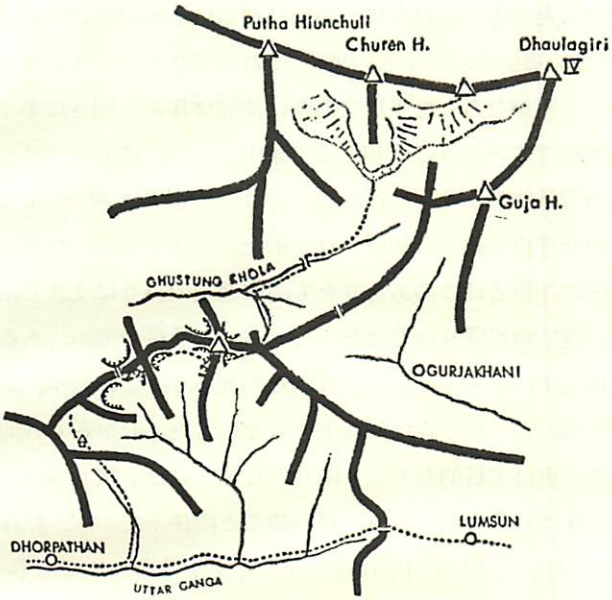
ダルバンよりグルジャゲートへ

10月16日，ダルバンの宿場の少しさきから登りはじめた道は思ったより長く，峠に着いたときは，かれこれ1,000 m近い標高差を登ったことになっていた。峠の反対側に，唐突に，いかにもヒマラヤらしい作法で現れたダウラギリの連山は，圧倒的なスケールで僕の前にあった。ダウラギリやアンナプルナ・ヒマールはインド平原にいた時から見えていたが，近づくにつれだんだん見にくくなり，ここ数日間は全く見ることができなかった。

これからの道は，しばらくダウラギリ連山と平行にはしっているので毎日豪快な景色を味う事が出来る。カリ河沿いの低地にいた時は，毎夜活動していた南京虫も，これからは少し寒くなるのでおとなしくしてくれるだろう。事実タルコンでの防戦以後，敵はすっかり鳴りをしずめてしまった。

10月18日，僕等はルムスン村に着いた。この村の名前は，日本にいた時からすでに知っていた。1960年ロバーツ大尉がここから道を右にとってグルジャ村に入り，チューレン・ヒマール，ダウラギリⅣ峰への接近路を探り，それを見出した事を，ヒマラヤン・ジャーナル誌に報告していたからである。1924～26年，インド測量局によって作られた25万分の1ネパール地形図は，高山地域でしばしば重要な誤りをおかしている。この辺りでも例外でなく，それは完全な誤りとなっていた。

地図上グルジャカニを通って西に向うマヤンデ・コーラの支流は，その源流をチューレン・ヒマールに発していることになっているが，実際はグルジャカニのすぐ西にダウラギリ連山から南にはしる支稜があり，これが分水嶺となり，チューレン・ヒマールから流れ出る河はベリ河（カルナリ河の支流）にそそぐ。つまりチューレン・ヒマールからの河は，一旦南に流れそれから西に流れをかえ，地図上の山を越えてベリ河にそそぐというのが真相なのである。河は山を越すことが出来ぬから，その支稜は実際は地図上の位置に存在しないという事になる。（第1図）僕等は当初，ルムスン村からロバーツの道をたどり，彼の発見したグスタング氷河に行き，そこを調査地にするはずであったが，ここまでの道で，グルジャカニでは人夫を集めるのは困難だという事と，ほんの1月前に英国空軍のダウラギリⅣ峰隊がドールパタンからその氷河に入ったという情報を得たので，僕等もドールパタンから氷河に向う事にしたのである。ドールパタンにはチベット人の避難民キャンプがあり，人夫を得るのは容易だということであった。



第1図　チューレンヒマール付近の地形

（注）この地域に関するインド測量局の地図の誤まりは，1965年に，J.O.M. Roberts によって既に発表されており，薬師編の Compiled map にも採り入れられている。
A.J. vol. LXXI. May 1966. NO. 312
J.O.M. Roberts の With the Royal Air Force on Dhaulagiri IV にこれとほぼ同じ地図が掲載（P. 85）されている。

ルスムンから道は急激な登りとなった。登りはじめると昨日まで半月以上も快晴が続いていたのに，それが一転して今にも降りそうな気配となった。もう雨は降るまいと昨日カサを荷物の中にしまいこんでいたので，ここで降り出したら厄介な荷解きをやらねばならぬ。それでも，時々降り出しそうになった雨も結局降ることもなく昼すぎ峠についた。

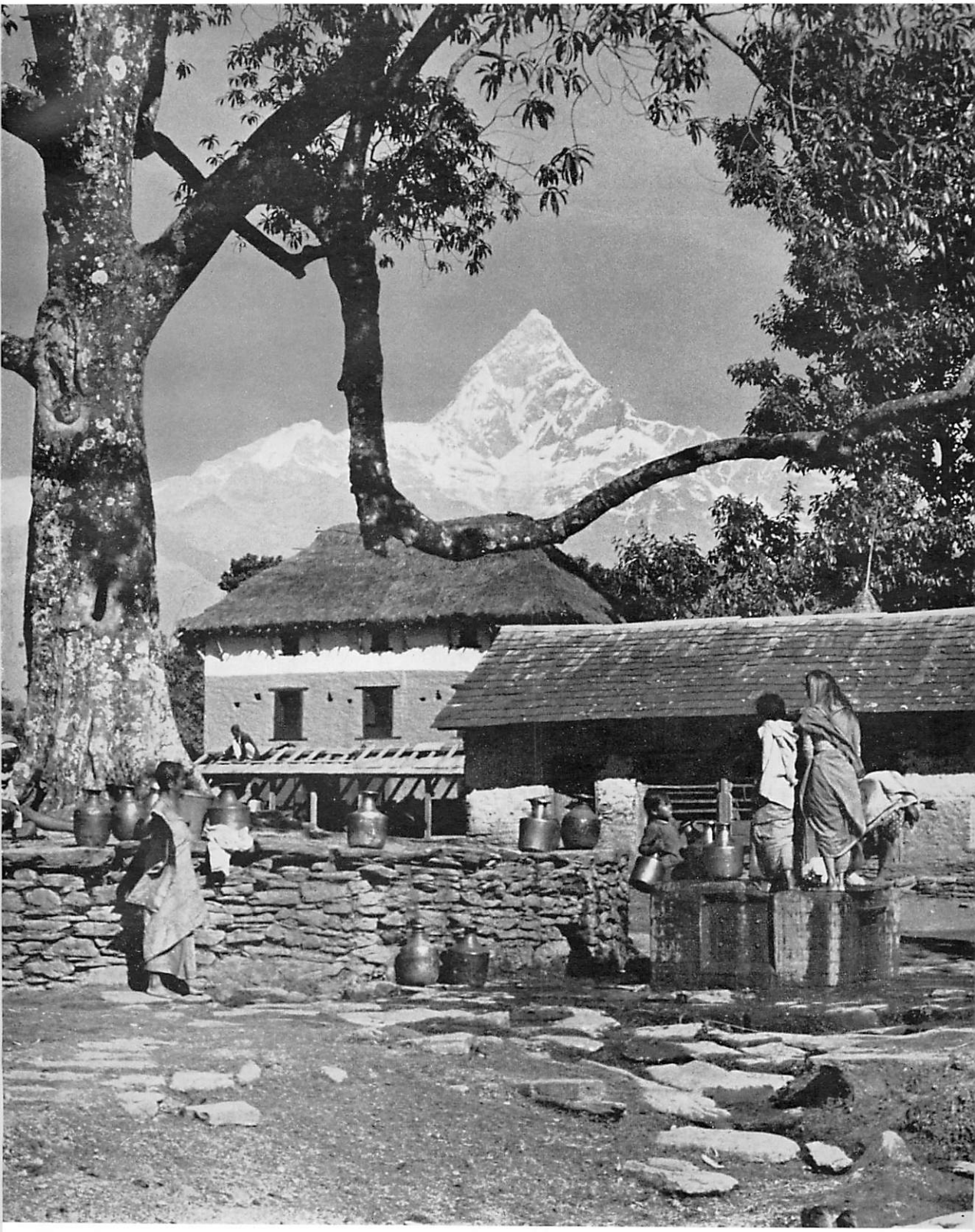
途中，ポカラまで買物にいった帰りのマガール族の3人組と親しくなったが，彼等は峠で道をいそぐ事をしきりにすすめてくれる。少しポーターの来るのを待つ事にして彼等と別れる。

僕等の氷河調査班は，3人の隊員と1人のシェルパ（パサンダワ）からなっている。通常は，地質調査をしながら歩く僕を除いた3人が，ポータの監督をする事になっていた。しかし，この日は高松ドクターが道の聞きこみにドールパタンに先行していたのと，比較的平坦な道では地質調査をしながら歩く速度とポーターの歩く速度が大体似ているので，全体としてはそれ程はなればなれになるわけでないのだが，今日の峠道のような急坂となるとポーターの速度が急激に落ちるので，結局隊が3つに分かれていた。11月に近い標高4,000 m は猛烈な寒さである。30分もポーターを待つと，もう寒さが我慢出来なくなってしまった。今日の宿場グルジャゲートまでは，ここから2時間も歩けば着く距離だ。先に行ったマガールがたき火でもしているにちがいない。そこで待つ事にしようと歩き出した。天候はますます悪化し今にも降り出しそうだ。途中久しぶりにチベット人の一家に会う。1年半まえに，彼等の中で生活したことがなつかしく想い出される。僕は合掌して「ナマステ」とチベット風アクセントを使って挨拶を送る。彼等は顔一面に微笑を浮かべた。子供が2人近よってくる。実になつかしい。子供は僕に近づくと両手を差し出し「ジガレ・レオ」（たばこをくれ）という。一瞬がっかりするが，僕は喜んで新生を2本プレゼントした。チベット人の世界にやってきたのだ，たばこ位やろう。

峠からの下り道は，登りが急坂だったのとうらはらに，傾斜はゆるい。峠のあたりや周囲の山は，明らかな氷蝕地形を示している。チベット人の世界，それは同時にかつての氷期に氷河が存在していた地域である。氷河がならした平坦な高原に彼等は住み，圏谷に羊やヤクを飼う。途中モミの林に入る手前でアメリカの平和部隊の連中と会う。彼等の姿は，今ではネパールのどこでも見られる点景物のようだ。行けども行けども宿場は現われない。マガール族の人達が道をいそいだ理由が次第に理解されて来た。地図上ではそれ程の距離ではないのだが，どうやら地図の作製者はこのあたりをも高山地域の誤りにまきこんでいたらしい。夕暮れがせまる頃，遂に雨が降りはじめた。モンスーン最後の雨か，あるいは地中海あたりからやって来た低気圧による冬の気まぐれ雨なのだろう。この雨が，最後まで僕等を苦しめることになったのだが，その時は知るよしもなかった。峠から4時間程歩いたとき，目指す宿場に着いた。雨は本格的などしゃ降りとなっていた。宿り場は，近くの村の夏の放牧地で，カルカと呼ばれるものである。夏の間ここに住んでいた人達は，もう自分の村に帰ってしまっていた。そこいら中，山羊か羊のフンが敷きつめてある。今日中にポーター達がここに着く事はあるまいと思いながらマガールの人達のたき火をかこむ。食糧もないし寝袋もない。今日は寒い夜をすごさねばなるまいと，マガール人の食事の準備をながめる。ヒエを煮，唐辛子と干肉と岩塩だけのタルカリ（御飯にかけるスープ）を作っている。粗末な食事だが，こちらはそれすら美味そうにみえるほど空腹である。僕はポケットの中の金を数える。2ルピーはあるな。これで今晩の食事にはありつける。食事の用意が出来ると僕がいい出す前に，僕の分の御飯もよそってくれ，今日はもうポーターは来ないとなぐさめてくれる。寝る時も一番上等な毛布を借してくれた。

僕等はついに氷河の世界にやって来た。標高3,500 mのこのあたりには現在氷河はない。しかし，かつての氷期に，このあたりまで氷河が存在していた事は，現在残っている特異な氷蝕地形によって明らかである。もし当時のヒマラヤを見る事が出来るとしたら，その白い部分はずっと下まで降りていたにちがいない。今僕等のいるこのあたりは，草も木も生育し得ない岩と氷の世界であった。

第四紀とよばれる最近の2百数十万年は，氷期とよばれる寒冷な気候の時期と間氷期と呼ばれる暖たかい気候の時期が（そのうちのいくつかは現在よりも暖かであったと考えられている）交互に現れた事を特徴とする時代である。現在，近代的な都市がたくさんあり，いろいろな国に色分けされているヨーロッパ大陸も，かつてはスカンジナビヤ半島に中心をもった大きな氷床によっておおわれていたといわれる。その当時の氷の量は，現在の3倍に及んだ。19世紀の後半にスイス生まれの地質学者ルイ・アガシー等によって，ヨーロッパに想像に絶する氷床が存在していた事を体系的に論



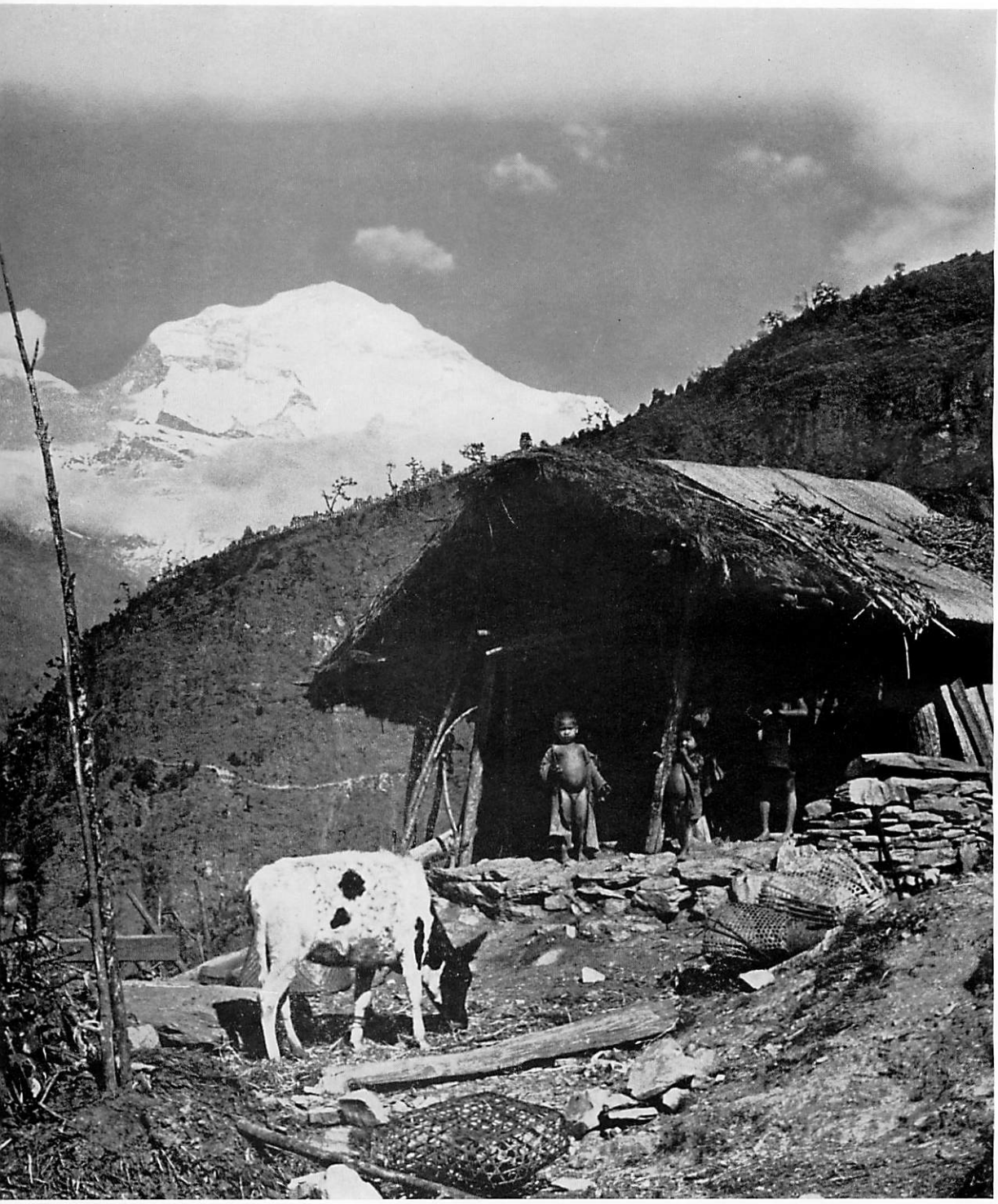
ポガラのダーラ（水場）

段々畠

ひえつみ

昼下りの庭先

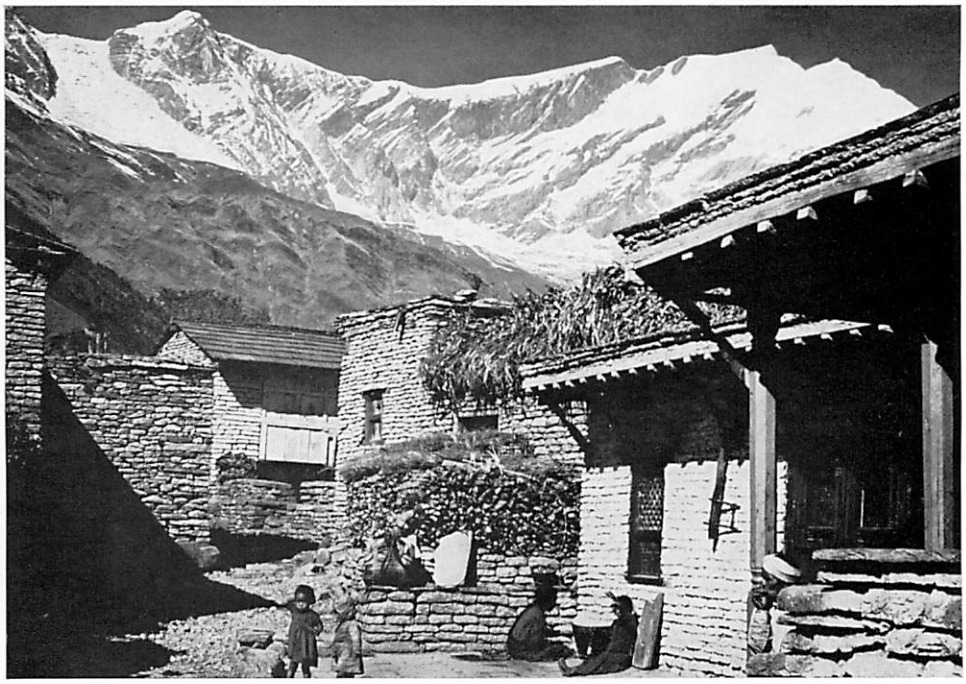
タルコンあたり



ダウラの見える村

娘ポーター

タンシンバザール



タコーラの家

羊 追 い

タトバニの交易風景

ドールパタンにて

市村　渡辺　パサン・ダワ　遠藤　酒匂　益田　高松　米田　伏見　テンジン　石田

ネパール鉱山局にて（左よりシャルマ博士，リマール博士，酒匂，石田）

クサン・ノルブ・タワ

小野田

酒 匂 純 俊 (35)：隊長．地質調査担当．
理学博士．北海道立地下資源調査所勤務．

渡 辺 興 亜 (26)：副隊長．地質および氷河調査担当．
北大低温科学研究所大学院生．
1963年北大西ネパール学術調査隊に参加．

石 田 隆 雄 (24)：地質調査担当．
北大理学部地質学鉱物学科大学院生．

益 田 稔 (23)：地質調査担当．
北大理学部地質学鉱物学科学生．

伏 見 碩 二 (23)：地質調査担当．
北大理学部地質学鉱物学科学生．
2年間にわたる北極海の氷島生活を終えて帰国の途中本隊に合流．

遠 藤 八十一 (23)：氷河調査担当．
北大低温科学研究所助手．

市 村 輝 宜 (26)：植物調査担当．
北大理学部植物学科大学院生．

高 松 秀 彦 (28)：医療担当．
札幌医科大学大学院生．

米 田 功 (26)：写真担当．
市立赤平綜合病院X線技師．

小野田 文 彬 (31)：渉外担当．
東京大学文学部宗教学科学生．
デーリー大学留学生．
1963年北大西ネパール学術調査隊に参加．

シェルパ達：テンジン (27)
クサン・ノルブ (24)
パサン・ダワ (18)

この3人は，エベレストのふもとパンボチェ村出身の兄弟である。テンジンは，ヒラリーのマカルー隊 (1961～62) やインドのエベレスト隊 (1962) などに参加したベテラン。妻とは死別したが，村では3才の娘の父親である。クサン・ノルブは，タワという称号をもつラマ教の僧侶で，チベットやインドで修業を積んだが，商才あって坊主は廃業，専ら金もうけに多忙。我々の招きで来日，ほぼ2年間滞在した。末子のパサン・ダワは，遠征隊には初参加であったが，シェルパの器用さを発揮した。しかし，村に帰れば田畑を相続する身分で，いかにもおっとりしている。2人の兄の分も親孝行しなければならない。

つれづれならぬままに

——自然と人との調和への想ひ——

小　野　寺　文　彬

いざない（古き詩より）

五月をわたる風に，
戻ってきた日の光が交錯すると，
着膨れた心は魔法壜の中で，
ふつふつといらだちながらも，
奇妙な凝縮をする。

花を犠牲にした
木の葉のみずみずしさが
厭はしくなった心。
そこに，
五月の雨は
緑の精の雫となって落ち，

花花は束の間の息を吹きかえす。
だが，そのあまりのあでやかさに
怯えた心は
ところもあろうに
緑の懐に逃げ込んでしまった。

やがて，六月の重たい雨は
花達の華やかな宴を洗い流すだろう。
花弁の醜い死骸が六月を蔽うだろう。
その上を，宿酔いの猫がのたうちまわる。

夏がやってくる。

薄白いぼやけた都会の空の下で，
私は五月の倦怠を貫き破るような

透徹した青さを夢みた。
私はそこに
大きな鯉のぼりを泳がせよう。
私は澱んだ空を爆破する。
そして，つきせぬ碧さの中に，
潔(いさ)ぎよく昇華しよう。

(1960・5，24)

ためらひ（或る若者の手記より）

其処はなんの変哲もない山の鞍部であった。山道を登ってきた人々に，未だ見ぬというだけで甘美な衰弱した幻影を与へる峠では，さらさらなかった。尾根の巻道がその務めを終えてやって来，再び次の巻きにかかる中継点としての鞍部で，こうして立って眺めている眼前の山村風景も，今迄歩きながら，ぼんやり目に送り込んできた映像を今度は視点をとめてゆっくりと吸い込めるというに過ぎなかった。

ところで，眼前に展けている景観も，云ってしまえば，なにげないものであった。大きな山の斜面一杯に，空からだと，きっと厚紙を重ねて作った地型模型のように切り刻まれて見えるに違いない段々田，そこに散在する濶葉樹の木立，果樹園と菜園に囲まれた聚落。斜面を一気に下の谷川まで馳け降りる浸蝕を始めたばかりの数条の傷。或る村落より，他の村落へ，水車小屋へ，尾根の周辺に払がる放牧地へ，そして，向うに頭だけ覗せている薪採取の共有地へ行く小道の数々。そして斜面の中腹を端から端まで貫く一筋の街道，といった具合であった。なにげない感じの女が結局は凡ゆる状態の推移がもたらす変化のどんな点でも平衡関係にはいれるように，自然への無意識な尊敬によって，人間以外の自然が構成する無機物，有機物の循環する世界に，最も素直な形で人間が溶け込んでいるそこには，自然側の要因の変化にも，人間側からのにも，それが如何に犠牲を伴うものであれ，即応する平衡保持機構が見事な調和を築き上げている。それこそが，なにげなさの持つ美の要素なのだ。見つけようと思えばいくらでもこの地が局地的に自己再生産できるに充分で，居住に適している理由，又それがどれ程，偶然の重合の結果であるかを論うことはできる。然し，居住する人々にとってそんなことは，とほに何代もの試行錯誤の後に分っていることで，問題はその人々が如何に自然の課した規律に主体的に従っているかという点であり，そのことが大いに美しさを産みだす上に役立っているように見えた。

悲しいことに，私は似非旅人であった。真の旅人は何時何処でも美の構成要素の担い手となれる。彼は主体的に時間を旅しているので，地理的に位置を換えることはその人にとってはどうでもよいことなのだ。彼は村人といつでも話せ，村人の身になって，作物ので

きについて，来年の作付について，子供等のことについて語り合える。知恵を与え，且つ受取る。彼は体験してきているのだし，無主物の時間を自由にできるうえに，それを惜しみなく誰彼に与えられる。又，それだからこそ，時間と対等にもなり得る。似非旅人はそうはいかない。この大地に足をつけて生活している人々と挨拶を満足にかわすことすらできやしない。時間をともにするのはおろか，素直に物を見る目すらないようにみえる。彼には悲しさが分らない。自分が地理的に位置を変えても，自然が時間とともに変化しても，自分にとっては変りがないことが。彼は切手蒐集家のように，行った数々の土地の写真を集めまくるが，なにも知識を増やしたわけではない。彼は主体を持っていると思っているので，力めば力む程，砂にもぐり込む自分に気がつかない。幸福ではあった。誰一人本当にははいってこない空間風のびゅうびゅう吹き込む廃屋にも等しい家に寝起きし，まがなすきがな，空間風ふさぎをやり，時には，うれしさのあまり自分の眼耳(めみみ)までふさいでしまうのだ。

冬枯の木立のはづれに足をとめ，背中に控えめな日差しを感じながら，そう思った。そして，かつて心を占めていた，傷つけられてしまった一つの風景を労る気持ちで，萎びた菊一輪供えられた地蔵尊の前をゆききし，尚眼は対岸を離れないでいた。

空間風ふさぎをやってきたことが分ったからといって，急に次元の違った世界に移ってしまえたのではない。それどころか，双六の中継点にいたのが賽の目の都合で，振出しに戻されたようなものであった。それは奇妙な夢であった。だから，分ってはいるのだ。徒に賽を振っているだけで，必ずそこに辿りつくことができることを。又，その点からは幾ら振っても，殆んどはその場どまりであり，時たま振出しに戻されるといった具合であることが。それは世にも不思議な双六であった。夢の中で，やたらといくらあるかわからない多面体の賽をころがして，いきつもどりつしていた。そして，そこから渺としてみえぬ〝上り〟らしき方向へ眼を凝らしてみても無駄であった。道はあるように思えた。僅かの人が通ってゆくのを見たような気もした。そこはそこはまるで，エネルギーポテンシャルの違った二つの相が接しているかの如くであった。私は畢竟，音をたをたてながら水中を駈け廻り飛びたってしまったカある友どちを羨む分子ではなかったろうか。

日ははや暮れなんとしていた。下りはじめた尾根道のところどころより，西に連なる黒ずむだ遠山が見霽るかされ，その彼方に雲を吹き上げる一きは高い山がみられた。それらは，ひっくるめて一つの視点に立った時の私の持物であった。あのいまわしい切取られた後もなく復元されている風景を人間なる構成要素を省いてみるとき，訪れる感情はおだやかなものであった。……

あげつらひ

私を取巻いている空間，私を通り過ぎて行く時間に生起する総ての現象は，本質的には例えば，Es gibt 構文で表現されるような非人称的な世界に属するものなのだが，私なる人格は，目覚めている限り，自我を無数のこれ等非人称的構文の総和である茫洋につなぎ留めようとする。

「旅」なる語感を，「家を離れて，一時遠いところに行くこと。」に跼蹐せしめるのは意に添はないものだが，視野を地理的旅における主体の移動の軌跡に限り，この努力，即ち私のかかる非人称体系への関与の仕方の種々の態様を，研ぎすまされた精神と節度ある行動との融和を欠き，従って，必然的にその微妙な統合への訓練を欠く風潮の今日(こんにち)氾濫する旅行記の類にみれば，往々にして，そこには単なる見慣れなさが怠惰なる精神を僅かに揉ったに過ぎない結果である印象が私を瀘過することなく，それにも拘らず，私が傍若無人に振舞った結果として羅列されている。謂ってみれば，それは主格的助詞を携へた私なる人格が「みえざる秩序」に支配された対象に，なんら心を致すことなく徒らに空拳をふりまわしている暴挙の記録であり，私を開いた受容器と化し，且つ私を対象に埋没する謙虚さを喪失し，「行くもよし，行かざるもよし。」の心境を遠くはなれ，時間の奴隷となってしまった私への認識を欠いている。だから，そこでは，主体が通り抜けた人文環境に対するひとりよがりで，質量の陰影が全くないか，模糊とした付加語を伴った一般命題が作り出される傾向にある。例えば，事実は「私が或る行為をしたのに対し，相手が或る行為を働いた。それが私に或る種の損害を与えた。」であったとする。若し，そんなことが数度重なることがあると，私は記録するだろう。「私は或る地域で何人かの私に害を与へた人に出遭った。」と。

ところが，時に私は状況を顧みず，又，特殊を普遍化して，「或る地域には悪い人が多い。」という一般命題の表現をとる場合があるのだ。対象の良い点を称へる際の質的説明の不足は未だ見逃せるが，これは全く許せないと私は思う。

確かに，この行為に酌量される余地を与える出発点となる観点がないわけではない。つまり，私は人間なる種の限界の指標を意志の質的伝達の不能さに置くものだが，人間はその状況に対処するのに自らを蠶となし，幻影の糸を吐き出して作った繭の中だけで，息のつける静謐を作る努力をする。ところが，それとて息苦しく，常に自らのつくった殻を打ち破って，その外にひろがる媒質に飛び出そうとする衝動に駆られている。そこにあるのが自らにとって不明な場だという理由だけで。

だから，一時空間的に繭から出たものは初めから場の不確かさに安堵の念を以って倚りかかり，そのことに身勝手な疑似確信を持っている。この始末の悪さ，それと気付かぬ因循姑息さは総て頭脳の使い惜しみに起因する自らを取巻く世界の多様性に安住できない狷

隆なるなる精神にある。

然し，我々にそうでない方向への意識，或いは歩みがなかったのでは決してない。今，それを詳細に検討するには，口過に徒々ならぬ無思考の時多き者にとっては身の程知らずとて，ここでは，世の常として，言葉が内包する質量が最早正確に計量されず，形骸のみしか残っていないとはいえ，人間の言語構造形成の歴史には，自己の所有或いは占有をすら，私を位格的な立場に置いて表示しようとした形式が存在しており，これは現に「持つ」なる動詞によるもの，所有格，格助詞によるものと並列して存在するし，又或る言語では全く「持つ」なる動詞を欠いている場合すらあるのだという事実を指摘するに止めよう。私はそこに自己を無意識のうちに非人称的体系と等質ものに置いた人の心を感じ，そのつつましやかさをみる。

前段の文章で，私は「切取られてしまった自然の一部分」についての説明を省いているが，それは対象と個の関係を象徴化する作業の糸口と理解してもらえばよい。私はこの愚痴のもつひよわさを好まないが，そこに包含されるものを想察するのにやぶさかではない。それは，このためらいこそが人を人たらしめるものであり，このつつましやかなたゆたひの過程にこそ，創造が育まれるものだと信じているからである。

かたらい

1963年の山旅で，私はここに登場するノルプと友人になった。頭の中で，私はそれを中心とした話を渦巻く星雲のやうに動かせたまま今日に至っているが，ここではその後の小さな旅での素材を未醗酵のまま投げ出そうと思う。誤まつた因果関係を示唆しないよう，私は極力言葉を控えよう。時の密度を高められぬとて，徒らにその短かさを歎くまい。圧縮比の小さな私の心蔵であってみれば。

私はその時，数ケ月の旅を終へ，五千米の世界から，嘗て都城のあったなにげない小さな村まで下ってきていた。山々には雪があり，広い谷には暖かい日差しがあった。朝，窓枠にはめこまれた川向ふの丘に曙光があたりはじめ，それが中腹に下って来るまで，私は懶を決めこむ。子供達の声が喧ましくなる。私は外にでる。雞の勤勉な朝食。羊，馬そして牛のそぞろ歩き。食べるでなし，食べぬでなし。家鴨のおでまし，私は既に日差しの訪れている家主の家の屋根で，往復運動をはじめる。壺をもった囚人の一群が野に用を足しにでるのはそんな頃。

私は朝の茶を飲みに戻る。朝日が庭までやってくると，家主の弟が家畜小屋の扉をあける。水牛がでてくる。振返ってその人は「やあ」と手をあげる。そして私も。……

ノルプ，渡辺と私はそんな風に一日がはじまるそこに一ケ月留まったが，目論んだ事が

破れるや，疾風の如く平原に下り，とある路傍の茶店に袂を別った。ノルプはカトマンズ，渡辺は札幌，そして私はニューデリーへ。そこには数人の日本とインドの友人がいて，私には安らかな呼吸をする楽しみがあった。折々の日本からの便りに，私は「月は出でぬ。まろき酒買ひ求めんか。故地にして，旧き友のうたげありと聞けば。」という気分になったり，「月にしりむけんか。酒肆なき国の憂さばらし。」とおどけてみせたりしていた。然し，現実にはインド的商業資本の苛酷な条件の下で労働している人々が私の眼前にあった。私は建築の現場監督をしていた。北緯二十度の内陸に夏の太陽が照りつけると，私には「ああ，工学よ。行ってしまえ。」というひよわな感慨が訪れた。人夫達の蟻の歩み，時ならず起るインド人監督の怒声。明日があって明日のない人々。その日々の営みの中に育つ子供達。色彩が糧の不足を補うとでも云うのだろうか。ここでは工学は限られた人々を懐手にし，権力は人々を空気の欠亡した水に住む金魚にする。そして，自然に溶け込んでまった貧しき人々はまるではじめて動物園を訪れて檻の前に立った田舎者のようにこの奇妙な懐手をした一群の人々をまじまじとみつめるのだった。

そんな頃，ノルプがやってきた。彼は自分の種族名を附した木賃宿を経営し，又，ラダク生まれのチベット薬師(くすし)の卵と商売をやっているという。私は彼をインドの仏蹟巡礼の旅に連れて行った時，本能と紛うまでに純化した商う心を彼に認め，その虜になっていた。

渡辺からも手紙が来た。それには，北大1963年隊の安藤，宮地を中心に日本での生活の場を何らかの形でノルプに提供する話がでているから，来る意志を確めよ。更に1965年中央ネパール地質調査隊を出すから，それにノルプを入れて，いくらかでも旅費のたしまへにしては，後はよしなに，とあった。ノルプは行っていい，といった。彼は日本で金を貯める気でいた。私は違った世の中を知ることは一種の貯蓄だと言った。

私はといえば，全く恥しい話だが，心弱く，しだらない状態にあった。地表の一部が人工物で蔽われてしまふと，人々は直ぐ，地表の他の部分にかかる建造物の重量を計算しはじめる。すると私はスキー滑降中の方向転換の瞬間に起こるあの不安定の釣合に身を置いている自分を感じはじめるのだった。それはすべての動機の入口にも，行動への出口にもなり得た。

その頃，金があるだけで，その活動対象がなんであっても構はないという放慢な企業主にうんざりしていた私の雇傭主と私のところへ一人の老建築家が出入りするやうになった。小さな修理にも示される，ものを創ることに対する真摯な態度と，その奥に感ぜられる敬虔な自然認識の態度とに私は心惹かれていた。彼はキリスト教徒であった。私の雇傭主と私は独立して間もないこの事業主を新規建築の入札に参加させることに成功したが，この人に流れていた意志はそこでは実らなかった。意志ある個が無定見の組織に敗退した時，不安定の釣合にある私の怒りはとめどなく溢れ出て，その矛先は落札した組織の当主

から果ては私自身の雇傭主にまで向けられる仕末になった。私はしだらなくなった。雇傭主は私の気儘をそのままにさせておいてくれた。やがて，私にも彼の厚意に靠れ掛ってしまった自分を叩き切る勇気が湧いてくる筈だった。私はそれを待っていた。丁度その時，雇傭主である友の交替が決定した。私とその仕事を繋いでいるものは友の人格にあっただけなので，私の存在根拠もなくなり，それを機に再び私の時間も無主物になった。私は僅かながらある金の許す範囲で遥岑のいざなひに身をゆだねよう。行くもよし，行かずともよし，いづれにしても旅すべき日々はあるものだが，行ってしまえば，そこには心を時の流れより放して，数時間，数日，或ひは数年留めさせる事々をより多くみつけるだろう。そして，再び，碾止められた時間を虚濠に一気に埋めるあの旅情を感じるだろう。そうするのが，頭脳の接点の不要な磨滅をすくなくするなら，その方に行こう，と思った。

西すれば，私は仮の庵を七百年この方，甘蔗の生えない甘蔗の国，Khuzesthan に結ぶ。負笈従師，不遠千里。そこには，私が勝手に決めた師，Lilienthal 氏がおられた。私はWanderjahre の後に再び Lehrjahre にはいる。如何に覬覦の譏りをうけようとも，私は試みる。地表の水循環体系の推移は人々の生活の歴史に色々な影響を与へてきたが，その辺境部分を占める熾烈な自然にも人はまるで植物のように根を生やして住んで来た。寒冷地は別として，酷暑を誇る土地においても少なくとも，形骸のみはそうであった。

現代の工学は自然の定めた厳森な区宇を梳めることはできても，自然に培養されてしまったこれ等人々の心を揺り動かすことはできない。Lilienthal 氏は私の理解するところによれば人々の心に失なわれてしまった自然に対する個の主体意識への回帰を工学を触媒として実現させようと努めてきた人である。二者の調和は各々の節度によって生まれ，節度は意志主体の保持者にのみ個有な属性である。自然と人間との関係においても例外ではないと，私は考える。

ところで，ノルブの話は纒めなければ。先ずは友よりの頼まれ事から片付けよう。私にとっても，主体意識ある個体の移動は常に興味ある対象だ。しかし，金で人の時間を買えない私にあるものは自分の時間だけである。だから私は東する。

私の置かれた情況は物事をはじめる決心をさせるのに頃合な実現不可能系数を示していた。ネパール政府は登山禁示例を発布したばかりだった。札幌では部員の遭難があり，人はその事後処理に追われていた。ネパール政府はは自国の市民に中々一般旅券を発給しないという。そして，ノルブには金がなかった。私は西するために用意していた千弗をノルブに投資することにした。デリー市場相場より稍良い値段で私は彼より漢方薬で有名な麝香を前金で買取る契約をした。彼は何割かの利益を見越して，現物を彼のつてを通し買ってくれば，それだけ旅費の可成りの部分を確保できる算用であった。（私は日本でこの最高品質の麝香を印度商人や華商の仲介する遠隔地貿易の摩訶不思議な流通機構と分析不可

能な商品といふ特質のために何ら利益を得ることなく売却してしまったが。)

一般旅券取得の問題は日本での身元引受人等必要な書類の署名を依頼し，後の交渉は山旅を終へてからすることにして，ノルブを商売の旅に送り出すと，私は雨期にはいった六月のカトマンズに飛んだ。私は一ケ月滞在し総勢九人の隊の輸入許可証と必要地域の国内旅行許可証を手に入れた。札幌からの隊員は船の切符が纏って買えず，分散して来るという。私はカルカッタに行き，荷物のインド国内無税通過に必要な措置を講じ，デリーに戻った。もともと，私が居候兼執事をしていた戸主にあたる二人の友人はとびきり上等な日本人なので，その家は私がちょくちょくよく連れてくる人間で梁山伯の様相を呈することがよくあったが，時の振幅に心を同調しはじめると，家の内外を問はず，傾蓋旧の如く語り合える人々にゆくりかなく出遇ふ機会が更に多くなる。そして，その中で他者の人生へ思ひを致し，二人が対座する密度の高くなった空間の芳馥さを感ずるのは至福であると私は思う。

カトマンズの木銭宿で，当面睡眠を妨げそうな数匹の南京虫をつぶしていると，隣のベットの男が「やってますな。」と声をかけてきた。「私は Jodhpur から来た石工の thekidar (請負師)。今，trisri の現場に行くところなんだ。」，「ああ，あの悪名高いのろのろ工事ですね。」，ネパールでは人夫が思うように集められない。然し，援助というものは効率の悪いエンジンで，皆途中で消えちまって，ダムに凝結する分は僅かなんだ。いや全く，そのひどさといったら我ながらあきれてしまう。」「ちゃ，貴方をダムに結びつけているのは石工としての仕事への愛着なんですか。」「なあに，わしは家族を喰わせなくちゃいかんのだ。」「私は昔て，Jodhpur を通ったことがあります。砂丘の上に聳(そび)く城郭もみました。貴方の先祖はきっとあの赤い砂岩を刻んだんでせう。私はその野方図なラージプト風の収まり具合が気に入っています。それに，「薔薇の海」と名付けられた池の在所すら知っているんですよ。」「ああ，glābsāgar を知ってるのか。それじゃ仕方がない。確かにあの池に映った城はわしのものだ。あの厖大な容積とそこに纏はる人間臭さをじかに受けとめるのは可成りカのいることだ。わしは水の上の映像をみる。それは矮小化され，角を落とされて，わしの小っちゃな心にはめこむには丁度よい。わしは城そのものを運ぶより，映像を運ぶ場合の方が多いかもしれない。みせかけのなごやかさにもたれかかってしまって。だが，わしを実際に惹きつけるのはそのものと映像との差にあるんだといふことも本当なんだ。そして，わしはあちこちの現場をうろうろしているわけだ。Trisri も精髄ではないのにそんな幻影を与える映像が運ばれるようになるのはわしの孫，子の代で実際の仕事はいつもその差の部分で行はれている。その動きは平常時のこととて，あるべき絵から程遠いものだ。それに較べ，人々が戦ひを宿命と感じていた時代にはたまさかに訪れる短かい

平和が恩恵であったに違いない。人々にはそれを慈む気持があった。然し，いってみれば，平和とは小さな争いの不連続的連続のことではないか。戦いが小さな平和の不連続的連続であるように。如何に平和が人間の不遜さと傲慢さとで充満していようと，おれ達はその中で生きている。仕事への愛着も，つまるところわしにとっては，己の声は石を叩くことでしか，表はせないんだし，その仕事を通してしか，物がみえないっていう誰にでもある枷のいいまわしにしか過ぎんさ。」

男は包みから，酒壜とコップ二個をおもむろに出した。私はもうその夜南京虫をつぶす必要はなくなった。（未完）

エクスペディション・ノート

遠　征　隊　報　告

——ライト・エクスペディション試論として——

益　田　　稔

はじめに

1964年もおしつまった雪の札幌で，いく度となく会合を重ねながら計画を練っていた時から，我々はライト・エクスペディションという言葉を始終使っていた。それは，充分な資金がなかったという事情も手伝って我々の関心を高めたこともあるが，ライト・エクスペディションという言葉は，また別の意味で我々を魅了せずにはおかないものがあった。これこそ，夙に憧憬してやまぬヒマラヤの大自然に触れるためのパスポートとして，もっともふさわしいものと思われたのである。資金難，ネパール政府の遠征隊入国禁止令など，逆境ともいえる状況の中で，我々はできるかぎりのライト・エクスペディションをもってその不利を克服することを企画した。そのうらには，将来ますます多くなると予想されるこの種の遠征に対して，有用な資料を積極的に集めておこうという目的があった。

我々が当初ねらったライト・エクスペディションは，実施の段階でどのような成功をおさめ，またどのような修正を受けねばならなかったかを明らかにし，今後の参考に供することが，この報告の目的である。

I　装　　備

エクスペディションがどのように装備され運営されるかは，当然目指す地域や隊の目的等によってかなりの差異を生じる。我々の隊の目的は，地質学と氷河学の調査を主体とし，一部生物学の調査も実施することにあった。北大における過去2隊の資料にもとずいて，ポカラ以西カリガンダキ河水系一帯を地質・生物調査の対象とし，この地域北端のチューレン・ヒマール南面を河水の調査地に選んだ。地質と生物の調査は，広域かつ密度の高い踏査路を歩くことを，氷河の調査はできるだけ長期の氷河定着を必要とした。調査地域の大半は，ミッドランドといわれる比較的人口密度の高い地域である。隊員は，研究者2名，大学院生4名，学生3名，ほか1名から構成され，年令は23～35才，平均26才，そして全員が登山経験をもっていた。

装備類の基本方針は，荷物の量をできるだけ少なくすること，ふだん使いなれたものを

持って行くという2点にあった。軽量化は，地質調査に機動性を持たせるとともに，ポーター費の軽減のために至上命令であった。このため，軽量化への努力は，性能のよい装備を特注する方向ではなく，ぜいたく品を除外して簡素化する方向へむけられた。この配慮は，余分の出費をおさえたばたりか，ヒマラヤへ出かけることを，肩肘はって考えず，国内のフィールドに出かけるのと同じぐらいの気軽さでとらえるためにも有効であった。

計画に際しては，1963年ナラ・カンカール隊の報告を参考にしたが，あまりにもきりつめた装備や食糧で，果して正常な調査活動が保障されるだろうか，という危惧が先にたち，つい余計なものを持って行こうとする傾向はいなめなかった。結局，装備と食糧を合せた全重量を10人で500 kgと見積った当初の予定が，船積時には梱包も含めて607 kg（3.57 m^3）になってしまった。

キャラバンに出発する段になって，我々は2つの重要な点に気がついた。ひとつは，苦労して日本から運んできた品物のうち，いく種類かは現地調達が可能であったことである（第1・2表）。もうひとつは，ポーター賃が予算計上額をはるかにうわまわっているばかりか，必要数を確保するのも困難であったことである。このような現地事情のため，パーティー毎に梱包されていた荷を開き，装備品をもう一度厳選し，ワイヤーバンドボック

第1表 キャラバン用個人装備表（1人当り）

品名	品質・規格	数量	品名	品質・規格	数量
上衣（調査用服を兼ねるものあり）		1	エア・マット*	半身用	1
カッターシャツ	純毛，フラノ，テトロン	1～2	水筒	冷水筒(1l)代用	1
セーター*	厚手	1	食器△	ボール	2
長ズボン	純毛，綿，化繊	2	スプーン，フォークセット		1
半ズボン	綿	1	はし		1
アンダーシャツ	綿，長袖，半袖	2	お菜入れ	ベントウ箱	1
ズボン下	純毛，綿，化繊	1	ヘッド・ランプ	単1電池3ケ	1
パンツ	綿	2～3	洗面具セット		1
軍手	綿，ナイロン	2	タオル，石鹸，歯ブラシ		
靴下	ナイロンパイル又は純毛	2	歯みがきクリーム，シャンプー		
雨衣（ポンチョ・レインコート）*		1	ヒゲソリセット，つめ切り		
傘*△	折たたみ式	1	小物入れ*		1
キャラバンシューズ又は登山靴*		1	裁縫用具*		1
サブ・ザック	ビニロン，他	1	日焼け止めクリーム		1
寝袋*	化繊，綿	1	リップクリーム		1
寝袋カバー*	ビニロン地	1	チリ紙	1人1,000枚	1

*は，手持ちの装備を持参　△は，現地調達容易

第2表　キャラバン用露営・炊事用具（1パーティ分）

品名	品質・規格	数量	品名	品質・規格	数量
夏用テント	ビニロン5人用	1	ポリタンク	5 l	1
テント・シート	ビニロン	1	包丁		1
ポール	ジュラルミン	1組	おたま杓子		1
テント修理具	布地，糸，針，のり	1組	飯しゃもじ		1
ローソク△	1日⅓本	20	ボール△	大型ホーロー	1
細引△	10 m	1	たわし		1
石油ストーブ，プロパンガス	スペア，大型	1	あげざる	ポリエチレン	1
メタ	大缶	2	缶切り		1
マッチ△	並型	60	ライポンF		2
鋸	薪用	1	クレンザー		2
コッフェル	5～6人用	1			
キャンバス・バッグ	60×120×25	1	工具セット	ペンチ，ドライバー	1組
錠前△	ナンバー錠	3	エア・マット修理具		1
針金	10 m	1	散髪用具	くし，はさみ	1組
スリオン・テープ		2	B. H. C	粉剤又はエアゾール	1
ビニール・テープ		2	ラジオ	2-Band	1
ポリエチレン袋	各種		そろばん	携帯用	1
接着剤	ボンド，スーパーセメダイン	1	予備電池△	単1，単2，単3	1組
アマニ油	缶入	1			

△カトマンズで購入容易

ス2箱分をキャラバンの基点に残した。この措置は，結果的にみて当を得たもので，以後の行動に何ら支障をきたさなかった。とはいえ，事前調査の不充分という全く初歩的な誤りを犯した事は，何よりも反省させられた。

1）キャラバン用個人装備

すでに所持している個人装備は，できるだけ活用するようにした（第1表）。このため，自ずとバラエティに富み，かえって好ましい状態であった。

衣服は，低地旅行においては，むしろ日中の暑さに対して備える必要がある。化繊の開衿シャツ，木綿の半ズボンというスタイルが最適であった。注意しなくてならないのは，昼夜の温度変化の激しいことで，これに対してはセーター，上衣，長ズボン等を補助的に使用するのがよい。純毛の下着等冬用の衣服は，3,000 m 以上の高度で使用したのみである。低地では12月になっても半ズボンで通した。靴下は，ぬれる機会が多いので，とくに高所へ行かぬ限りナイロン・パイル製で充分である。期間中降雨はあまりなく，10月下旬以降雨具は全く必要なかった。

靴は，全員キャラバン・シューズと登山靴を持参したが，登山靴は低地用としては重さ

に難がある。キャラバン・シューズは耐久力に難があり，なかには使用後1週間で底がはがれ始め，1ヵ月で使用不能になったものがある。2ヵ月以上も歩き続ける場合の靴は，今後も研究の余地がある。はき慣れているならば地下足袋でもよいし，現地でインド製のズック靴を購入するのも一手である。

シュラフ・ザックは，ことさら寒地用は不要で，夏用とビニロン製カバーの併用で快適であった。カバーは，民家泊りの場合などシュラフ・ザックとの間にD.D.Tを散布して南京虫の侵入を防いだり，単独でインド旅行に使用して便利である。エア・マットは，民家の土間で寝る場合が多いので重宝するが，重いので一考の余地がある。ベント一箱やクリーム類は，今回はほとんど使用しなかった。食器はアルミ製の深皿が買える。チリ紙の入手は困難であるが，和紙に似たネパール紙で用は足りる。

2) キャラバン用共同装備

我々の調査地域の大半は，前述のように，ネパールでも人口密度の高い，土地利用の進んだ地帯である。そこで我々は，現地人の生活様式や食習慣を積極的にとり入れ，基本的に民家泊り，現地食主義とした。したがって，露営・炊事用具は，これらを補う意味のものとして携行した。

テントは，ビニロン製夏用で，民家のない高山地帯や不時露営に必要であったが，我々の場合テントを使用したのは，延宿泊日数の10％にすぎない。炊事用具は，火器として石油ストーブとブタン・ストーブを用意したが，ブタン・ストーブは簡便ではあるがカートリッジの補給に難がある。石油は主要バザールで入手可能，マッチは各所で入手できるが，薪の入手が意外と困難なので注意を要する。キャンバス・バッグは使途が多く有効であったし，針金，スリオンテープ，接着剤，ペンチ等の修理具はよく使われた。一般に，軽装備隊では修理具を軽視してはならない。

3) 調査用具

調査用具は，調査の内容，対象とする地域，調査方法等によって制約をうける。今回行なったのは，地質，氷河，生物の調査であったが，調査器具や資材は，すべて担当者が所持するものおよび関係研究機関の借用物で間に合わせた。

地質調査では，ハンマー，クリノメーター，野帳，サンプル袋といったきわめて簡単なものに限った。生物調査用具は，採集物を入れるポリビンやホルマリン，キャタツ，その他でかなりの量になったが，対象地域を地質と同様にしたため，現地食主義の小人数パーティシステムで十分であった。一方，氷河調査には，装備と食糧を大量に運びあげる必要があった。調査器具も前二者に比して，重量や体積のかさむものが多い。今回氷河調査が不完全のまま終らなければならなかったのは，これらの輸送に予想外の時間をとられたのが一因である。

一般に，多くの物量を必要とする調査活動ほど，その地域の環境要因に制約をうける度合が大きい。調査の成否は，調査用具の精度や量にあるのでなく，対象物の性質や現地事情を正確に把握した上で可能な調査方法を判断することにあり，それに適した調査器具が選ばれなければならない。

4) 梱　　包

ナラ・カンカール隊の経験をとり入れ，ワイヤーバンド・ボックス（内容積：45×70×28 cm）で統一した。使用頻度が高いと予想される箱は蝶番で補強し，全部にかけがねを取りつけ，施錠できるよう改造した。全期間を通じて，破損による事故はなく，梱包資材としては非常にすぐれているが，5 kg という重量に難がないわけではない。

Ⅱ 食　　糧

食糧の問題は，エクスペディションにとって大きな比重を占める。南極や砂漠のようなアン・エクメネは別として，目的地に人間が居住し，食物が生産されているなら，必ずしも全食糧を持参する必要はない。現地食をとり入れることによって得られる利点は，輸送費，とくにポーター賃の節約と，エクスペディションの機動力の増大である。日本から持参した食糧は，キャラバン中ずっと持ち歩かねばならないのに対し，現地食はその都度調達できるからである。

我々の目指した中央ネパールは，完全な生活圏であったので，食糧計画の方針として，氷河隊の氷河滞在期間分を除いては，すべて現地食を採用することにした。栄養，カロリー，重量，嗜好，購入の難易などの問題があったにも拘らず，あえて現地食主義をとったのは，ナラ・カンカール隊の経験と隊員の年令からその順応力に期待したのである。しかし，非常用として1人あたり約1日分および嗜好品と調味料は若干持参した（第3表）。以

第3表　日本より持参した食糧の例（C隊）

品名	数量	品名	数量
マカロニ	900 g	バター飴	150 g
ラーメン	750 g	味付海苔	120 g
ビスケット	2 箱	ツクダニ数種	1 kg
クラッカー	15 箱	ふりかけ	300 g
スープの素	1 kg	味の素	150 g
インスタント・コーヒー	大ビン 2	こしょう	2 ビン
緑茶	200 g	辛子	5 カン
紅茶	200 g	わさび	5 カン
インスタント・ミルク（クリープ）	大ビン 1	粉末みそ	100 g
インスタント・ジュースの素	400 g	粉末しょうゆ	100 g
ドロップ	100 g	総重量	7.2 kg

下に，氷河用食糧を除いて，低地調査旅行中の我々の食生活の実態をのべたい。

1) 持参した食糧

主食として用意したマカロニ，ラーメン，ビスケット等は，食糧の入手困難な場所において使用した。その事態をすべて補うためには，これだけの量では勿論不充分であったが，現地の生活にすばやく慣れることによって解決した。調味料類は，味の単調な現地食にバラエティーをつける意味で価値が大きい。味の素，スープの素，粉末味噌・醤油，わさび等は大いに利用すべきである。ふりかけ，佃煮，海苔等は調味料と同様の意味で効果があった。飲料のうち，紅茶はわざわざ持参するにはおよばない。葉は各地のバザールで購入できるうえ，主要街道筋では茶屋が並んでいて，ミルク入り紅茶を提供する。コーヒーや緑茶は，紅茶に次いでよく飲んだ。行動中には，インスタント・ジュースや飴類が好評であった。一般に，飴などのおやつはカトマンズ以外では入手不可能である。しかし，これらは，絶対必要なものではなく，隊の性格に左右される性質のものである。また，この種の食糧が多すぎると，現地食馴化を心理的に遅らせることもある。我々の場合，短期間で現地食に慣れ，後半には〝うまい〟と感じるまでになった。

2) 現 地 食

現地食の一例として，一週間の食事の内容と費用を第4表にしめした。この行程は，いわゆる街道筋ではなく，茶屋や宿泊設備がないため，民家泊りであった。調理は，材料を仕入れてシェルパが調理した場合と，現地人の手になる場合とがある。前者の場合，シェルパ族は本来日本的味覚をもっているから，彼等を訓練すれば，我々の好みの味覚を得ることができる。

現地食の特徴として，次の5つをあげることができる。

イ) 一般に粗食である（主食は米，雑穀，代用食）

ロ) 肉類や野菜類を食べる機会が少ない。

ハ) 品物によって偏在している。

ニ) 時に売ることを拒否される。

ホ) 季節や場所によって値段の変化がはげしい。

イ)，ロ)はネパールの一般事情としてやむをえない点であるが，ロ)に関しては，タンパク，ビタミンの欠乏を考える必要がある。主食のうちでもっとも普遍的なものは，ヒエとトウモロコシである。米は南部の米作地帯かカトマンズあるいは主要なバザールでもなければほとんど入手できない。北部の山岳地帯では，米は遠くの産地から買入れてきた貴重品であるから他人に売りたがらない。反面，小麦粉とジャガイモは安価に買える。肉類は，ヒンドウ教の影響で牛肉を食べないから，鶏，山羊，豚などに限られ，しかも動物を殺さないのが多い上，祭など特別な時にしか食べないようである。鶏は，どこでも入手可

第4表　キャラバン中1週間の会計と食事の献立例

C隊会計帳より（4人分）※1Rs≒50円

月　日	地　　名	献　　立	価格(Rs)
10. 18	Bhigri ↓ Khungrikot	朝（径10cm位のロティ3枚，ユデ卵2ケ） 夜（米・タルカリ・バナナ） ダイ 卵　10ケ 渡し舟 ポーター　10R×2	6 6 3 2 3 20
			44
10. 19	Khungrikot ↓ Lamachaur	朝食＋べんとう（チャパティ，卵2ケ） 夜（バナナ，カンクラ，米，タルカリ） ニワトリ ポーター（半日）　5R×3	8 8 6 15
			32
10. 20	Lamachaur ↓ Kharsinge	朝食 夜（とうもろこし，ロテイ，茶） はちみつ　2*l* ポーター　10R×3	7 8 6 30
			51
10. 21	Kharsinge ↓ Libang	朝（とうもろこし，ロテイにはちみつ，バナナ，カンクラ） 夜（とうもろこし焼，タルカリ，米，茶） ポーター　10R×3	8 10 30
			48
10. 22	Libang ↓ Dhangsi	朝（タルカリ） 夜（とうもろこしのロテイ，とうもろこしのスープ，はちみつ） ポーター　10R×3	10 6 30
			46
10. 23	Dhangsi ↓ Takol	朝（小麦粉のロテイにはちみつ） 夜（米，肉（水牛）のタルカリ） ポーター　10R×3	6 7 30
			43
10. 24	Takol ↓ Dharamshara	朝（南瓜，とうもろこし，大根のごった煮） 夜（米，肉（水牛）のタルカリ，凝乳，とうもろこし，ダイ） 薪 ポーター　10R×3	3 21 1 30
			55

能であるが，一般に価格が高く，食事代にして3〜4食分に相当する。野菜は，季節的変動があるうえ，生産農家が少ないから，産地を離れると入手が不可能である。実際，青野菜は全隊員の渇望の的であった。我々が旅行中手に入れた野菜は，カンクラ（大型のきゅう

第5表 現地で購入できる食糧

主　食

類別	品名	入手の難易	価格 (Rs) 産地	移入地域	都市	備考
米	米	○	0.8〜1.0	1.0〜1.5	0.8〜1.5	(注) 1セル＝4パウ≒800 g 1マナ≒3合 1Rs（ルピー）≒50円 但し，1967年末より 1Rs≒36円 1マナあたり
	乾飯	○	1.0	?	1.0	
小麦	小麦粉	○	0.5	?	0.5〜0.7	
	ツアンパ	□	0.5	—	—	
とうもろこし	とうもろこし粒	○	0.5	0.5〜0.7	?	
	とうもろこし粉	○	0.5	0.5〜0.7	0.5〜1.0	
ヒエ	ヒエ粒	○	?	?	?	
	ヒエ粉	○	0.5〜0.7	?	?	
じゃがいも	じゃがいも	○	0.25	?	0.6	1セルあたり
肉	水牛	○	0.5	—	0.5	1パウあたり
	山羊	○	0.6	—	0.75	
	鶏	◎	6〜15	—	?	中程度の1羽あたり
	羊	□	50〜60	—	—	1頭あたり
	豚	□	40〜50	—	?	

副食・調味料・嗜好品

類別	品名	入手の難易	類別	品名	入手の難易	類別	品名	入手の難易
卵	鶏卵	◎		玉ねぎ	×	塩	精製塩	△
	アヒル卵	×		にら	×		岩塩	△
乳製品	凝乳	◎		ほうれん草	×	香辛料	とうがらし	◎
	モイ	◎		キャベツ	×		カリー	△
	チーズ	□		カリフラワー	×		さんしょう	△
野菜類	大根	○		ピーマン	×		しょうが	△
	かぶ	○		人参	×		にんにく	△
	長ねぎ	○		なす	×	茶	紅茶	△
	青菜	○	果実	みかん	○		チベット茶	△
	えんどう豆	○		バナナ	○	タバコ	タバコ	△
	さや豆	○	油	なたね油	○	駄菓子	ビスケット	△
	南瓜	○		バター	○		かりん糖	△
	きゅうり	○	砂糖	白砂糖	△		飴	△
	トマト	○		黒砂糖	△	酒	ロキシー	◎
	さつま芋	×		氷砂糖	△		チャン	○

凡例　◎ どこでも入手可　○ 産地及びバザールで入手可　□ 産地でのみ入手可
△ バザールでのみ入手可　× カトマンズでのみ入手可

り)，南瓜，トマト，大根，さや豆，青菜等にすぎない。きゅうりやバナナはしばしば昼食の代用となった。一方，カトマンズでは事情が一変し，種々の野菜が購入できる（第5表)。

ハ）の問題は，ネパールの流通機構の未発達に由来する。したがって，経済圏は，地理的自然条件によって左右され，河川や山脈によりいくつかに分けられている。それに，緯度や高度の差による作物の違い，住んでいる人間の違い（カースト，部族）による食物の質や好みの変化が，経済圏とオーバーラップしている。米，麦，茶，砂糖，塩，油などの商品価値のあるものは延々と運ばれてくるが，野菜，肉，卵など保存のきかないものはほとんど流通しない。

ハ)，ニ）の理由のため，我々はしばしば食物にありつけない事態におちいった。そこで，空腹をかかえて得た教訓は，「食べられる時にできるだけ食っておこう」というものであった。また，現地人の習慣に合わせて，概ね1日2食主義を実行した。昼食に準ずるものとしては，きゅうり，バナナ，みかん，とうもろこし等をあて，調査に機動性をもたせたが，これは当を得た処置であった。なお，主要街道にはバッティとよばれる茶屋兼はたごやのようなものが点在し，食事をとれば宿泊料は無料になっている。

3） 現地食主義の検討

持参した食糧のうち，今回の経験からみれば，やはり無駄なものがあった。量的に僅かでも，荷物全体に占める割合からすると無視できない。持参食糧と現地食の使用比率は，隊の性格や調査目的，場所などに左右されるが，現地事情と工夫しだいでは，氷河用食糧でさえかなりの部分を現地調達に切りかえることができよう。我々の持参食糧はほぼ前半で払底し，その後はいっさいを現地食に頼ったが，さしたる支障がなかったことからみると，今回のような地域を歩くには，あえて持参食糧は不要だと確言できる。もっとも，そのためにはあるていどの覚悟が必要であることはいうまでもない。

前述のように，現地食は粗食であり，場所によっては食いはぐれるという事態も生じる。我々の食い溜め方式は，このような実情から自然と体得した鉄則であった。粗食であっても，栄養およびカロリー上失格とは即断できぬし，味覚は人間の適応力に期待できる。数ヵ月の滞在であるから，普通の体力の所有者なら支障はない。ただ，ビタミン類は薬によるとしても，タンパク質欠乏問題は，医学的に検討を加えておく必要があろう。

1人1日あたりの食事代は，予算に計上した4 Rsを上まわったが，これは中央ネパールの物価高という事情のほか，バッテイをかなり利用したためである。それは，バッテイをよく利用したA・B隊と利用できなかったC隊とを比較すれば明瞭である（第6表)。現地食方式には，一定の時間に食事をとれないことや食糧を購入するための努力と時間的ロスが要求されるなど，若干の問題点がある。これは，大人数パーティの場合には致命的になることもあろうが，今回のように小人数の，細かい予定にしばられないパーティの場合

第6表 各隊の人夫賃と食費

Tansing ⟶ Dhorpatan

	人数	日数	人夫賃 (Rs)	食費 (Rs)	※人・日あたりの食費 (Rs)
	人	日			
A 隊	4	19	1,194	547	6.9
B 隊	4	24	557	747	7.8
C 隊	4	37	605	721	4.8

Dhorpatan ⟶ Pokhara

	人数	日数	人夫賃 (Rs)	食費 (Rs)	人・日あたりの食費 (Rs)
	人	日			
A 隊	5	23	391	736	6.7
B 隊	2	24	175	375	7.8
C 隊	4	21	220	519	6.1

※ 人数にはシエルパを含む。

には，調査そのものに決定的な支障を及ぼすことはない。

Ⅲ 費　　用

エクスペディションでもっとも重要な問題のひとつに費用がある。いったいどの位の資金があればエクスペディションは可能であろうか。外貨の自由化は，その資金が調達できさえすれば誰でもエクスペディションを組織できるような状況をつくりだした。しかし，500ドルの観光外貨を利用しようとすれば，ライト・エクスペディションが選択の予地のない唯一の道なのである。

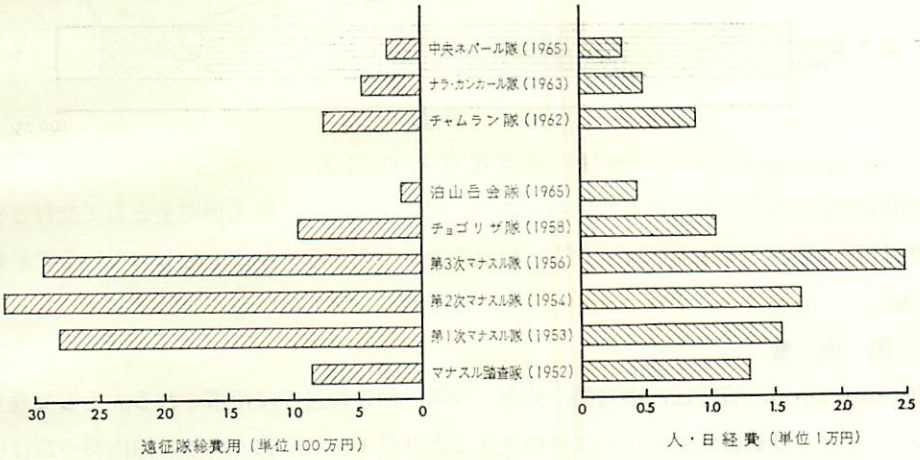
ここでは，我々の隊の費用（第7表）と過去に行なわれたエクスペディションのそれとを比較対照しながら検討を試みるとともに，費用に関する諸問題をとりあげることにする。

第7表 決　算　書

収入	(単位 円)	支出	(単位 円)
隊員負担金	1,082,150	渡航費	1,202,053
道費補助金	300,000	交通費	234,030
法人等寄付金	1,098,000	都市滞在費	364,311
雑収入	381,910	人件費	421,440
		現地食費	252,030
		通関費その他の外貨	135,136
		装備費	10,200
		医療費	5,700
		梱包費及び輸送費	19,015
		事務費その他	218,145
合計	2,862,060	合計	2,862,060

1) 総費用と人・日経費

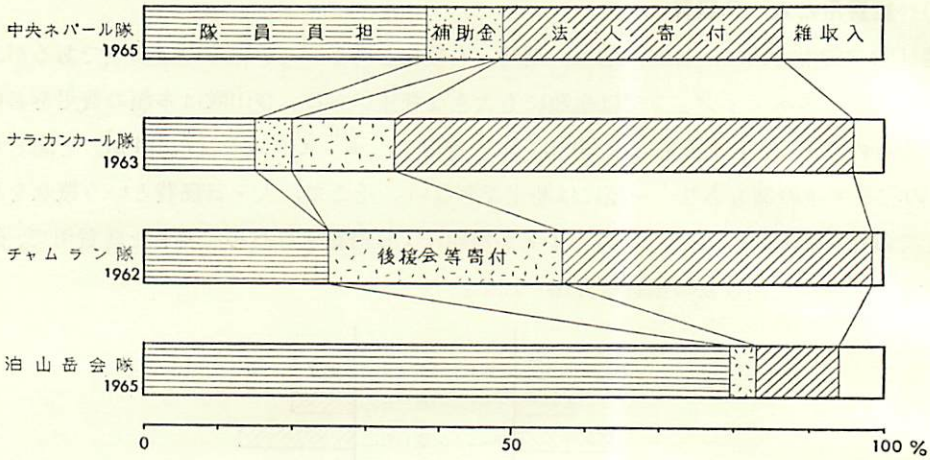
遠征隊の費用総額は，目的，地域，期間，人数などによってかわるのは当然であるが，ライト・エクスペディションでは総額にも大きな意味がある。登山隊は多額の費用を必要とするものであるが，1人あたり20ポンドの費用で，チョモラーリ（7,314 m）を陥した2人のパーティの例もあり，一概には断定できない。そこで，人・日経費という概念を導入してみた（第1図）。これは，隊員1名が現地に1日滞在するために要した総費用で，隊の総額を現地滞在延日数で割れば算出される。



第1図　費用総額と人・日経費

我々の人・日経費は，3,500円と表中で最低額をしめし，チャムラン隊の40％，ナラ・カンカール隊の70％にすぎない。これら2隊は，いずれも登山隊であり，今回の調査隊とは同列に論じられないが，チャムラン隊を先駆として，後者は常に前者の経験に学んできた。往復90日という長いキャラバンを体験したナラ・カンカール隊は，人・日経費5,000円という節約ぶりをしめしているが，これが今回の計画に与えた影響は大きい。

では，エクスペディションの費用は，どのようにして調達されるだろうか。バガボンドならいざしらず，エクスペディションである限り，目的を達成しうる最低限度の資金が保障されねばならない。勿論，自己資金で行くにこしたことはないが，程度の差こそあれ一般には個人の調達能力を越えている。そのため，ほとんどの隊は，他から補助を仰いで資金を捻出しなければならない。その内訳や比率は，隊の性格とくに派遣団体によって異る（第2図）。ただ，隊員負担の比率が，総額規模の小さい隊ほど大きくなるのは当然である。我々の隊では，1人あたり平均約11万円で，総額の約36％を占めている。チャムラン隊は，1人あたり平均27万円であるが総額の25％にすぎず，ナラ・カンカール隊では1人あたり負担額は我々の場合と大差ないにも拘らず，15％といちじるしく低くなっている。一方これと反対に，泊山岳会隊では負担率は約78％に達しており，ややプライベート



第2図　遠征隊収入の内訳

な登山偵察隊の特徴をあらわしている。また，我々の隊では，研究補助金として交付された30万円と現地での装備売却等で得た雑収入とが，大きなウエイトをしめているのが特徴である。

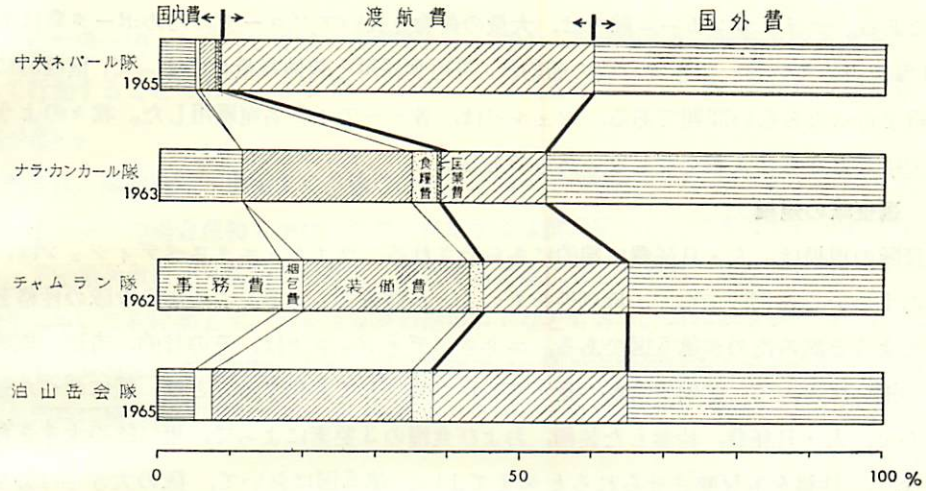
2）国内費

国内準備にかかる費用は，事務局，装備，食糧，梱包輸送等に使用される。そして残りの部分が往復の渡航費および現地に持参される国外費である。我々の隊の国内費の割合は10％以下といちじるしく低い。これは，前述の装備や食糧の基本方針が，国内費の面でも好結果をもたらしたものといえよう。他の3隊で国内費が40％前後と大きい値をしめす原因は，主として装備のための出費にあり，今回のような調査隊との性格の相違があらわれている。さらに，我々は，予定の船に乗船できない事態発生のため，代りの船さがしに多大の時間と労力を費したにも拘らず，事務局費を5％ていどにおさえることができた。これは，ほとんどの隊員が事務局に比較的近い地域に居住していたため，有機的に動くことができたからであろう。梱包は，ワイヤーバンドボックスを購入した以外，全て自前で行なった。

3）渡航費

渡航費に差を生じるのは，どのような交通手段を利用したかによる。我々の隊の渡航費は，全体の50％にも達している（第3図）。出発時の不測の事態や帰路の船賃が値上げになったりして，予算を大幅に上まわったせいもあるが，ライト・エクスペディションでは，渡航費がいかに大きな比重を占めるものであるかがわかる。チャムラン隊は，往復とも飛行機を使用しているにも拘らず，20％ていどであるのは，この隊の規模を反映していると見てよいであろう。

渡航費の絶対額をひきさげるとすれば，運賃の高い飛行機を敬遠して安い船とさがすよ



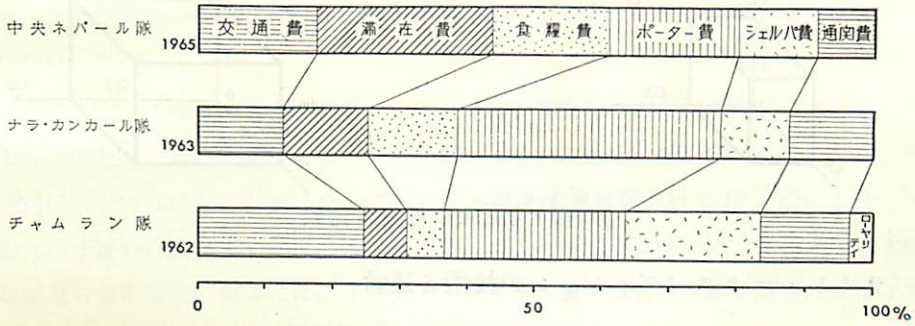
第3図 遠征隊経費の内訳

り手はないが，注意せねばならないのは，渡航費と渡航手段は時間的余裕によって左右されることである。エクスペディション自体に高い効率が要求される時に，いくら安いといっても船旅に貴重な時間をとられたのでは，金におとらぬ高い代償を払うことになる。

4) 国外費

国内費と渡航費を除いた額が，手持ち外貨として携行され，旅行中および現地でさまざまな目的に使われる（第4図）。都市滞在費を節約するには，滞在日数を短縮する方法が有効かつ手っとり早い。今回，カルカッタやカトマンズなどで滞在が長期にわたったところでは，カレッジの寮に止宿したり，間借り自炊によって，経費の節約に努めた。それでも，交通・滞在費が43％と高率になっているのは，出発時の齟齬のため往路の都市滞在が増加したことにもよるが，ポータ費などの節約によって，相対的に滞在費の割合が高くなったともみられる。

現地食糧費が，18％と比較した各隊の中で最高値をとっているのは，我々の場合当然といえる。ポーター費は，食糧費とともに現地キャラバン中ほとんど唯一の輸送力として不



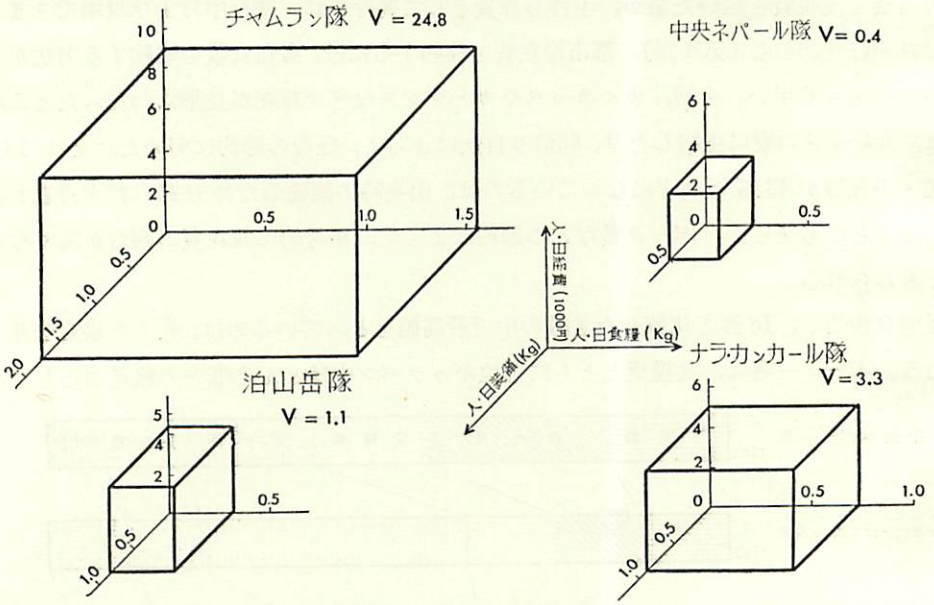
第4図 国外費の内訳

可欠である。ナラ・カンカール隊では，大量の荷物と長いアプローチのためポータ費は実に40％を占めている。ポーター費の節約は，現地食採用と装備軽量化によって，積極的に取り組まねばならない問題である。シェルパは，各パーティ1名宛雇用した。我々のような隊ではことさら多人数を要しないからである。

5） 遠征隊の規模

遠征隊の規模は，人・日経費に端的にあらわされる。ライト・エクスペディションは，規模の小さいことだけでなく，機動性をもつことが信条でもある。このような隊の性格を図示しようと試みたのが第5図である。エクスペディションでは，その目的，方法，地域などの違いによって，装備や食糧の量がある程度独立して変化することは，既にのべた通りなので，人・日経費，持参した装備，および食糧の3要素によって，単に隊の大きさだけでなく，性格をも反映させられると考えてよい。第5図において，隊の大きさは体積に，性格は矩形の形態にあらわされている。つまり，体積が小さく，かつ縦長の形のものほど，貧乏で身軽な遠征隊であるといえる。

複雑な諸要素をもつエクスペディションの性格をこれだけで比較することには問題があるが，上にあげた3要素から見る限りにおいて，我々が当初意図したライト・エクスペディションは，ある程度達成されたと考えて大過ないであろう。



第5図 遠征隊の規模の比較

Ⅳ ライト・エクスペディションの技術と運営

エクスペディションは，単なる旅行と異なり，目的遂行のための行為であるから，時に

はかなり思い切った行動や妥協も必要である。要は，その時どきの情勢を敏速適確に判断して行動することである。この点について，今回の遠征でとくに気のついたことを簡単に述べたい。

輸送は，国内輸送，現地までの輸送，および現地での輸送にわかれるが，問題は後2者にある。我々の場合荷物も少ないので，現地までは携行旅具として運搬する予定であったが，予定船欠航により隊員が分散して旅行する事態になったため，別送にしなければならなかった。これに加えて，カルカッタの港湾ストなどもあり，荷物が現地に到着するまでに貴重な時間をかなり無駄にした。軽装備隊では，隊員と荷物はあくまで行動をともにすると同時に積みかえを少なくしなければならない。この事はインド国内についてとくに強調される。

ポーターの賃金と供給力は，地域や季節によって変動する。我々は，ナラ・カンカール隊の経験による西ネパールの状況を基準にしたため，ポーター費を過少に見積ってしまった。また，ネパール最大の祭に遭遇して，ポーターを集めるのに苦労した。これらは，事前情報集収によって防止できることである。ポーターは，40 kg 位を平気でかつぐものがいるが，かえって効率が落ち，機動力が生命のライト・エクスペディションには適さない。ポーターの数は，荷物量とスピードとポーター費の適正な調和によって決定される必要がある。

このほか，カトマンズ周辺部では自動車道があり，またカトマンズ——ポカラ——タンシン——バイラワ間において現在建設中の道路の一部を使用できるが，ネパールで自動車を使うのは将来の問題である。

シェルパは，言葉の問題もあって，その役割は重要である。キャラバン中は，シェルパを通じて常に前方の地域に関する正確な情報を得る必要があり，とくに現地食方式の場合これが重要である。

また，エクスペディションにおいては，不測の事態の発生は，まずさけられないことである。我々の隊も，準備段階から帰国まで，さまざまな番狂わせにほんろうされなければならなかった。

第1に，すでに述べたように予定していた客船が事故のため乗船できなくなったことである。このため，新たな船捜しの労力と予算をはるかに越えた渡船費を要したうえ，荷物を別送にしなければならなかった。これによる損失は渡航費だけで12万円にも達した。そして，予定の行動が1ヵ月以上も遅延したため，氷河調査はきわめて不完全なまま断念せねばならなかった。第2には，インド・パキスタン戦争がある。戦争開始の情報は日本出発後に入った。幸い，直接的に大きな支障は受けずにすんだが，ネパール周辺の国際政情が不安定であるという現状を考えると，この方面にも注意を怠ってはならない。このほ

か，帰路に予定していた船賃が値上げされたり，帰国後であったがインドルピーが切り下げられたという事件もあった。

このような不測の事態は，費用に悪影響を与えるばかりか，悪くすると目的の達成も困難になる。これに対しては，常に余力をもって行動し，隊員の力がすぐさま新らしい事態に対して集中的に発揮できる体勢を保持しておく必要がある。ライト・エクスペディションは，その点において有利なシステムであるといえよう。

だが反面，ライト・エクスペディションは，大規模遠征隊のもつような余祐がないため，小さな事故や情勢の変化が全体の計画に大きく作用するという弱点をもっている。したがって，計画立案に当っては，何よりもまず正確な情報を集め，費用の最低限度を厳密に計算しなければならない。正確な費用の裏ずけは，その後の行動を判断する基準となるからである。この意味で，事前の計画の良否が，ライト・エクスペディションの使命を制するといっても過言ではない。

おわりに

以上，我々は装備，食糧，費用および運営技術の各方面から，我々の隊の報告を行なうとともに，ライト・エクスペディションについての考察をして来た。これを綜合していえることは，かなりの無理と無駄があったとはいえ，軽装備・現地食主義という我々の当初の基本方針が，かなり成功しているといえる。

ライト・エクスペディションの利点は，目的とする調査をスピーデイにやれること，通関，輸送，その他に要する費用をいちじるしく軽減できること，各種の状況変化に臨機応変に対しうることなどであり，さらに現地人との隔絶をなくす効果をももっている。これらが，エクスペディションを身近かに感じさせ，その機会を増大させることは，とくに有益である。

一方，ライトエクスペディションであるが故に破綻も生じやすいという欠点に対しては，たゆまぬ情報集収の努力と計画性とによっておぎなう必要がある。そこには，隊員各人の柔軟性とともに全員の有機的なつながりが要求される。

これらの点を充分考慮し，計画実行するならば，我々のような調査隊には，ライト・エクスペディションがもっともふさわしい形態だといえる。それはまた，若い探検志願者に，ひとつの光明ともなるであろう。

記録写真について

米　田　　功

遠征隊における写真は，観光旅行の個人的な想い出写真などと異り，現地の記録資料として，整理，分類，保管される性質のものであるから，目的地にどのような被写体が期待されるか，どのようなものがその遠征隊の記録写真として要求されるかによって，準備をする必要がある。過去の各種遠征隊において，この点の具体的な成果や反省が報告された例は少ない。

以下，私達の経験をもとに，遠征隊の写真に関する2，3の考察を試みたい。

カメラ，レンズ，撮影用具

隊員の写真経験や知識は，初歩的常識の域を出ないものであったが，用意されたスチー

第1表　携行カメラおよび写真用具

カメラ，撮影用具

スチール・カメラ，レンズ

ミノルタ・SR-1	(ロッコール　35 mm，55 mm，135 mm)
ミノルタ・SR-1	(ロッコール　55 mm)
アサヒ・ペンタックスSV	(タクマー　55 mm，105 mm)
アサヒ・ペンタックスSV	(タクマー　55 mm)
アサヒ・フレックス	(タクマー　50 mm)
ニコンF	(ニッコール　50 mm，135 mm)
コニ・ラピッドS	(ヘキサノン　50 mm)
オリンパス・35 S	(ズイコー　45 mm)

8 mm ムービー・カメラ

キャノン・モーター・ズーム8 EEE

セコニック8

撮影用具

露光計，三却，ストロボ発光器，リアー・コンバーター・レンズ，接写リング，フィルター，パノラマ・ヘッド，レリーズ

雑　　品

ダーク・バッグ，レンズ・ブラシ，鋏，ビニール・テープ，シリカゲル

(重量　17.4 kg)

現像器具，薬品

引伸機（ミノルタ・ミニ・プロジェクター改造），セーフ・ライト，現像タンク，バット，液温計，竹ピンセット，クリップ，スポンジ，ポリタンク，現像薬（フィルム用，印画紙用），定着薬，ドライウェル，印画紙，イーゼル・マスク，ネガ・ケース

(重量　3.9 kg)

ル・カメラ8台中6台までが，1眼レフレックス方式のものであった（第1表）。カメラは，主に何を撮影するかによって選ばれるべきで，レンズ交換，又は，2m以内の近接撮影など特殊目的がないのならば，1眼レフ・カメラは無用である。むしろ，キャノネットのようなカメラ（二重像合致式距離計付き，露光計連動）が，露光やピント合せに失敗が少なく気軽に写せること，小型，軽量であることに大きな利点がある。ただし，ハーフサイズ・カメラは決して選ぶべきではない。フィルムの倹約やポケット・サイズという長所があっても，多くの場合，キャビネ・サイズ以上への拡大はできないからである。

山岳写真や開けた風景，室内の撮影には，望遠レンズや広角レンズが有効である。焦点距離200mmと28mm位のレンズを用意できれば充分であろう。しかし，望遠レンズの手持ち撮影は135mm位のものが限度であり，広角レンズも35mmのものであれば準備も容易である点から，交換レンズにはこの2種を勧めたい。短焦点レンズは抱括角度が大きく，遠近感が強調され，被写界深度が深いなど，その使用による効用が大きい。リアー・コンバーター・レンズの精度には疑問を残す点もあるが，便法として用いる限りでは重宝である。今回の使用例では，欠点は見いだされなかった。

照明用発光器は，携帯の不便や装着の煩わしさのため，使用回数は10度に満たなかった。レンズ・フッドは，一般に忘れ去られている用具であり，私達も，気が付かないままに用意をしなかったが，日中，強い光線のもとで撮影さたたフィルムのほとんどは，周辺にカブリを生じてしまった。レンズの口径が大きくなったこの頃の明るいレンズでは，レンズの視角以外のところからも，余計な光線が射入してカブリを起すことがあるから，強い直射光や反射光のもとでは，フッドを装着しなければならない。

今回，特に目立ったことは，カメラ及びレンズの故障が多かったことである。

ロッコール・レンズ55mm	マウント坐金のガタ
ロッコール・レンズ135mm	ヘリコイド不良によるピント合せ不能
オリンパス-35S・カメラ	シヤッター羽根開閉不良
セコニック8（8mmムービー）	シヤッター，フィルム送りの同期不良

これらはみな故障発見が遅れ，又，現地での応急修理もできず，多くの悔を残した。携帯運搬中の過激な振動は，ある程度避けられないことでもあるから，出発前はもちろん現地でも，随時，整備や点検を怠らぬよう努めたいものである。

現像器具，薬品

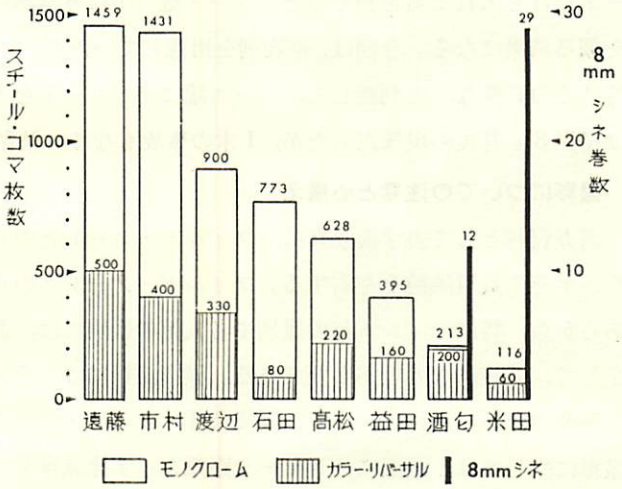
結果的には使用せずにおわったが，写真測量のため，現地での即時プリントの目的で，暗室用具一式を装備した（第1表）。引伸機は，スライド・プロジェクターを改造して単一乾電池を電源に使用し，セーフ・ライトにも工夫を凝らして，テストでは良い結果を得ていた。

フィルムの必要量

第2表　使用フィルム量

	準備数	使用数
モノクローム	326本	123本
カラー・リバーサル	123本	92本
カラー・ネガティブ	19本	6本
8 mm シネ・カラー	41本	41本
		(重量　15.8 kg)

今回は，各班毎に隊員数でフィルム量を割り当て，自主的に撮影した。ネパール滞在は15週間で，実動キャラバン日数は7週間であったが，この間に使用されたフィルム総経費の1人当り平均は9,000円強となり，かなり大きな費用となった（第2表）。しかし，実際にカラー・フィルムについて整理分類した結果では，保存価値のあるものは½程であった（第3表）。何人もが重複して同じ場面を写していることが非常に多く，更に，露光条件不良のものもかなりあったためである。隊員別に見ても，最も多くの撮影をした隊員で1,450コマであり，カメラ嫌いの者ではわずか400コマ程度と個人差が大きく，全てを自主放任することは，多くの無駄と無目的性をあらわにすることを示している（第1図）。遠征隊の写真担当者は，どのような写真を何枚必要とするかなど，細かな事柄まで綿密に計算してフィルム量を決定し，隊の目的にかなうよう，各班単位又は各個人毎に，撮影テーマをノルマとして指示強制する必要がある。



（注）使用数はネパール滞在中に撮影されたものに限った。

第1図　隊員別撮影枚数

必要フィルム量は，隊員数と滞在日数だけで決まるものでもないが，一応の目やすとして，1人当り1日平均の撮影枚数は，キャラバン行動の日で12～15コマ，同じ地点に滞在する日は4～5コマ位と推測される。

カラーとモノクロームの比率は，1:1とするのが無難なように考え易いが，最近は印刷発刊物においてもカラーに主導性があり，実際に，視覚に訴えるリアルな説得力は，モノクロームの追従を許さない。又，リバーサル・カラー・フィルムからモノクロームのネガテイブをつくることもできる点を考えると，カラー写真に重点を置いたフィルム計画をすることが望ましい。

フィルムの保存扱いについて

フィルムの現像処理は，大部分帰国後に行なわれるから，長期にわたる保存維持を考えなければならない。フィルムの感光乳剤面は，高温，多湿の環境下で特に性能劣下がはなはだしいので，遠征地域，季節，行動経路による気候条件を考えた処置が必要である。

現在市販されているフィルムのほとんどは，防湿遮光包装されているので，未使用フィルムについては問題はないが，撮影終了後は直ちにケース罐に納め，この際少量の乾燥剤を加え，更に，罐の蓋はビニール・テープ又はセロハン・テープで封じるのが良い。外気が良く乾燥している時は，乾燥剤を入れるには及ばないが，高湿度の地域で，単にパトローネだけを入れて蓋を封じると，ケース罐の中に外気がそのまま保存され，かえって墓穴を掘る結果になる。今回は，乾燥剤を用意していたが，モンスーン後の乾期であったため，特にその必要なしと判断して，ケース罐にパトローネを入れただけで済ませた。長いものは撮影8ヵ月後の現像だったが，1本の事故もなく，保存状態は良好であった。

撮影についての注意と心構え

調査資料としての学術写真は，フィルド・ノートとの対応や，撮影記録内容が適正かどうかがその資料価値を左右する。フィルド・ノートとの対応は，最も基本的な必須事項であるから，特にフィルム毎の識別や各人毎の区別には，混乱のないよう事前に良く打合せをして，系統的な処理が必要である。撮影記録には，それぞれの研究分野による専門事項の説明のほか，日付け，場所，露光条件，カメラ・アングルを記載するのは常識である。撮影に際しては，画面にメジヤーや距離を示す標識旗を入れ，近接撮影をした場合には，更にその全景写真を忘れてはならない。又，カラー・フィルムの場合は，色の再現性を判定するために，色相チヤートか無彩色の明度スケールを同時に撮影して置くと良い。

山岳写真には，測量資料としての要素も要求されるので，撮影位置，方向，カメラ・アングル，日付け，時刻などの記録が必要である。隊の行動記録写真は，どのような環境で何をしたかを，日を追って説明できるような紀行文的狙いをもって写せば良い。

現地民の生活を覗き見する立場をとるスナップ写真は，風俗，文化に関するものとして，衣，食，住民，労働形態，冠婚葬祭，宗教，民俗芸能，民具，交通・交易，親族と家族など，テーマを決めた計画性のある撮影をすべきである。しかし，現地での初めの頃は何んでも珍しくて，どんどん撮りまくるので無駄も多いのであるが，この新鮮な印象は大切にしなければならない。新しい環境も慣れてくると，日常的な事象への関心が薄らぎ，とかく猟奇嗜好へ傾くからである。

縦位置の構図にした比率をみると，ほとんどの隊員は6～11％と極度に低く，構図の点で如何に無作意な撮影をしているかが如実である。このように無配慮な乱撮りをする者程フィルム使用量が多いものである。又，露光不良がかなり目立った。絶好の被写体や失敗を懸念する場合には，数枚の予備撮影をする傾向が強く，フィルムの無駄も多い。特に，

カラー・フィルムは，露光寛容域が狭く，1コマ30円余にもなることから，計器露光を必須と考える。

整理，保管

帰国後の整理に関しては，まったくの泥縄処理をしたが，大きな失敗はなかった。各隊員が写したすべてのフィルムを一括して，カラー・フィルム，モノクローム・フィルム別に，一連の整理番号を付け，この番号とパトローネやケース罐にメモされた個人別の識別記号一覧表を作った。リバーサル・カラー・フィルムは，マウントされてから，散逸，混乱のないように，同一フィルムに属する個々にも同じ整理番号を打った。モノクロームとネガ・カラー・フィルムは，密着プリント印画とフィルムを対応させてアルバムに整理した。

分類・選択は，カラー・スライドについてだけ試みたが，各自が気の向くままに乱撮りしたものの寄せ集めであるから，系統的な分類はできず，単に，共通性のある写真を20数項目（学術，山岳，風俗・文化など）に分けて選び出し，それぞれのグループに表題をつけてファイルに納めるにとどまった（第3表）。

第3表 フィルム（カラー，リバーサル）整理分類内訳

整理内訳

撮影総数	1,956枚
隊保管	957枚
個人保管	918枚
廃棄	81枚

隊保管フィルム分類内訳

学術（268枚）		
	地質	76
	氷河	64
	動・植物	128
山岳（144枚）		
	ダウラギリ・ヒマール	23
	アンナプルナ・ヒマール	18
	スイス小屋からのヒマール	28
	ツクチェからのヒマール	33
	飛行機からのヒマール	8
	エベレスト周辺	34
風俗・文化（347枚）		
	住民	139
	家屋	59
	橋梁	5
	道具	7
	農業	2
	家畜	15
	宗教	36
	カトマンズ	22
	一般風景	62
その他（198枚）		
	隊員スナップ等	66
	一般公開用	132

今後，この種の遠征が度重なって，資料の集積がなされる時には，恒久的な整理，保管方法が確立されなければならない。

映画撮影

2台の8mmムービー・カメラを携行し，2,050フィートのカラー・フィルムを撮影した。これを編集して，360フィートの映画（上映時間30分）2巻にまとめたものは，テープ・レコーダーによるナレーションをシンクロさせて，多くの人から好評を得た。

8mmムービーは，ホーム・ムービーの域を出ないものとして，過小評価されがちであるが，400倍に拡大映写（スクリーン・サイズ130cm×175cm）しても何ら難はなく，30～40人位の公開には充分耐えうるものである。映画の撮影には，少なからぬ経費と労力を要するが，帰国後の報告や一般公開に有効であるから，事情が許すならばムービー・カメラの携行を勧めたい。記録映画は，ラッシュ・フィルムの1/5以下に編集するのが常識とされているが，少なくとも1/3にまとめて，30～40分ものができるだけのフィルムは準備したいものである。しかし多くの場合，フィルムの量は極度に制限されるであろうから，明確にテーマを定めると共に映画内容の概略をも想定して，厳格なフィルム計画を立てる必要がある。映画撮影では，カラーよりもモノクロームの方が高度の経験を要するのであるから，単に経費が安く済むからとの理由で，モノクローム・フィルムを準備するとかえって失敗する。

以上，遠征隊の写真に関し，注意すべき点を考察してきたが，ネパールという限られた地域のみならず，各地域に出かける遠征隊が，今後，この種の検討を更に進められることを期待する。

遠　征　隊　日　誌

8月18日　酒匂，高松，神戸出港。
19日　市村，石田，神戸出港。
26日　遠藤，横浜を出港。
31日　酒匂，高松，バンコックから空路カルカッタに到着，現地参加の小野田と合流する。
9月 4日　市村，石田，バンコックから空路カルカッタに到着，酒匂らと合流。渡辺，米田，益田，神戸出港。
10日　酒匂，小野田，諸事務手続のためカトマンズへ向けて出発。
11日　遠藤，ボンベイ上陸。
12日　酒匂，小野田，カトマンズ到着。
16日　高松，市村，石田，荷物の通関を終えカルカッタ出発。
18日　遠藤は途中で高松らと合流し，国境の街，ナウタンワに到着。渡辺らはバンコックから空路カルカッタに到着。
19日　酒匂，小野田はシエルパを伴ない，空路カトマンズからバイラワに飛ぶ。
20日　渡辺，米田，益田，カルカッタ出発。遠藤，小野田，石田，ブトワールに到着。高松は通関のためナウタンワ滞在。
22日　渡辺ら，バイラワに到着，市村らと合流。
23日　益田，米田，ブトワール着。
25日　全員ブトワールに集合。小野田，米田，タンセンへ先発。
26日　キャラバン開始，ブトワール出発ドバンにて泊。
27日　ドバン——ドウムレ
28日　タンセン到着。祭のためポーター集まらず，やむなく一週間滞在。
10月 6日　三隊に分かれて，タンセン出発。

	A 隊（渡辺，高松，遠藤，バサン・ダワ）	B 隊（酒匂，益田，小野田，クサン・ノルブ）	C 隊（市村，石田，米田，テンジン）
10月 6日	オール泊。	タンセン西方数キロメートルの茶屋に泊。	B隊と同じ。
7日	カリ河を渡り，ザリベバリ泊。	リリ・バサール泊。	
8日	セリビニ泊。	モナワーク泊。	
9日	ボクシン泊。	バルコット泊。	
10日	ラハリ泊。	シワリーク山脈まで南下調査に出発。途中ビバーク。	テンジンとポーターはぐれる。隊員はチュトラベシ泊。
11日	バグルン泊。ドウラギリ新聞の主幹に会う。	バルデン・ガリー泊。	ナワコット泊。
12日	バグルンに滞在。	往路とは別ルートでバルコットに帰る。	ピジュリ泊。
13日	ベニ泊。	アルガトス泊。小野田は別ルートでタムガス着。	ピウタン着。

	A 隊（渡辺，高松，遠藤，パサン・ダワ）	B 隊（酒匂，益田，小野田，クサン・ノルブ）	C 隊（市村，石田，米田，テンジン）
10月14日	タトパニ泊。	グルミ・タムガス泊。	米田，テンジンはピウタン滞在。市村，石田はシワリーク方面の調査行。
15日	ダルバン泊。	ロロ・コーラ河原に野営。	
16日	タルコン泊。	ワギア泊。	市村，石田，マルシバン着。米田，テンジン，ピウタンを出発，ドルジバン泊。
17日	ルムスン泊。	カラ・ポカラ泊。	両隊合流，ビングリ泊。
18日	グルジヤゲート。	アルカ着。小野田，ノルブは別ルートをとり野営。	クングリ泊。
19日	雨のため滞在。	酒匂，益田アルカ滞在。小野田らアルカ着。	ラマチャウル泊。
20日	ドールパタン着。	カラバン泊。	カルシンゲ着。
21日	ポーター集めのため，ドールパタン滞在。	シウリバン泊。	リバン泊。
22日		カバン泊。	ダングシ泊。
23日		チスバン泊。テント。	タコール泊。
24日		プジャ泊。テント。	ダラムシャーラ泊。
25日		アルカ帰着。テント。	ルマルバラ着（ルクムコットの2km南方）。
26日	スイス小屋泊。	ハルビコット着。テント。	ルマルバラ滞在。
27日	5,200 m の峠。野営。	ジンバ泊。テント。	同
28日	グスタン・コーラ南方にて野営。	小野田，クサン・ノルブはドールパタンへ先発。シドウル泊。テント。	石田，米田，テンジン，ダンデイン泊。
29日	グスタン氷河に到着。英国空軍チューレン登山隊に合う。	ドールパタン着。	ルマルバラ滞在。
30日	氷河の予察。	ドールパタン滞在。	同
31日	氷河調査。英国隊の C_1 に泊。	小野田，クサン・ノルブ，ポカラに向う。酒匂，益田，スイス小屋の途中でビバーク。	同
11月 1日	同	スイス小屋泊。伏見合流する。	コールザ泊。
2日	同	同	カークリ泊。
3日	下山開始。遠藤，高松，出向える。	同	バルナイ泊。
4日	氷河調査，野営。	同	ダムチャン。
5日	ネパール・カルカ泊。	同	野営。
6日	スイス小屋泊。	同	ドールパタン着。
7日	全員ドールパタンに集結。調査の結果の検討と休養のため，3日間滞在。隊を再編成して出発。		

	渡辺，伏見隊	石田，米田，益田，パサン・ダワ隊	酒匂，高松，市村，遠藤，テンジン隊
11月10日	ドールパタンを出発。グルジヤゲート泊。	ドールパタン滞在。	ドールパタン滞在。
11日	ボレガニ泊。	カーニ泊。	ジャルジャラ峠泊。
12日	ルクルバン泊。	ブルティバン泊。	ムナ泊。
13日	峠の下のカルカ泊。	カラ・バザール泊。	キバン泊。
14日	峠を越えて，シボ泊。	ワミタクサール。	マランパール泊。
15日	ダルマ泊。	カルバン泊。益田，パサン・ダワ，ガルコット泊。	クイネ泊。
16日	シサカニ泊。	ルパコット村，河原で野営。	ギヤシカルカ泊。高松離れる。
17日	ワミタクサールの東約2km。	益田，野営地に来る。	チンコーラ泊。
18日	ガルコット径由，ナレタテ泊。	滞在。	トグナム泊。
19日	峠を越えて，野営。	ジュアン泊。	ラク泊。高松合流。
20日	バグルン泊。	益田，ラニガート泊。他は野宿。	タトパニ泊。
21日	滞在。	タンセン着。	タトパニ滞在。
22日	クスマを経て，チェリ泊。	滞在。	ガサ泊。高松ポカラに向う。
23日	ローカル・ポーターやめる。	同	ツクチェ泊。
24日	パラタイ泊。	タンセンを出発，ラムジガート泊。	ツクチェ滞在。
25日	ダナ泊。	二つに分かれて泊。	レテ泊。
26日	ツクチェ泊。	ビルコット泊。	ダナ泊。
27日	ジュムソン泊。	益田，パサン・ダワ，ポカラへ直行。ヌワコット泊。米田，石田別ルート，アルチャウル泊。	タトパニ泊。
28日	ツクチェにもどる。	益田らヌワコット滞在。米田らガンディチャウル泊。	タトパニ滞在。
29日	タトパニ着。	益田らポカラ着。米田らドビレ泊。	タトパニ滞在。
30日	ウツレリ泊。	米田らバドウレ泊。	ガラ泊。
12月 1日	ナウダダ泊。	ポカラ到着。	ゴレパニ泊。
2日	ポカラ到着。	滞在。	ビレタチ泊。
3日	滞在。	滞在。	ナウダダ泊。
4日	滞在。	滞在。	ポカラ着。

12月 4日　全員ポカラに集結，キャラバンは終了す。
7日　石田，米田，テンジン，空路カトマンズに先発。
10日　全員カトマンズに飛ぶ。
20日　カトマンズにて解散。

酒匂，益田は12月22日カトマンズを出発，翌年1月20日神戸帰着。これより先，高松は，12月1日カトマンズを発ち，12月29日，横浜着。

米田，遠藤，市村，小野田，クサン・ノルブは，別々にカトマンズを離れたが，同じ船で，3月6日神戸に帰着。渡辺，伏見は12月28日カトマンズを発ち，カルカッタで荷物輸送の手続をした後，別れてインド旅行をし，伏見は空路3月6日羽田帰着。渡辺はタイに滞在したのち，5月12日博多港に帰着。石田は東ネパールの調査のため，8月30日までネパールに滞在し，10月9日神戸に帰着。

調査中および旅行中，次の方々にはとくに御指導お世話をいただいた。（ＡＢＣ順）

R. N. Aryal (publicity officer of Cottage & Small Industries Dept. His Majesty's Government of Nepal)

H. B. Barua (assistant director of C. S. I. Dept. H. M. G)

Dr. G. Dutt (lecturer of Scotish Church Collage, Culcatta)

P. M. Malla (director of Nepal Bureau of Mines)

Dr. J. M. Remy (prof. of Univ. of Mont Pellier, France)

Dr. D. N. Rimal (active director of N. B. M.)

Dr. C. K. Sharma (N. B. M.)

J. R. Sims (leader of the R. A. F. Mountaineering Expedition to Dhaulagiri IV, 1965) and his members.

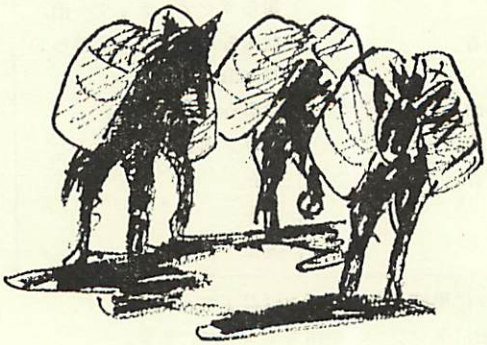
Swiss Associtaion for Tecnical Assistance.

D. H. Tuladhar (Kathmandu)

A. K. Upadhya

K. B. Verma (governor of Palpa prefecture, Nepal)

R. K. Verma (dept. of Education, Nepal)



遠征にあたり御協力・御援助をいただいた法人
および個人芳名録（アイウエオ順　敬称略）

旭化成工業株式会社・旭光学商事株式会社・味の素株式会社・阿部雅子・五十嵐清・池内デパート・池田幸子・石狩ナショナル製品販売株式会社・伊藤組土建株式会社・伊藤軍手工業株式会社・稲畑産業株式会社・株式会社岩倉組・株式会社岩崎・上山試錐工業株式会社・株式会社内田洋行・エスビー食品株式会社・大浦浩文・株式会社大沢商会・小樽建設協会・オートボールペン工業株式会社・株式会社大林組・オリエンタル写真商事株式会社・鹿島建設株式会社・カバヤ販売株式会社・カメラのカネミチ・川喜田二郎・木崎甲子郎・木田建業株式会社・木下春雄・木村利人・協和製菓株式会社・国広祥子・株式会社熊谷組・倉敷レイヨン株式会社・郡是製糸株式会社・興国印刷株式会社・小西六写真工業株式会社・斎藤昌之・株式会社坂本組・札幌食糧工業株式会社・サッポロビール株式会社・佐藤工業株式会社・三共製薬株式会社・サンコーコンサルタント株式会社・サントリー株式会社・塩野義製薬株式会社・資生堂札幌販売株式会社・資生堂商事株式会社・シチズン商事株式会社・士別石灰工業株式会社・島藤建設工業株式会社・清水建設株式会社・シャープ電機株式会社・秀岳荘・常光産業株式会社・新進食料工業株式会社・新保幸太郎・杉野目晴貞・スタンダード工業株式会社・住友金属鉱山株式会社・住鉱コンサルタント株式会社・世紀建設株式会社・積水化学工業株式会社・株式会社銭高組・ソニー商事株式会社・大成建設株式会社・大東セロファン株式会社・台糖ファイザー株式会社・大日本製薬株式会社・大洋漁業株式会社・武田裕幸・株式会社竹中工務店・竹山医科器械株式会社・株式会社田中組・田辺製薬株式会社・株式会社地崎組・千代田紙業株式会社・東亜マッチ販売株式会社・東芝商事株式会社・東芝放射線株式会社・道南バス株式会社・遠山一郎・東洋木材企業株式会社・株式会社富樫商店・株式会社得能・戸田建設株式会社・飛島建設株式会社・株式会社利根ボーリング・鳥居康一・道路工業株式会社・内外編物株式会社・株式会社中埜酢店・中村義輝・浪江章一・西松建設株式会社・日独薬品株式会社・ニッカウヰスキー株式会社・ニップン食糧株式会社・日本光学工業株式会社・日本鉱業株式会社・日本製鋼所株式会社・日本製粉株式会社・日本道路株式会社・野沢石綿セメント株式会社・橋場輝芳・橋本誠二・原田与作・パイロット万年筆株式会社・日立レントゲン販売株式会社・株式会社富貴堂・藤倉ゴム工業株式会社・藤沢薬品株式会社・富士製鉄株式会社・富士セメント株式会社・富士写真フイルム株式会社・藤野破摩雄・藤森元・株式会社不二屋・舟橋三男・ブラザーミシン販売株式会社・文栄堂印刷所・北海製紙株式会社・北海道開発コンサルタント株式会社・北海道ガス株式会社・北海道紙パルプ協議会・北海道銀行・北海道製麺株式会社・北海道石油株式会社・北海道相互銀行・北海道拓殖銀行・北海道炭酸カルシウム肥料工業協同組合・北海道地質調査業協会・北海道地下資源開発株式会社・北海道中央バス株式会社・北海道・北海道電力株式会社・北海道林屋製茶株式会社・北海道百貨店協会・北海道立地下資源調査所・北光製油株式会社・北酒連株式会社・北炭建設株式会社・北洋相互銀行・松崎商店・松沢憲夫・松下電器産業株式会社・株式会社松村組・マ・マーマカロニ株式会社・株式会社マルマン・水野眼鏡店・三井建設株式会社・三菱鉛筆札幌販売株式会社・三菱金属鉱業株式会社・緑川地図印刷株式会社・湊正雄・宮田ローソク店・宮原巍・宮文刃物店・森永商事株式会社・八欧電機株式会社・矢崎総業株式会社・山口健児・山田幸男・雪印食品工業株式会社・雪印乳業株式会社・横内幸司・吉田順五・吉田徳二郎・株式会社米屋本店・渡辺武男・渡辺干尚・ライオン油脂株式会社

CENTRAL NEPAL

Abstract

In this volume, we report the whole account of our CENTRAL NEPAL HIMALAYA GEOLOGICAL AND GLACIOLOGICAL EXPEDITION, which had covered the mid-land area of Nepal from Siwalik to the southern part of Dhaulagiri Himal during the post monsoon season of 1965.

The members of the expedition:

Sumitoshi Sakō	leader, geologist, Dr. Sc.
Okitsugu Watanabe	postgraduate student of geology
Takao Ishida	postgraduate student of geology
Terunobu Ichimura	postgraduate student of botany
Yasoichi Endo	glaciologist
Minoru Masuda	undergraduate student of geology
Hiroji Fushimi	undergraduate student of geology
Hidehiko Takamatsu	medcial doctor
Fumiakira Onoda	resident student in Dehli University
Isao Yoneta	radiographer

We intended to organize a lightly equipped expedition to save the financial load from the beginning of the plan. For this purpose, daily meals required in Nepal were obtained on the spots during all travels. Furthermore, in demand of geological survey, the expediton party was devided into three groups, which traveled from village to village as migratory birds separately. Each groups were so small and lightly equipped that our field works went on quite smoothly, and we enjoyed a good freedom of the travel in spite of difficulties for getting foods. After all, such the way brought us a good effect to save the expenses. It costs less than 286,200 yen for one person. Total equipments of the party weighed only 600 Kg when we left Japan.

Our main subject was to make clear the natural history of the Himalayan range which had originated in the old Tethys Sea. The Reconnaissance Party

of 1955 for Manasulu had brought some geological data back to Japan for the first time. The Chamlang (1962) and Nal-Kankar (1963) Expedition had added further informations. Meanwhile, Dr. T. Hagen, who had widely traveled in Nepal from 1950 to 1958, presented his fascinating and challenging theory on the Himalayan mountain building. All these works accelerated us to go to the Himalaya.

On September 26, 1965, our small caravan consisted of us, three sherpas and 16 porters started from Butwal near the border of Nepal, where we met together after a long travel from Japan separately. At Tansing, three day's walk from Butwal, we were forced to stay for one week by the biggest festival in Nepal. Each group took its own course from there separately, A-group (O. Watanabe, H. Takamatsu, Y. Endo and Pasang Dawa Sherpa) directed to the Churen Himal, B-group (S. Sakō, M. Masuda, F. Onoda and Ksan Norbu Sherpa) to Dhorpatan via. Balkot and C-group (T. Ishida, T. Ichimura, I. Yoneta and Tenjing Tang-boche Sherpa) via. Piuthan and Rukmkot to Dhorpatan at the southern foot of Churen Himal (see folded Map). After about a month, three groups met again at Dhorpatan with some amount of specimens which were collected on the way. We stayed there for one or two weeks in order not only to take a rest but to arrange and check the results of the survey. The routes we had to take after Dhorpatan were decided on the basis of the analyses of the data and the members of each group were exchanged and Onoda was shifted by Fushimi.

On the glaciological survey, we could not have enough time to do any detailed works on the glacier. The fundamental survey of the glacier, however, was able to be done fortunatly in spit of the difficult conditions. The winter made us unable to stay for an enough time around the glacier. All our schedule had been subjected to change one month later because we had lost about a month on our departure from Japan by a ship accident. In the same time when A-group arrived at the Ghustang glacier, the R. A. F. Mountaineering Expedition to Dhaulagiri had decided to abandon the further attempt to climb up the peak and was forced to retreat.

On November 11, when it became cold in the high altitude of 3000 m, we left Dhorpatan to continue our survey. A′-group (Watanabe and Fushimi) and C′-group (Ishida, Masuda, Yoneta and Pasang Dawa) took part of the survey in

the southern half of the area in guestion along the routes which was tightly networked. B-group (Sakō, Takamatsu, Ichimura, Endo and Tenjing) traversed the Himalaya up to Tukucha to the north.

It was the beginning of December when we all arrived at Pokhara, the destination of our travel. Winter was so deep there, where the hight is about 700 m. above sea level. We flew to Kathmandu where the expedition party was dismissed and then each member returned by the different way he preferred.

Contributions and Literatures on our expedition.

Geology: Along our travel routes, geologists mapped in 1 : 10,000 scale and collected totally 300 rock specimens. The geological map of this area in 1 : 250,000 scale was completed. Further detailed studies still going on at Department of Geology and Mineralogy, Hokkaidō University.

Glaciology: The morphological map of the Ghustang glacier was made in 1 : 1000 scale. Glaciological and glacio-geological data were collected as widely as possible. Meteorological observations were made through all the travels· These data are studied at the Nagoya University.

Botany: Freshwater algaes were mainly sampled and are now studying in Department of Botany, Hokkaidō University.

Zoology: A large numbers of butterflies, bees and freshwater planarians collected are studied at the Department of Zoology, Hokkaidō University and the Fuji Women's College in Sapporo.

Literature:

Watanabe, O., Endo, Y. and Ishida, T. (1967) : Glaciers and Glaciations in the Nepal Himalaya I. Low Temperature Science, ser. A, 25, pp. 197–213 (with English summary).

Sakō, S., Ishida, T., Masuda, M., Watanabe, O.and Fushimi, H. (1968): Geolgy of the Central Nepal Himalaya. Report of the Geological Survey of Hokkaidō, No. 38, pp. 1–23 (with English summary).

Ishida, T. (1968): petrography and structure of the Area between the Dudh Kosi and the Damba Kosi, East Nepsl. Jour. Geol. Soc. Japan. (In Print)

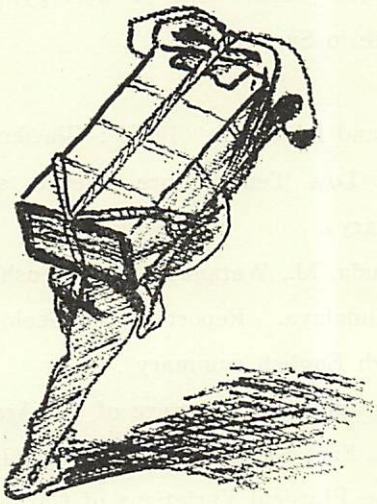
Ishida, T. (1968) : On the Physical Variations of Garnets and Biotites from East Nepal in Relation to Metamorphic Grade. (In preparation)

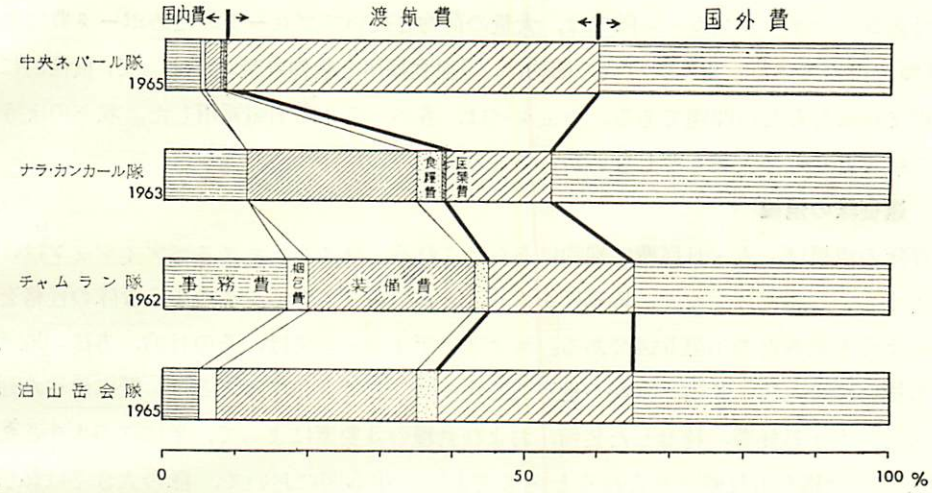
編集後記

1965年12月カトマンズで開散の後，石田がひとり残って地質調査を続行したこともあって，全員が日本で顔を合せた時は，次の年の秋も深まっていた。当時，遠征についての報告書は，学術調査隊でもあるし，簡単に仕上げてタイプ印刷ぐらいですまそうという意見が多かった。しかし，落着いてみるとやはり，はっきり形にのこるものをつくりたいという気持が，各隊員の間に強くなっていったようである。これは，われわれの隊が，ひどい貧乏隊でありながら，何ともいえぬまとまりをみせ，またライト・エクスペデイション方式の成功した1つのタイプとして，きわめてユニークな隊であったと自負したことにもよる。そんなわけで，本格的に編集にかかったのは1967年の秋になってからであり，正月休みのかん詰作業などしながらも，今日になってやっと完成することができた。

帰国後も資料の整理などで現地同様奇妙なまとまりをみせていたわれわれの隊も，はやあちこちと出かけたり，あるいは就職したりするものが多く，現在札幌にいるのは，酒匂と伏身の2人だけになってしまった。それぞれの調査結果も順次まとまり，新らたな調査隊もすでにネパールを訪れている。今後も，引続き各種の調査が計画されていると聞く。この書の出版とともに，われわれの隊も文字通り発展的解消をとげたといえそうである。

この書のカットは，北大山岳部の寺井啓氏によせていただいたものである。また，北海道立地下資源調査所の五島泰子嬢には，図面の製図や装訂について，少なからぬ御苦労をかけてしまった。なお，印刷にあたっては，遠征のさい御援助いただいた興国印刷株式会社に再び多大の御協力をお願いすることになった。とくに，斉藤仁策部長には，いろいろ御無理をお願いしたにもかかわらず，親身にお世話をいただいた。これらの方々の御好意のお蔭で，非力なわれわれにとっては，過分ともいえる本ができあがったことを，何よりも喜びとし，感謝する次第である。（酒匂記）





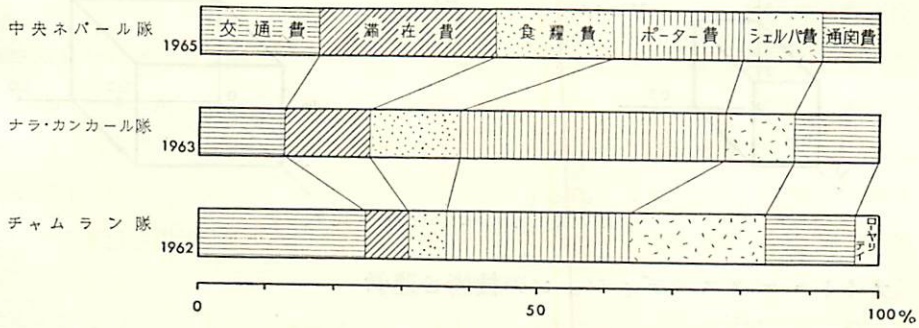
第3図　遠征隊経費の内訳

り手はないが，注意せねばならないのは，渡航費と渡航手段は時間的余裕によって左右されることである。エクスペディション自体に高い効率が要求される時に，いくら安いといっても船旅に貴重な時間をとられたのでは，金におとらぬ高い代償を払うことになる。

4）国外費

国内費と渡航費を除いた額が，手持ち外貨として携行され，旅行中および現地でさまざまな目的に使われる（第4図）。都市滞在費を節約するには，滞在日数を短縮する方法が有効かつ手っとり早い。今回，カルカッタやカトマンズなどで滞在が長期にわたったところでは，カレッジの寮に止宿したり，間借り自炊によって，経費の節約に努めた。それでも，交通・滞在費が43％と高率になっているのは，出発時の齟齬のため往路の都市滞在が増加したことにもよるが，ポータ費などの節約によって，相対的に滞在費の割合が高くなったともみられる。

現地食糧費が，18％と比較した各隊の中で最高値をとっているのは，我々の場合当然といえる。ポーター費は，食糧費とともに現地キャラバン中ほとんど唯一の輸送力として不



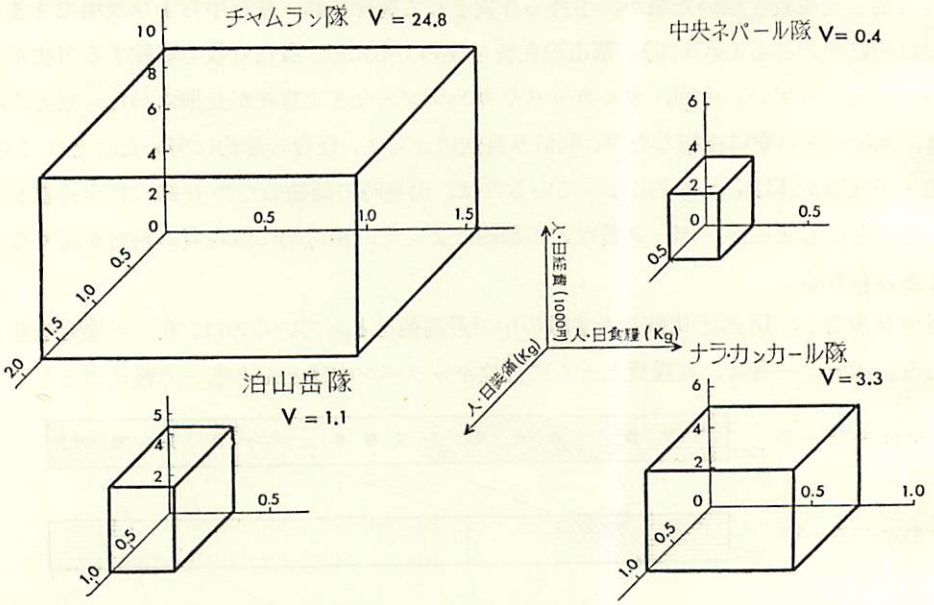
第4図　国外費の内訳

可欠である。ナラ・カンカール隊では，大量の荷物と長いアプローチのためポータ費は実に40％を占めている。ポーター費の節約は，現地食採用と装備軽量化によって，積極的に取り組まねばならない問題である。シェルパは，各パーティ1名宛雇用した。我々のような隊ではことさら多人数を要しないからである。

5） 遠征隊の規模

遠征隊の規模は，人・日経費に端的にあらわされる。ライト・エクスペディションは，規模の小さいことだけでなく，機動性をもつことが信条でもある。このような隊の性格を図示しようと試みたのが第5図である。エクスペディションでは，その目的，方法，地域などの違いによって，装備や食糧の量がある程度独立して変化することは，既にのべた通りなので，人・日経費，持参した装備，および食糧の3要素によって，単に隊の大きさだけでなく，性格をも反映させられると考えてよい。第5図において，隊の大きさは体積に，性格は矩形の形態にあらわされている。つまり，体積が小さく，かつ縦長の形のものほど，貧乏で身軽な遠征隊であるといえる。

複雑な諸要素をもつエクスペディションの性格をこれだけで比較することには問題があるが，上にあげた3要素から見る限りにおいて，我々が当初意図したライト・エクスペディションは，ある程度達成されたと考えて大過ないであろう。



第5図 遠征隊の規模の比較

Ⅳ ライト・エクスペディションの技術と運営

エクスペディションは，単なる旅行と異なり，目的遂行のための行為であるから，時に

はかなり思い切った行動や妥協も必要である。要は，その時どきの情勢を敏速適確に判断して行動することである。この点について，今回の遠征でとくに気のついたことを簡単に述べたい。

輸送は，国内輸送，現地までの輸送，および現地での輸送にわかれるが，問題は後2者にある。我々の場合荷物も少ないので，現地までは携行旅具として運搬する予定であったが，予定船欠航により隊員が分散して旅行する事態になったため，別送にしなければならなかった。これに加えて，カルカッタの港湾ストなどもあり，荷物が現地に到着するまでに貴重な時間をかなり無駄にした。軽装備隊では，隊員と荷物はあくまで行動をともにすると同時に積みかえを少なくしなければならない。この事はインド国内についてとくに強調される。

ポーターの賃金と供給力は，地域や季節によって変動する。我々は，ナラ・カンカール隊の経験による西ネパールの状況を基準にしたため，ポーター費を過少に見積ってしまった。また，ネパール最大の祭に遭遇して，ポーターを集めるのに苦労した。これらは，事前情報集収によって防止できることである。ポーターは，40 kg 位を平気でかつぐものがいるが，かえって効率が落ち，機動力が生命のライト・エクスペディションには適さない。ポーターの数は，荷物量とスピードとポーター費の適正な調和によって決定される必要がある。

このほか，カトマンズ周辺部では自動車道があり，またカトマンズ——ポカラ——タンシン——バイラワ間において現在建設中の道路の一部を使用できるが，ネパールで自動車を使うのは将来の問題である。

シェルパは，言葉の問題もあって，その役割は重要である。キャラバン中は，シェルパを通じて常に前方の地域に関する正確な情報を得る必要があり，とくに現地食方式の場合これが重要である。

また，エクスペディションにおいては，不測の事態の発生は，まずさけられないことである。我々の隊も，準備段階から帰国まで，さまざまな番狂わせにほんろうされなければならなかった。

第1に，すでに述べたように予定していた客船が事故のため乗船できなくなったことである。このため，新たな船捜しの労力と予算をはるかに越えた渡船費を要したうえ，荷物を別送にしなければならなかった。これによる損失は渡航費だけで12万円にも達した。そして，予定の行動が1ヵ月以上も遅延したため，氷河調査はきわめて不完全なまま断念せねばならなかった。第2には，インド・パキスタン戦争がある。戦争開始の情報は日本出発後に入った。幸い，直接的に大きな支障は受けずにすんだが，ネパール周辺の国際政情が不安定であるという現状を考えると，この方面にも注意を怠ってはならない。このほ

か，帰路に予定していた船賃が値上げされたり，帰国後であったがインドルピーが切り下げられたという事件もあった。

このような不測の事態は，費用に悪影響を与えるばかりか，悪くすると目的の達成も困難になる。これに対しては，常に余力をもって行動し，隊員の力がすぐさま新らしい事態に対して集中的に発揮できる体勢を保持しておく必要がある。ライト・エクスペディションは，その点において有利なシステムであるといえよう。

だが反面，ライト・エクスペディションは，大規模遠征隊のもつような余祐がないため，小さな事故や情勢の変化が全体の計画に大きく作用するという弱点をもっている。したがって，計画立案に当っては，何よりもまず正確な情報を集め，費用の最低限度を厳密に計算しなければならない。正確な費用の裏ずけは，その後の行動を判断する基準となるからである。この意味で，事前の計画の良否が，ライト・エクスペディションの使命を制するといっても過言ではない。

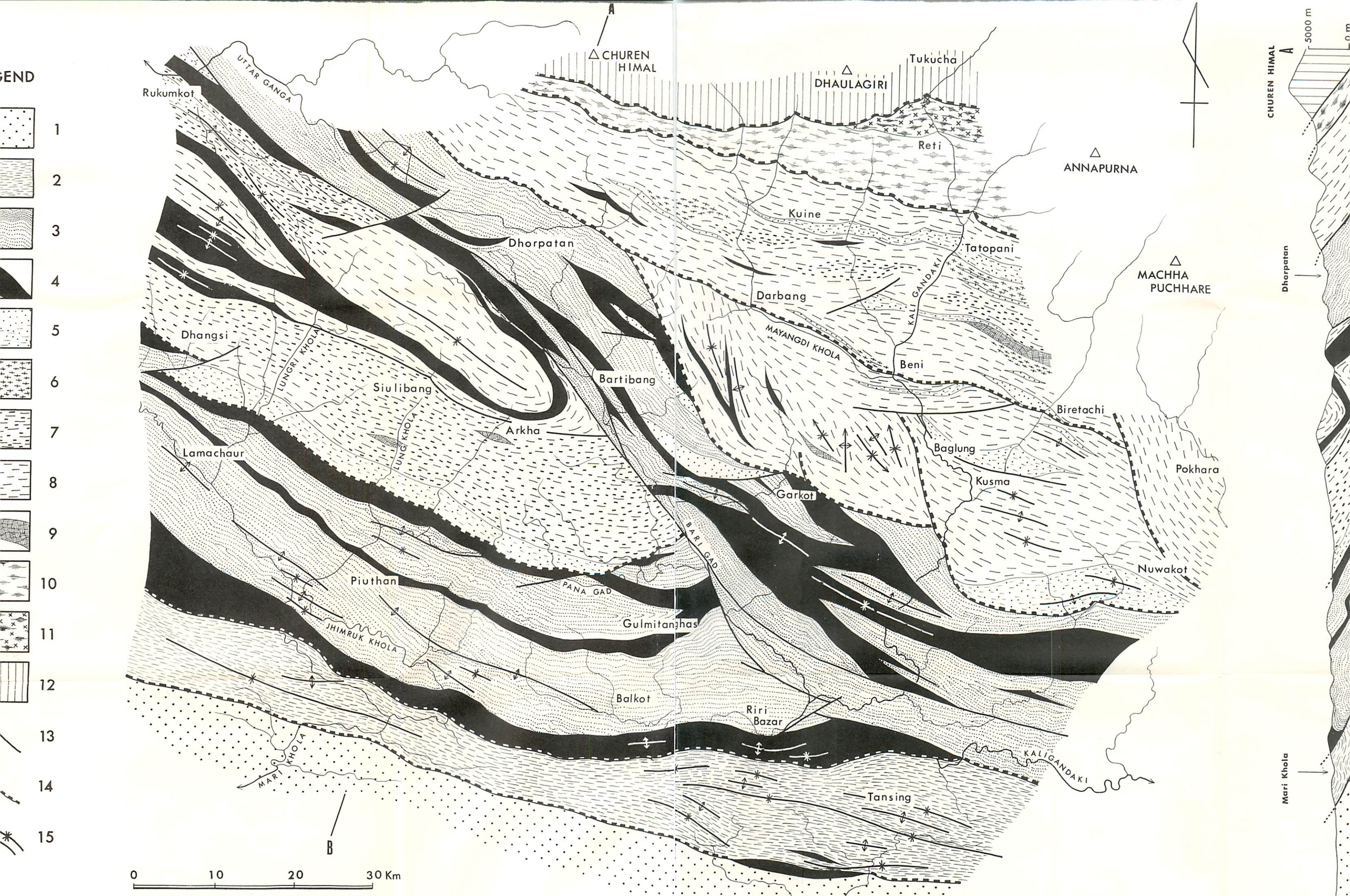
おわりに

以上，我々は装備，食糧，費用および運営技術の各方面から，我々の隊の報告を行なうとともに，ライト・エクスペディションについての考察をして来た。これを綜合していえることは，かなりの無理と無駄があったとはいえ，軽装備・現地食主義という我々の当初の基本方針が，かなり成功しているといえる。

ライト・エクスペディションの利点は，目的とする調査をスピーデイにやれること，通関，輸送，その他に要する費用をいちじるしく軽減できること，各種の状況変化に臨機応変に対しうることなどであり，さらに現地人との隔絶をなくす効果をももっている。これらが，エクスペディションを身近かに感じさせ，その機会を増大させることは，とくに有益である。

一方，ライトエクスペディションであるが故に破綻も生じやすいという欠点に対しては，たゆまぬ情報集収の努力と計画性とによっておぎなう必要がある。そこには，隊員各人の柔軟性とともに全員の有機的なつながりが要求される。

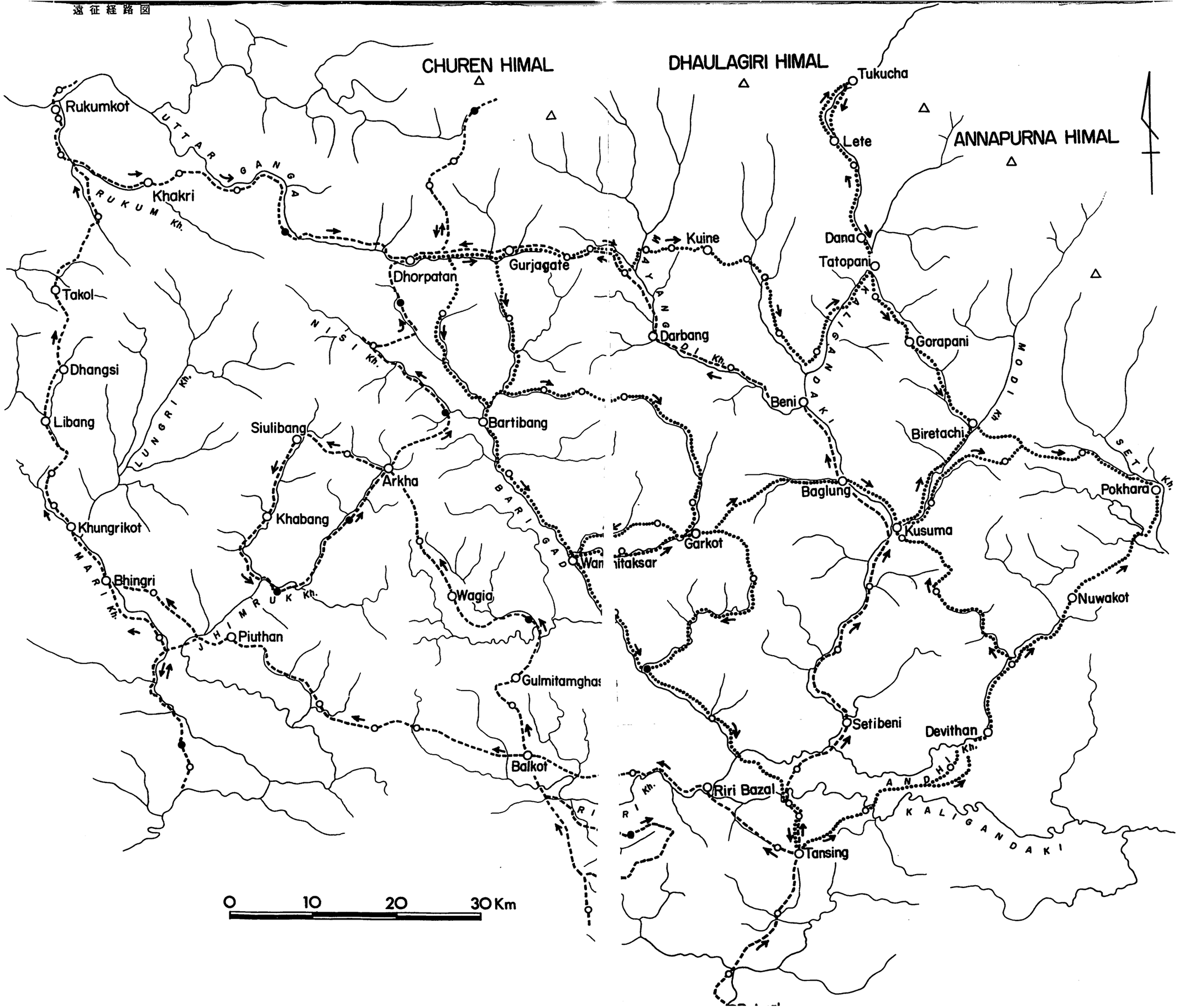
これらの点を充分考慮し，計画実行するならば，我々のような調査隊には，ライト・エクスペディションがもっともふさわしい形態だといえる。それはまた，若い探検志願者に，ひとつの光明ともなるであろう。



中央ネパールヒマラヤ地質図

1．シワリーク帯（泥岩・砂岩・礫岩）
2．変粘板岩砂岩層　3．千枚岩層　4．石灰岩（大理石）　5．珪岩
6．角閃岩　7．含柘榴石黒雲母絹雲母片岩　8．緑泥石絹雲母片岩　｝ヒマラヤ帯

遠征経路図


CHUREN HIMAL
DHAULAGIRI HIMAL
ANNAPURNA HIMAL
Rukumkot
Khakri
Takol
Dhangsi
Libang
Khungrikot
Bhingri
Piuthan
Siulibang
Arkha
Khabang
Dhorpatan
Gurjagate
Bartibang
Wagia
Gulmitamghas
Balkot
Kuine
Darbang
Beni
Tukucha
Lete
Dana
Tatopani
Gorapani
Biretachi
Baglung
Kusuma
Garkot
Pokhara
Nuwakot
Setibeni
Devithan
Riri Bazal
Tansing
UTTAR GANGA
RUKUM Kh.
LUNGRI Kh.
NISI Kh.
MARI Kh.
JHIMRUK Kh.
BARIGAD
NAYANGDI Kh.
KALIGANDAKI
MODI Kh.
SETI Kh.
ANDHI Kh.
KALIGANDAKI
0 10 20 30 Km

1968年6月15日発行

中央ネパール

発行者　中央ネパールヒマラヤ地質氷河調査隊
札幌市南11条西3丁目
北海道立地下資源調査所　酒匂純俊

印刷所　興国印刷株式会社
札幌市大通西8丁目